高藥の部

秀藥

ホ 2
574

狂哥といへるものハ実情の有様を世に示して詞ハ雅俗
えらぶにいとまあらざるより狎されることもあらしいかにしん
釈門乃俳諧ものゝ言葉あまた作ありされバんを
しらしてしらぬかたもあらされバあらたまの世ふいてより
八雲のしきしまの道にしてことばの俗なるをもとゝし
もちひられるゆゑをもつて似たりされども是又時宜の
きこしめさるゝ里花歌諧の自然をみるにたよりなき
めしもあらバ又むかし水無瀬の宮所にて有心無心の
名を命せられしことハ

井蛙抄に

六条内府亭に後鳥羽院御時柿本栗本とて和歌

574

柿本ハ歌ちの神也を有人と名づく栗本ハ狂歌
これを歌人といふ有人ハ後京極慈鎮和尚竹下千鳥の
秀逸の歌人なり歌人ハ光親卿宗祇卿紹巴等
なり水無瀬の和歌所ハ歌をへづて歌人なり歌ハ
和歌なる松なり風吹てこゝふなりしき日有人の方
より

慈鎮和尚

人まちとてゐるこの中おまきいろふきけとう歌乃松風
といふ歌ゝよみておくる

宗行卿

人まちとて人をのさまで年しおれバ空さゝぬぞ形の松風
と歌を添へる年しおれどが

なるまちさいろ〳〵きどを上皇勅定ありて
ろゝをせしゝをひろり

とありされバ狂歌もんのくるくるとゝるもあるぞたゞ
正風なるざるなり又狂歌を俳諧とゝゝハ

俳諧ハの和歌所要ハ

俳諧ハ狂歌なり俳諧謹歌

おそゝりハいゝゝ稲を云そやゝん曉ごゝふとけゝくとゝふ

又ゝけゝくゝもいふ

とゝりされバ狂歌ハ俳諧歌なりそゞ中ふくまくの
体あり歌なるあり俗なるあり代〻の撰集又家〻の集
又紀行などの中なる俳諧歌も体〻ゝれり

古今集俳諧部

山ぶきの花いろ衣ぬしやたれとへどこたへもなしてもちまゐして山ぶきの花いろ衣ぬしやたれ　と上へ入りて詠ぶ山吹の花色と口すまして　とをうけ今集より又

新続古今集俳諧部

人の海老をこひ申せしに

くるまゝ十九やうしてのしめぶ

世の人はうみの中きあしいふあれどまづさちもたるさを有る

けいふめれ　とあるこゝにハらへバとうたすり　ふめれ　の

二をうしハふめ　のうしべすり　べれ　のあしべあり

同集ホ

清輔卿

大たうへ切上たるハ高きもれバやせうそりあるものゆゑ

長ハ大系山と八源つとかけ今て高づくしひてやせたる

こと申いひすして八源とそりあるとを系ふこあるてあり

後拾遺集俳諧部ホ

三条院の宮内上のつぼねをそちく

さぐりうるくく接をを入して　まうり

いでゆかれバ

反芝やおどろ〻〻髪のあらされてうゐる春こそ今ぞ盛なれ

小大君

けあらされてハあれ||てとしのくれとあり らされの二年之〻ハ

らさのくゝらまりられのくゝれあり

同集小弐式部

さあらぬ〻も絶しぬるの恋いとゞしくつきあどろ〻かはのこゝろ

けつきあどろ〻ハあやもとり和こゝろ的ハ中へやまゝ

こゝろあのくゝとあめてふをこゝろ

新拾遺集俳諧歌

春のゆくゝるあゝしく晩のほゝ西の春

たゝゝゝ世て有よりとおちせゝれゝれハ

反原仲文

ゝゝゝゝるのふれるあゝしく秋ゝゝゝゝ西ハひとよくあるあるあるける

見ハゝゝゝとかゝ白秋白きとよく似るとゝゝふ西ハよく

春ゝゝるゝものと初ふゝゝとおもてあることあり

後子義集俳諧歌

道因法師日吉の社に合ふよ[illegible]

よみてまけふ久列と申てゝひつゝハゝ久る

後志法師

春ゝゝゝゝゝゝ市と尺ゝゝがゝふかちのあれこそおやゝかりゝれ

見ハゝゝゝ秋市ふゝゝ市ふゝゝ海をとけ合て[illegible]合ふかちの

ちかくしをよちるあり

接待女集ホ

きりふきく戦ガ渉をくちくんきバちく山川のちるまぞありける

見ハ戦のえん弾をうけ合て渉の岸くまをよちるあり

道真准后社廻國記ホ

あぎなくさ坂とらつるホをこゆとてある

同行ホいひけつくしるる俳諧

杖をぐふあり〜といとふ山とて あぢなさ坂ぢふりまぞゆく

同記ホ

ちりこだち坂といくるところあてきく

俳諧所をよみてんホ見を付りける

ゆぐるさホ宗いそぐくもや見ホ

同記ホ

べあが谷をとほりそけたひ坂をこゆ

くて又俳諧

新ホめるべあが谷よりくたりあてくやくもこゆるけたひ坂うちホ

とふりこれくれ俳ハ今の狩衣見ちりこれくふまぞくて

狩衣ハ俳諧所あるこくをちる屋〜

玉依日記ホ

いくづふ日をあくれバ人くあをあぐちつぞ

あるそのくそ乃らくる

立ぢくちぬきバちくぬるふく風を波とハ見ホどもあやふくん

ふうひ和歌集のうちにふるいと似つかはし

とありられたる俳諧歌ありかくあるこゝを三十一文字に

つゞりてんをやうこゝハ和歌も俳諧もおなじことなり

○俳諧歌よみようハ

一の句　二の句　三の句　四の句　五の句

まつさむし言のはあらぐひす菜　福ハほそくして花紅もひろけど

一の句と二の句をつゞき

三の句と四の句をつゞく

つゞくとハ　まつさむし言　うぐひす菜　福

と句の文字のさゝれぬやうにふるべし　けそぐひ乃句ハ

文字をうけ合せるを今句より入れ　初句ゆびの

ちもぐらハ土ぐられ　ぬ体ようよむべき　あり付体をんな

て後ハ初句文字入りけ　あくびもつのさゝれ　さゝ

めづらしき詞ものでくるものあれバ　の俳諧をよむ

べしんぶんにありしれぬ句くハ　の俳諧をもつて

ゆてうまつることあり　んの俳諧ハ

法のうちとりあつめの

風体

をゝ世の俳諧を体を失へり俳諧とハ

ものハかやうにこそとゝ世さまひろ

よみくちぶ

ゆきて向のあるハ詩つきも古てろ有ゆの月やうゝん

ある人云 是ハ 後水尾院御製ものと云ふ

とあり これらの作を かくべし 狂歌の狂ハ古き狂

歌をおもひ〳〵えて千年ふるまつ ゆゑ

ここにあるふるまつとあり ふるき歌ハ てにをは を

半〳〵くてあの〳〵紀伊のおもきたり 紀伊ちふ文章

ゆゑ といふ ものゝ千物 ゆゑ

秋の夜乃かさこそ独月のかゝくも 庭でゆ 水の庭ふ 出もむん

といふ狂歌 ものかゝられ月のかゝられも 庭てゝ ゝ ゞの

庭ふ ものむ ん といふ ことの おゝ〳〵 ゝ ゝ れ ゝ ゝ て ん の 狂

あるをゝるべし

○ 古き狂歌ハ

二十四番 雑食職人尽狂歌合

〃 花述懐二絵狂歌合 三十番

〃 建保職人狂歌合 五番

〃 永正五年正月二日狂歌合 拾番

〃 七十番職人尽狂歌合

〃 光廣卿職人歌仙 三十六人

これ〳〵の歌ハ古き狂歌なり〳〵 たの歌合の中を

あきられ 拾ひて へゝ ゝ ハ

新古今狂歌集

○ てにをは のしハ

てふをてのゝ ゝ の〳〵ハ 神代より和のゝ ゝ そ あ ゝ て

こゝ紫のめでたきもとゝ成給へるこゝハ定まり
ふるこゝのありさまひのもがゝハその初めのゝく
きもとゝ成給てひゞもるこゝもやあらんと此次可
引給をあほくいぶかしてそこゝ紫の花とまとに
きるゝをつけてさくゝ成給ふ格を志れる又そこゝ紅
青の中ゆもゝけていづきそこゝ白んやきらんた
ゆふきるゝをつけてうり引給てんたべ

てんたくさくもゝ
おもゝちはやふる神代もきゝもさ
うのよもひあれをとうまと弁れ世を
かよねぬまこいかしんのふゝうゝ
あもてゝてたゝんふゝうゝ
うゝたおかりまれをとゝ世ゝまんする
ゝゝれうゝを神いゝたゝふのこゝまれを
ふあゝたもるこゝもあゝん

はるの川のふちにあそぶとも
くさ〻をしたしみすみにうゑ
さくおもしろきふうちゆ〻へ
まよひきたる夕日をとゝのれ
こゝろんうひきたるをいそぎ
ゐるまさかれをかぞといふ人
おほのふをとゝのへうゝ
河れをの花といふ物をすんあるを

けるをあれそてをはかきりを
つゝゝをるものふはありをそ
ゝはにいんとまハはのれとをの
ひゝふゝのやをかんゝをむをひ
辞をたゝひゝ言ふをゝいさゝう
さゝひゝ集ゝ深ゝて示をその
定まの集をその中の有もをを
名つくいををあををハ和の

うちにてうゑおむ[illegible]とものこと
[illegible]の[illegible]あるこゝろひのうひあれと
おもふ[illegible]ありける　時[illegible]
八月三日十五夜　本願しるし

おほむね

てにをはのそのくハ詞おほかれど　[illegible]　後ぞのやうに
[illegible]をく詞の来ぬ[illegible]つゝ物り二つゝ物れるをさへ
くハしくいはきバ今さらいふべきみあらぬどらんとけりとゝ善新
御ぶんれ中[illegible]ぬをさるを失　初学のもがつハ詞の来ぬ一言小
いとらバ[illegible]ることの安らんらそて詞乃来を一言ゝそをるこのゝ
おもむくはゝ奇のまゝゝのゝ[illegible]ゝ深しく[illegible]
やうゝあられバ詞のおゝ来をのゝいくるくされど寄めさわりてハ
詞おほをおほく引出て[illegible]ゝ後ハ[illegible]文ゝも尺べをとゝ
まゞ一紀初学のおゝ来ゝゝぶんを[illegible]ゝ物り二物り紀
ちゝ[illegible]尺つれバ引寄乃ちゝ[illegible]ハくれゝひの[illegible]
尺ぬゝものゝ[illegible]文ゝハ[illegible]ゝるべきあゝのいゝおゝこれバ文中も

川而て絹のおときゑの絃つゝきつゝくきしゟ档を尺合て
んなべし

絹本末

上よりぞのやの何の音をかゝる時ハ平にぬハ 引ト搔ぶ板之
されハ引新ハ る 新るゝん 又つ ゝる まる
糸 あ 中 さ あをきぐひも 多 糸あるぶ之

本

ぞ	の	や	何

末

く
す
つ
ぬ（平ノ）
ふ
むん
る
き（現在）
し（過去）
らし ましし

現在ノき ハ くき つるき べき よるき ふるき あるき
あれきかすき 思ひき ありき すぎのあひのきこえ

過去ノし ハ みし てし 思ひし かりし ありし
えし ゆし 見えし ゆくし ざりし すぎのあひのこえ

本

も	を	従ノ

末

く
すず
つ
ぬ（平ノ）
ふ
むん
ゆ
る
り
き（過去）
し（現在）
らし ましし

過去ノき ハ みき てき 思ひき かりき ありき ありき
えき ゆき 見えき ゆくき さりき すぎのあひのきこえ

現在ノし ハ うし つらし べし よし 悲し
うれし うすし えびし えし すぎのあひのこえ

上ノかゝりみよりて過去きぐ過去ノし。現在ノき、現在ノし ト かゝるとくなべし

こそ 本

末 け せ て ね へ め れ き し し らし ましう

○こそハ ことをたて入ていふて ことおとひとつにまじれるを指をさして
それぞ玉なるとおもひ又手玉揃ゑのひかりあけて
花ぞ匂ふなれといふほどの差別へされを ぞハひろく
こそハせばしと心得べし 是ハ御待給の由きく

○ぞトかかりてハ なれ くれ 恋しされ なぞく れどト むすぶべき事を
なき くき 恋しき なぞく きゞト むすべるハ けれノ なぞ
けョ 五字一言よりて けョき こ かゝれること めり ぞト
かりて きぞト むすべるハ 皆よくもあらぬ事しるべし されど

おへつゞる時 けれョ きト むすびて むすびなれば下へ
つゞる時のこ ハなり ぞ なる例 あることく
きト むすべるハ 日本紀 萬葉集ニ例あれバ 本系の中ニ
入られど用捨あるべきことなり

○こその むすびニ しトト むすべるハ 詞玉緒ニ
けにハ いそ由 なきのにて なみ なり 添ちるく かゞ
ぐひの 心あらむ ろく 皆由 けが そうて よむべし みゞる八
ひぐらしえト有

○なかト つハ 詞玉緒ニ 上ニかかり そ ぞ 徒の之ト有

も ぞ 徒(たゞ) の 本

末 つ なる

詞玉緒ニ 上より ぞ や 何 こそト かかりて
つト なると むすぶこともありト有

○【を】ハつゞけたゝもろ〳〵あるべし
年たゝれるき　対たゝきそつ　ものゝおひ物たゝを
神代もきゝも　言るゝもくらし　ものゝおひ物をゝを
○【後】とハ　そのゝやゝこそたゝと　ものもそもそもびゝて後びて
下句もあれ　よるもあれでゝたゝふゝと　ものゝ
又ゝもかりて切て而ゝることを言ゝまゝ
そのゝやゝこそたゝ物ゝかりをひとつゝ後と
いゝくゝべし
○【何】とハ　なゝ　なゝぞ　なゝは　いづく　いづで　いづれ
いづく　たゝが　たれ　ものの新ひゝゝびの羽をひとつゝ何と
いゝくゝべし
○【や】ハうゝどいやをつゝ　又ひざまかゝりて半ゝやとのゝ人
しゝかゝもゝびみかゝゝぬハやゝ物乃まゝらゝべし

【の】ハつゞけのゝハあゝべ
雪のちく　花のらゝん　ものの新ひ物のをつゝ
○そのゝやゝ何ゝこそ　ハあるき格ゝ詞とゝべし
○そゝやゝ何ゝこそ　よりもの　ハかゝ格乃詞とゝべし
○のゝよりもたゝ　ハゝろき格ゝ詞とゝべし
○そゝのゝや何ゝこそたゝ　とかさゝゝ時ハあるき格ゝ　ゝみ
よりてもまそぶとゝべし
○定まる格ゝたゝれ　てゝ　をゝとゝのゝまゝとハ　ゆくぬ
所を詞ゝ　変格ゝ　ゝ変格ハ格ゝまゝれてゝのゝれハ
このゝ物ゝゝのゝてゝゝを添て　ゆゝとゝゝのゝゝれハ　接
第ゝもいゝとまれゝゝゝ　ゝゝゝ詞ゝ物ゝ　変格ハ八代　集ゝ
ゝゝそ三十そ　ゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ有

○なれ なむ いづく あつらへたる詞に他をさして云時ハ下の
むすびにかゝらぬ一ツの詞あるがあり又 いで
いひあへて とゞむる詞ハ初めにかゝる事もあり これも
下のむすびにハかゝらぬ一ツの詞也
初めに同しうして ノ里語ハ ナニトゾシテ
初めに同うで ノ里語ハ ナニトゾ
又こゝにふこの いで いひかけてハ下をもむすぶ格也

○ぞ。の。や。何。ノむすび詞ハ中に
次左ノき。る云ハし。ぬ。是ノぬ。又る。ける。く。
ふ。む。ゆ。る。す。け。せ。め。つ。れ。る。
是等ハつゞく格の理也 上より ぞ。の。や。何。
出る字かゝる時ハむすびと成りて切る也 又活びちがひノ

あへづくるゝことなるもあり也
○を。ぞ。後ノむすび詞ハ
次左ノし。る云ノき。そ。ぞ。く。つ。是ノぬ。ふ。む。ゆ。
る。り。是等ハつゞきも切るゝ格の詞也
○引寄於上の□。此下ハ ぞ。の。や。何。を。ぞ。後ノむすび一ツ詞也
後於語に ふたゝ一ツにして いふせるを見合てしるべし
○まし トいふ詞ハ んかし。△ めかし。△ ノでまりたる詞と字ゆ まし。△
むか。ノ反シ まし 又 めか。ノ反シ まし ゝくつゞめて
いへる詞ち

古今
世の中に絶えて桜のなかりせば春の心ハのどけからまし（メカシ）

今集
年くれぬとだかりこそハきかまし（メカシ）乱月のかへにつもらざりせば

○らーとふ詞ハ らん らーん らめらーん ノてまるる詞と呼ゆ
二重反 それで らむノ反シ るノ反シ らこ 又
らめノ反シ れ れらノ反シ らこ かくてめて らーと
いくるとのう

古今
こよりの山乃ちりをつるらーち里きくちりゃみるる
後撰 ランカシ
れれ根西風のちりをまるせてハ三田雁こそ秋ハひくらー
ランカシ

○けらーハまくみいるる らーとハ前こ
けらーハ けりらー けるらー けれらー
てまるる詞と呼ゆ

○とハ まくて切る倍をとと交てまくてるるこの
又むまびーとをとへふくまるせてとりるふ上のかり

後撰
ともみこそ花をもえりとまるうんのこるこのゆるふをしきまるる
るみごとくこそ姫とまるびて切るるをとと交てるへてる
まり 又むまびこーをとへふくるせてるハ

古今
ちひてりくをとめんさらーるれをるとまどるるでちれ
くるるくいれをるまるんとまでふまでちれとらふを
まるるるるるるんとふむまびこーをとへるくまるせて
まどーまでちれとるるこ

○とハ 何 れるるみあるハむまひ何ふハかるるびまるくバ
ゆとる いるる たれる らーるる 又
こーをとへるくる たるりるる まるのたるびハッの
詞まるりのむまるひるかるるる又る文まるを海てきく

こゝろもあるべしかゝるいとぎせる川詞をえらんで名
べー

○引歌八代集撰集家々の集又ゝの外りの所ーきさ
拾遺のこゝろを見れの詞をもいとせり所はことゆゑりてハ
ゆゑ出を添又上へうりて当ることのまぎれそれ所ハ
□武市をつくくさくくさ格式人名へし　初学のゆゑも
がゝ四段ふまんとおりふことハ同じもて城いくらびを
うけれハくるさしとおもひきもひそ

曽之部
乃之部
也之部　加之部
何之部
古曽之部
哉之部
都々之部
波之部
毛之部
徒之部
上皿帰留天尓遠葉
五十字韻

曽之部

く	す	つ	不ノぬ	ふ	む(ん)	る	既至 き	過去 し	まし・らし

是レノぬ゜ハ上々より ぞ゜の゜や゜か゜ 等にて切る時ハ ぬるト
むすぶ格之 又 つ゜る゜る゜ まる故 詠ひの詞 新も 図の示にあり

ぞ

古今
あまつ紀の時乃ちまぐさこそねがひ君がまちゐ夜ハ乱ぞなろく

○かゝりうけてむすぶるハ

く

新古今
うつろふハ人の心の秋なれど いまハよそにぞきくの上の露

金葉
まち雨にぬれてさくらん山さくらのえだしのあらしこそふく

此 こそ゜ハ ひやぶむ之

す

新拾秋（？）
神よゝるふハあふひのとちぎり八十氏人のかざしあぞさす

す

古今
ちはやぶる神ぞ神にまかせ てなす事ハせし紀に心をはつせすれバ

秋上
かはるれバしかなのこゝぞつくし 格ざしてあふべき衣ど紙かさねバ
是ハかをのこぞ゜つくす 卜いたんとしてかゝりうけてむすべり

つ

後撰
天の川岩こす波乃たちゐつゝ秋の七日のけふをしぞまつ

不ノぬ

古今
さくら花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ
衣゜ぞ゜ 等を下にてかくる時ハぞ゜卜むすぶ格之

○かゝりうけてむすぶるハ

新古今
こゝろさへやおもひふんをさてのこしハえぞやまぬゐの井の志がらみ
是ハえぞやまぬ゜卜むすぶ不ノぬ゜をば上よりさしかゝりうけて
むすべり 又 こゝろさへや 詠ひのやへ 詠ひにかくをうけて

ふ

古今
はる来ぬと人ハいへどもうぐひすのなかぬかぎりハあらじとぞ思ふ

ふ○　む○　んむ○　らむ○　らんむ○

○いひけるとむすべるハ

古今
恋ゝてはれよそ見ぞあふ坂のゆふつけどりはなくぞなきける

新古今
あけぬれハむなしき床のこぞ涙のぶ事業ある恋の露に袖ぬらしつゝ

恋之
■そのなざるいひけハ

後撰
又かくてを越しとぞ思ひつぎ秘の方をきりくさくんちのこして
是ハイ本ニをしとぞ有りぶト有　いひけるハあしき

土佐日記文章
「ひと文字をだに知らぬ者のしかあしハ十文字におぶてぞあそぶ

古今
いにしへの中中すべ志きづめりけれども人のおろ越志る人ぞなき

秋之
うごきなきいさ君の名をも君ぞえん乙女の袖ふるをで結くとも

古今
ま日神に今年つく法く万代をいはふらんハ神ぞしるらん
中てハてこらかつて之

新拾
神ながびの森乃あさりに宿ハられくさゆく秋もさぞとまるらん

○詞を添てて合せてゆきとまちハ

後京
ぞくころ名方ぞふじの山ヶ寸さぞゆきつもれどもけぶりたちつゝ
是ハふじの山ト云下へなからんト詞をそへて見をきん

恋之
あしかりしよしらんとてぞうられけんなぶろ難波のうらハすぞうつむ

新千載
恋しくば都乃松にくらひとのなきてぞききなん花ハちるとも
けなんハつきめきなん之べき　又べき　なぶのこと　又

○ぞノこノなんハ

六帖
つれぐにならの浅乃あすのてらん人なんこれをあわれふとも知し
是ハ詞を妨ぐ　あわれそ文章にハなんとかゝるてに
をそへ補なし　ぞといふべき所をなずらるのがわて
いふ辞之さらぬなんにもおびなしこゝな　ぞと同ジ格之ト有

伊勢物語文書

そのくらくちよりハんちんまさりける

ちくちんあてなるくふんつけ学りける

父ハあるくんふて母ちんゑ尓ちりける

さてちんあてなるくんふとあるひける

ちむそころちん入ろの郷こよりみの宮ちりける

古今序

柿のもとくんちちんちんゑのひしりちりける

かくるべくちんあらぬ

よりぬ時このくりまちんちりぬる

けろふの記文書

あくれろちんある

ハ一本ニあくれふちんぞあるト有ぞハ写ー作りて

べー

古伝り記文書

んあるものハたぢぎくちんきけ

ハ一本ニたぢぎぞちんあるト有　ハ写ー

作りあるべーろトろハよく作りて又

一本ろハたぢぎきんくろけるト有　ハ写ー

作りあるべー　たぢぞトもあくをおくも写

ー作りあれるをきトろーくるうトおトハよく

作くり

たぞのちんくこ作ちるハむそびくこぞは

ぞニあるーきゆるちれバこ

古今

る

てだのこめくごくに学ちぞ

○いひけそむちくくろハ

ふ義

こえかて今ぞうぞふくる山京ふるときの乃ゑそけりゑ

古今

ちぬ波あちてぞたきつ志川ハ乃ゑがよりでのゑふこぞけりゑ

是ハ落てぞたぎる「トいひかけて瀧つ瀬に川と
いひかけてむすびたるなり　又この
つトいふ詞ハ　瀧つ瀬　瀧つ白波　落瀧つ瀧の水上
又　あまつ空　あまつ風　沖つ白波　かくつなき
志らつなき　すゞのたびのつハなかるげそいへ私
そのつ

ゐ

古今

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる
上より　ぞ　の　や　何　結びてかゝりて　かる　よる　そる
なぞの詞ひの詞ハ　るトハいはれぬ詞之　るトいひて
こゝぞハ　るトむすぶ格之

ゐく

古今

天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるる
このごとく　詞トいひて　詞ハ　何　そ　徒　結びてかゝる時ハ

なぐさ「みぐる「たのまる「まるゝ　なじしむすぶ
格之事と心得べバ

古今

月夜にハ来ぬ人またるかきくもり雨もふらなむわびつゝも寝ん
かくのごとく　何トかゝる時ハ　まるゝトいふ詞之　上より
ぞ　の　や　何　結びてかゝる時ハ　まるゝトむすぶが格之

るゝ

後撰

ふるさとを別れて後は月影ぞむかしを見きと思ひやらるゝ
是歌ハ　二句めの下に　ぞの字有ゆへ　るゝトむすびたる也
ゐトいひてむすぶべきを　むすびて上のぞト
いひてすべての歌の例を志るべし

くる
る

後撰

夕やみは道もみえねどふるさとはもとこし駒にまかせてぞくる
上より　ぞ　の　何　徒　結びてかゝる時ハ　くるトいふ詞ハ　くト一字にむすぶ

格之 ゐハ くトモ ゐる トモ いそゝ 現之 又 きく あく
まぢのたぐひ めくハ きくる あくるトハ いそゝ 現之
古佐日記ノ文まゝ
○ゐ あゝやまよバ 秋おそ 一ゐる あり ひとゝ
ゆくぞ こゝろ ゝ ひゐく トゆきり
ゐハ 後ノかりて くト ゆれり
同ド日記文まゝ
○ゐつる 月いでゐる 山の端も あくて 海
の中よりぞ いでくるトゆきり
ゐハぞノかりてゐれバ くるトゆれり
後於也
る神ーゐも 思ふべうゝ けふしもぞ いとぐ あけきのそふんち ゐる
上よりぞ 後 ゆきて かるる時ハ んちぞゝ ゆる格

る 古今
あゝびきの山ゐの木ぐれて 跡つこゐを せきぞ ゐつる
上よりぞ 後 ゆきて かる時ハ ゐつトゆる格之
ゐも つトモ つる トモ いそゝ つこゝを いる之
形古今 ゐ 乱ん 春の山べハ ひぐれて あぐゝ 日 跡 ゐを くトつ
古今 後 ひぐん あぐさゐつ ゐつさゝ 春 焼格 山ふ てる 月を 見て
形古今 ノ方ハ ぞノかりて つトゆる
古今 ゐる方ハ 後ノかりて つトゆる

つる

おとなしの川とぞつひにながれいづるいはで物おもふひとのなみだは

此ながれいづるノ字たゞありにても有べし　上より
ぞの　や　何　などて　かゝる詞の上にある八格のづるに
つる。くる。ある。なる。さる。むる。る。トいひてあるべきやうま
[illegible]あれども　変格とふ
ことありしとへで

変格

[illegible]をバ秋とも[illegible]立そめし後の川音ゆくへさてつ
是ハ何[illegible]あれバつトむすぶべき格なるにト
[illegible]ハ変格之格にながれて[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]ハづノ上へちんト[illegible]詞をそへて
[illegible]之変格ハ[illegible]

〇上へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

平ノぬ

める

古今

秋来ぬとめにハさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

上より　ね　ぬ　などて　かゝる時へ　ぬト一字に[illegible]格之
是より[illegible]のふるも[illegible]　上[illegible]
かくりやうよりてもむすび[illegible]

ふる

新古今

暁のかねぞあはれをうちそふる[illegible]

れる

[illegible]

[illegible]

是ハ　ぞト　何ト　二字ふて　の一り

ゆる

古今

あさしのや後の山城さてたれば見てぞ見ゆる見えがほもせず

上よりだに後の山城さてたれば見てぞ見ゆる見えがほもせず

のぼらるき後の領をれば指をそれてもむをぶことあり

のぼりて見ゆと詠る例も有べされど是あることなり

伊勢物語ニ

(ヒ) 紅葉ふる白ふじはつゝ高きをのえぶふれさてみふるとも見ゆ

はつゝしの字ふ

(ぞ) 紅葉ふる白ふじはつゝの高きを八ぢりけつ人の袖ゝとぞ見る

ゝれゝ袖を見て上よりのかゝるやうにおもひて るとも ゆとも ゆすぶ

ゝゝをゝぶべ

参る

古今

小倉山峯たちかくれてとゞまれるべらなる

見ハ見ぬ二つ有二つあり るとも むべり

○ゝゝ見ることもあるべ間をたゝうゝ

むかし

ゆゝをもさぞあらかゝん月のてて城ちてぬばりぞたのみ見れば

ゝゝのみだりぞ見のゝ有るとハいくれぞ白ゝ

るゝれ ニ ゝゝゝゝもゝびあゝたゝ一つ見ゝ

見ハゝゝてよゝゝふハあゝゝてゝる時のゝゝ

○ゝを除てゝ歩ゝ会てゆゝとゝるハ

後撰

年ゝれどかゝりもやゝぬ高川くれ角ぞ今ハ限しの埋木

古今

大ゝゝハ月ゝもゝぞゝしゝれゝそゝのゝれば人乃考ゝ有ゝ

後撰

ひゝゝる小四ひゝゝひそふゝ人のゝゝゝそれぞよみる

古今

神無月時毎ゝ有ゝるゝの染ゝ有ゝ赤のゝゝゝぞゝれ

ゝの家ゝゝゝハ何を除てゆゝゝ るとゝ除べ

又詞を添て字ニ付かひやうあるハ

古今
みのうへにかゝる船乃あしたしてぞとまりて吹いふなりあらき。

是ハてぞ留りたるど〱といふ事なる故なり〱といふ

むすび詞をど。へふくみたるをいふ又是ハ捨字とみるべき

千載
こゝろあしや思ふ人のよるべなれぞおもれてもみせおかしとのた

是もこれぞそれあるど。も〱といふ事となる故あると〱といふ

むすび詞なと。へふくませてるをいふと。へ詞なと ふく

ませるハぞの〱こえあらバ又often

ませるハぞのこゑあらバ又手のこゑよりて〱より下ふ

上のむすび詞もあるのもあるこゝろあしや〱ハ誤聞のこと

るぞ

明治集
衣手ぞけさハぬれ〱るあかし藤の花遊まさへやあちハ、〱るらん。

るハ てある、下なるこゝろそへてある。 反こたへ

るぞ

千載
なみしみやなぞたゆる〱山ぶきの花乃下ゆく井手の川水

れる

古今
きりぎりすいたくなきそ秋の夜乃ながき思ひハわれぞまされる

けら

百首
春の野にあされつゝふとし衣ぞかはなつしきひを夜祢子ける

此あつし〱〱八〔卅三〕のことゝん切て次の句へ廿二のてうく

かゝるやうふん切し「草をそめなる〱「霧ぞはさまる人あるや

「秋の月ひかりさやけ〱「瀬をたゆる〱「山吹〱「川風さむ〱

ちぎりの葉ひ切〱もさふ〱ことと

けら

後撰
秋無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

此ふりみ〱ふらず〱ハふりもせふらずもせよ此か〱ヲ〱

かよハせてふりもし ふらずもし之此かもし〱ハ反〱なり

「ふれ〱さそて〱「ふく〱みなき〱「柳まり〱あし〱

「みえ〱みえず〱 あひのあひの〱ハ

〔もし〕のことゝんみるべし

けれ
る

万葉

しきたへのまくらゆくくる涙にぞうきねをしける恋のしげきに

しきくゆハ まくら動トいふこと 又 ぞ。ける。ト

いふトぞ。ありける。トいふを結び合て見よ

よる
る

古今

夏によりたるの袖をかふゆけば花のかくれぬところぞありける

けら
る

六帖

月影にそまぬたにもこそ袖をきぬくるをもろ人をこのふざりける

けざりける。トいふハ ぞ。あノ夜ニ さ。へ ざりけるハぞなりけるこ

取左
き

新古今

秋の夜をながしとわびぬとひけるぞ物思ふ人のなかにざりける

けぞハ ぞ。ヲ略し語りたるか

取左
き

於き

物のまげにしぞくるゆるみなれど恋しきとしぞ時ぞもあき

時ぞノぞ。ハ切てぞヲぞ。もト受て下へつゞけて上のぞヲ

むすトむすべり

取左
き

古今

のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世中はてのうければ

取左
き

平兼盛哥あそ

たのめつゝ日数つもりのうらみてもやすらはありあるものぞなき

新勅撰ニハ こぬ夜つもりの十首

上より ぞ。を。落着てかゝる時ハ 哥ト。ト取立ト。そ

むすぶ格也

○ よびづるとてもむすび詞をそろへしれぬハ

左様

又ふるあるかぞあふこみあしき。きく 玉藻哉さくやあそぶ

ぞ。の。や。が。 参ふてかゝる時ハ さ。ト むすぶべき格なるを

よびけんとて結び詞をそろへして し。トいひり これハ

なべてのことハあらで よびづる時のこと

近とハ近る也

右語

取左
しき

平兼盛哥あそ

あれにけり宿とて月もかはらねどむかしのかげハなきぞ恋しき

次左 き

古今

あきくれば秋おしもあるくふむしの声きけばいとどうかるかな

上句ハ。ものゝ俗名にて。ハ行五。

むしとぶ格之

る去 い

拾遺

あるをりさへいとさびしかりしに秋よりのちはいかばかりかなしかるべしとなん

ものゝ哀をしる人ハ。ものゝ哀をしるべし。

ものゝ哀ハ「あきのくれ」ト云てこれ有りそ。ものゝ哀ハ

なるべし。「くれ」ハ。ハ行五。

よりて上句ハ。ものゝ哀をしる人ハ。

つくべし。ものゝ哀ハ。ものゝ哀ハ。

る去 い

拾遺

あしひきのやまぢもとめてわれ来ぬるこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

つねなるこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

る去 い

拾遺

あるをりさへいとさびしかりしに秋よりのちはいかばかりかなしかるべしとなん

ものゝ哀をしる人ハ。ものゝ哀をしるべし。

ものゝ哀ハ「あきのくれ」ト云てこれ有りそ。ものゝ哀ハ

なるべし。「くれ」ハ。ハ行五。

よりて上句ハ。ものゝ哀をしる人ハ。

つくべし。ものゝ哀ハ。ものゝ哀ハ。

る去 い

拾遺

あしひきのやまぢもとめてわれ来ぬるこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

つねなるこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

て 去

古今

吉野山ゆきのまをわけてこゝろみんとてこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

つねなるこゝろ

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ものゝ哀ハ。ハ行五。

ふとを 古今
ちぢのふるりと成て
ちらぬ花ハ一の日とまぎ〻ハ別之又まぎ〻やとゝ
ま〻ー 古今
げふこゑバかりまとハ春とぞふりあおぎ
きてぞハありとも花と見まや
ま〻ー 拾遺
とし成へて見る人もあれ春さくふかくるぬ松ぞあるー
ま〻ー 古今
見る人もあれ山さくらのさくて花ハ春ん後ぞさりまし
ら〻ー 古今
ふるさとハうつぞげふらびきの山乃御つせおとまさるあり
けらぬー ハらしとハ別之
けらー 彩新
志ぐれていろまさりゆく菊よりも人のこころぞかれふけらー
けらー ハ日ゑ結み長ハけりけれ
ちゝと百 けらー ハ けるりれらーのでまさる日り
りれのあ長らぬ又 るのうのあ長らぬあれバ

けりけるけれノ たるこれさるこのり
長よりてハ切るこをあぞトのくしてあおもをびゑ不及をゝぶれ

我ハゆく〻もちてもちてあ成かぎりて思ふぞりぞ
古今
いぞ見れを人あとゞあを大ぶのゆく〻ゆくふの思ふこゝろそ
古今
いろふめでくをれるバりだ女ふ長れおちるきと人わかるあ
拾遺
又もこん時ぞこゝあのへでたのゝれぬ乃みーなれバをー紀まゝ
長ハ時ぞトあるをぞトあて五つぞ紀さり
拾遺
あふことのかゝ糸ぞこゝハ志りちぐつ玉のをたゝちぶゝよりけん
長もぞトあて五つぞ
彩古今
いふせんちづゲ屋を生のあくれさみかきこゝるとも在の中ぞこゝ
長ハぞトあるを こゝ ハまぐて切て

下へ〻くる頃

今様

あさまーやこハあふごのさねぞ

何ぞ

けやあげきのやこ あけきのやハやノふるぞん

ものハ〻〻ひて〻ひゝくるぞ これ〻ハあのれがゝくを

〻〻ひて〻ひゝくるぞ まそよトそくゝり

陽川百首

秋風ハあびく尾花をゆふまれたゞ袖ぞ

何ぞ

たゞ袖ぞト切ゝをぞト交て下へできゝり

仮根

女房名ハ茅むすこにむれゝるハたれゝもむーの声ハまゝふぞ

何ぞ

六帖

ゝゝるの夜ゝこれまゝ日ぞのゝ茅ゝこもたゞゝめふぞハ

ぞパトたゞ〻ゝさゝるのゝこ

何ぞ

仮於きと

いゝ〻ぞてゝれこぞきつれ山ゝゝるハいつゝゝゝゝる秋乃月ぞも

ぞ〻ノ〻ハ〻ゝ

古今

いのちゝやハあふぞなこ

何ぞや

けやハあるぞなこ

いのちゝやあゝぞト

ゝゝをふゝゝゝて上へハゝゝゝぬゞあゝ余佳あるぬ

形和

いゝゝゝゝ時ぞやゝ夜ハ

何ぞや

けぞやノやハあげきのやこ

ハやこ郭乃

いゝゝ

於きと

年ハのゝてひゝ夜妹ハあゝ夜ハもあゝりて男ゝゝんやぞ

んやぞ

けんやハやゝ何ぐゝあて

ゝゝをのゝゝやハノこ

ゝゝるハ又ぞト そくゝり安の

こハ夜ハもゝれハゝゝりて男ゝゝんやゝれゝゝりて

男ひハせゝゝぞトゝゝこ

んやぞゝ ゝゝゝゝゝこてんぞべ

乃之部

のハつゆのゝハあらぬぞ　雪のゝあれそふ　神のゝうちかぬ
ちぢのあひぞトふべきやゝあるホをのトゝるをいふ
又のゝたゝ　いろき格の詞ちれバ格ふとゞれてもまぶ
ゝあれふりぞされゝも　きれハやれちるゝ

の

くすつぬふむる

現在 き　正去 ー　まゝら

く 古今
雪立で花とやみるらん志ら雪のかゝる枝ふゝびたのあく
ゝハ　人ちれぬんゝゝ　るらノ友しらえ

つ 詠歌
人ちれぬんゝゝやうゝてちきぬゝ　ゝゝのあるゞふたつ

ぬ 不ノ
寛平帝時后宮哥合
去年ハ廿首ゝゝてー　彩公そ結うあゝぬう声のかちゝぬ
上ハかりたゝ　徳多ちれバ　むゝ
上ハかりとゝ　ちれバ　結ん

ふ 千載
久方や秋ハあゝれをこれつゝんゝけいる神ふ雪のあれそふ

む 古今あ
山ざとふる秋をこゞめてワのれ結の雪ハふくちらん

る 歌古
あられありうゝ秋ハのゝえーあの雪ハ見ひふむ雪ぶれちん

む 古今
ゝちんハ　つゆ雪ちんえ　結ぶふえハちん上ハかくりハ
たゝ　徳　ゝ　彩ちさちんノ里語ハ　テクレ　テクヨ

る 古今
雪ハちて雪乃ぬきこそよそうゝ　山ハ結のあれバうつちる

る 中智集
神乃表ふかゝさる声みちりけさ住保山のあるひやゝそ

る 古今
梅の花ふこそ雪つれうゝひ雪のひゝくゝやいそひゝもをる

る 彩古
秋ハ結や外山乃里や志ぐちゝんいるぬだけ雪のかれる
ハ　ハあゞもるやえむまびえうゝぞ

る

千載 宮城野の萩やをしなべてつまもなく花咲しより声のいろなる

○詞を添てて歌をも詠合て吟ずるハ

秋風抄 梅が花にほひぬいろ香もむかしの春の袖の月

月トいふ下へ有ルト詞を添て吟ずべし

新古今 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さしきりのうけ格

格トいふ上へ有ルト詞を添て吟ずべし

○のハ名ゐ格の詞なるハ格をもとめて吟ずるハ

千載 玉づさの流のかるゝ心ちして志ぐるゝそらのわかりのなくなり

詞の結ハこれハ有ルとなびくもなくなるなり又ハ

なるもよるなれ又一本ハ所ぞなくなるとなるこれハ

抑〻れいりト有

千載 秋の夜ふかりそちんやまちけん淀ハこものけさにぬれる

る

古今 あふ坂の関をやこえもくるてんやまこそ山のけさはなるる

怪抄 春ハ秋とちてこそ人あるを行やめ春あやしく詞のすゆわざりけ

新古今 むすぶ手ぶ秋ぞなぬれ山の井ハあるでも月のさぶ秋ぞけり

詞ハ結ハこれなるも定まれる格のごとく けりト むすびてハ

やくなるこそ紅葉ハ格をもとめて けりト むすびト有

呈レノぬ 金葉 ゆるるをなるこそ川のなるぶるなる

呈レノぬハあくれハ中ハあるをなるぶるなる

呈レノぬハ上ハかるり ぬ。その徳多あれバぬトなる格

る

いせ物語 秋もあけバきつゝなれなれてはるばるきなりつる

けくるあるトいふこゝハ なるなん。 詞ハ結ハ

なるんなれバ秋ハとハ なるん なるなん

ある　古今
あらたまの年の中にはやくふるゝ
るる　彩古今
時雨ふるなかよりそふる山のあなたの声のあちこち
ふる　後撰
いつしかの人のあくやちりぬらんたのもしこのきてほどふる
もる　古今
今しハとゝびゝ物をさぶのこゝろもわかり系ぬたのもる
ゆる　拾遺
松いそぐ秋はまつる。時をるなるけて声のきこゆる
のハかゝる事ハ詞ゆゑ　ゆゑ　ゆるもあり
白河院三百首
夕日さしをの志の系吹風ハ旅ゆく人の袖ふるゝゆ
けゆゑ　ゆるゝをなる人のそゝふハ人ゆ　ゆゆ
あゞゆゑ　ゆるハく。そつぬふむ。あゞの字を字
うらゆゑてゝるゝ

ひさ　古今
ひゝらゝてあを見くで　秋の田乃稲ゆふのそゝくゝふ人のあき
○のハゝゝ花格ゆゑふ格ふゝれてさゝ　くゝもゝもそぶこと
あり
古今
秋萩を志ゝみふせて吹風ハ人ゝぎでゝるのさやゝさ
古今
花の系ハゆゑふゝりて人ゝぎゝも系ぶ白人の志るへく
しき　後撰
吹風乃さゝふゝのゝハ志ゝりあゞゝちりぬる花の志ひて志ゝしき
上ゝよりたゝ。徒。考ゝるゝてかゝる附ハ志ゝゝ。ゝる格之
■しきゝ。ゝるる系みゝて系ゝたゝのゝざゝるハ
彩古今
■ゝの系て山もあゝゝふ水のゝゝり結る松さゝ峯みさびしき■
上ゝりたゝ。徒。ゝてかゝる附ハ さひし。ゝ。ゝる格之

ゐたるなり　上ゐぞ。のや。行　等のことをあくて　しきと
あれるハ　ハ代集の中ゐハ　一そのこと　千後拾十二代
集ゐも　ゐ集　風雅ゐのくありて　外の集ゐハ　そも
ことをと有ト畧
義好法師ぐれくまゐ
新古今ゐハのこる　拾さく　まゐたさび　ゐ　ゐくる
奇をぞいふ　ちるやまとこゐふぐ　げ　ちるをぐ
みとやらゆ　ん　ト有

建保四年百合

いろまさるふみくのふぢちるみ神かけてこそ人のかざ　ゐ　ゐる　ゐ

○上ゐ　ゐくびのこゐ　ゐをゐて　そ　ゐをゐ　ゐて
ちるくびてそちるふぞ。ト　ゐ　ゐ　ゐ　ゐを
のトゐくるハ

古今
きのふこそさき　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

古今
春日社の百首歌　ゐや　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

古今

○のゝとゞりたゝハ

吹きたゝふ山風はさむし秋萩の引きりもゆく人のこゝろの

はるゝもゆくゝハ　ふるのゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

也之部

年ノぬハそ之部ハいろゝ
いづれ　又ゝゝ之ノえる　やハト　やノえノや　ノ上ハ
□　下ハれゝんたべ

うたがひのやえ

や

く す つ 万ノぬ **ふ む る** 万生 **き** 万去 **い** まのー **らー**

く 古今
表裏ちるびく山乃さくら花ゝつろゝんゝやゝゝくりゆく

く 古今
そこひなき淵やハさはぐ山川の淀き流みこそ所ぐ流ハれて
ぴやハハゝゝゝこゝろやハゝ　山川の淀き流みこそ
あぐ流ハ世てゝゝゝひなき淵ふちやハさゝぐさゝぎハ
せもぞトゝゝゝこのゝろやハゝ

す 後撰拾
浦風やとゝふ波こす須まち乃篠ふあゝゝれてちくみるゝ

つ
源氏あをひ
淀ゝみやゝハをりゝつ　乳かくハ方もそぼつちで源氏ゝ為を
○いひうけ世もそぐるゝ

彩古今
かゝゝゝ　秋のうさゝや　世ゝ　千五百番
谷ゞ氏ゝの紅ふう乃ゝ所れみこゝまバやゝんゝ乃ぐれ世ぬ
是ハやゝんトゝ氏ゝ　ぬトむもべり
上のかりた。ゝ。後。等ゝ氏れバ　ぞト　むもぶ格之

後撰拾
■てゝをゝ　ゝこのゝそゝざるハ
■あふゝゝの逢ゝさゝ氏れぞや　氏ゝ乃ゝ所ゝ　ゝ逢てゝひこぞ■
詞ゝ新ふ　ぴぞ■ハぬ。社家一語り有べト有

ぬ 万ノ
古今
月やあゝぬ■　春やむゝゝ乃ゝ春ゝ乃ゝぬ■　我身ひとつハゝゝの方ゝて■
ぴ　ゝ乃ゝ　ゝそハ上ハゝゝて　ぞ乃ふゝ　ゝを　ゝくゝもゝゝる

彩古今

梅の花

○もとゝび詞を本哥みゆづる格ハ

ゐなが神ふれし。みそひぞと。まもやもゝの。人みとゝバや

みそひぞ。けぞ。ハ切々ぞ。れゞ神ふれしみそひぞ。ト

こゞひてゝひらくるぞ。そてゆらをゞト交て五つゞけ

こりさてたの まもやもゝのトいこるやヲ

詞をゝ月やあらぬまもやもゝよりまもあらぬ月ゞ月

ひとつハゝの分みして とゝ本分の一ゝのゝを

まもやもゝとゝ詞ふこゝて のゝと交らりの文字ゝて

ゝをあゝゝれゝり やゝ。おもゝびをも本分みゆづり

てゝゞびけるゝのゝト方

古今

ゝの神ふれるゝ月乃ほゝのゝきゝしあれや神ふゝてこぬ

けゝもゝハ レバニマ のゝとゝ詞ふ結ふゝり

ちのぬ

古今

さゝゝ花ゝゝゝれる年ゞぶれも人のゝふあれやハせぬ

ちのぬ

古今

時をゝゝもきゝゝゝ山ゝハ月ふ時ゝゝゝやハせぬ

詞ふ結ふ 仲の奇ゞものやゝハ一の格ふて初ゝ

の軍ゝゝゝゞ男ふゝゝ ゝゝ結ふあれやゝ

せぬハ ゝゝてあれぬゝゝぞあれゝゝとゝふ

ゝを ゝゝゝやハせぬハゝゝてゝゝぬゝゝぞゝゝよ

ゝゝとゝふゝゝゝ 有

ちのぬ

新古今

男ひやるゝゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝやハせぬ

花ハ ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬ

源氏後撰

袖の花のつろこきたそれ

袖ハ袖の花のまこきたそれ

ふ

後撰

神無月ぎりとや思ふ

後拾遺

たのもるふ命ぞのぶるものあ

ふ

○ひとみてもをぐるハ

拾遺

これやこのもりもとれてちるもちぬもあふ坂乃せき

後拾遺

かくとぶれえやハ

けやハあふちでへかるとと

かくとぶれえやハ

ちハくまのうるやハ

ひとまれもバとゆる思ひをちしもちるとあるとと

今集

春ぬをたるかふいづるもち月の弱ふこしやあふ坂の関

頼子集

四月の海ふ山ちもの

む

無関子集

ちのふもとだやなくさむと思ひしふくをちぬんすりけり

同歌ふたのごとくなるだやハやすれたの語の切

正しつして　みてこられバとく　ゆゆるとト有

ちのふもとだなくさむと思ハ

思ハとだやなくさむト加ると

ちるとと　ト更て更つぎ

上ハこ多加ると何るこのと

む

松き

よそのこ見てやハ人れるの末つむ花乃いろふいでぬバ

けやハ　こ　このくるとふあ　やハ

ハニハとあし

む 古今

うゑしうゑハ枯ちる花時やさうざん花そちるゝ 祝さゝれめや

さくて やや んや まやトソ 前ハこゝ〳〵 そのころ やハノ

そこ 祝さゝれめやハられぬそーいてさそこ

む 新古今

枯く哀ハ多もかそゝぬ桂葉の香をゝハ人のとゝめて来てゝ人

老ハやゝそ ゝ やハくゝそのゝるやハ ゝハあゝぞ

む 拾遺

あゝぐやハ又もあゝぎさつゝの あらん あくより糸のあくさあそちき

老もやゝそ ゝ やハ

○詞を添て玉を玉鉾合て 世さハ

古今

谷風ハとくるこゝろ ゝ ゝ ゝ

ん む 古今

そのゝやゝふかゝゝん山さくゝまこゝふれて家でゝふせん

けやハゝゝゝこのゝゝるやハノこゝやゝ そのゝゝやハゝふ

かゝゝんゝてゝゝらハかゝらハせぞゝゝゝこのゝゝ

やハゝこゝちやゝゝ

ノむ 新古今

おきそつる露やいかなる露あゝんゝゝくハきゝゝとなり一ゝ京方を

光ハやゝゝゝいゝハゝゝゝ

此奇一本ニハ　これやあふあるト有　詞ヲ略ス夏後ハ
詞を略て学ことあるこのとき一ツ　あやあふあり、ろく
けんト除て学ことあるべし

む　おき
つれてふこゝハきれハたゞわけんくるゝ紀抑とあるぞやありけん
上も行かりそけんトもたゞり　きふハけん二ツ有

む　古今
如云荒れはるゆくゑやどりせバあやあくたゞの名をやさてちん
きハつゆのきえ又やどりせバ　やどれバ　りせ、反これ

む　万葉
かくしてやあちやあ老をえこゆ云ふ大荒木野のさゝあくなくふ
きハこゝゞひのやヨ二ツたゞして　云のちんみてもたゞり

○ひひみてもまぐるハ　おき
あきらこのかくてやつひみやみのあ乃あるひもらでぬ人ゆくめかハ
うくてゆひこゝとちうゆひこゝあまたゞり

む　古今
ありとてゆそかさき宮ゆ乃ゆ世ゆ思ひすてゝ

る　後撰
時をまてハこゝびとやあゆこゝるつ井ハ別れのをゝ云ゝやこゆ
ひとるゝトいふ分ハるトハいくれぬこゝだこゝ引トいくれ

る
ぬこゝぞハちる　ふる　よる　ちる　ゆる　ひやる　ゆる

る
ちぎる　つもる　すゞの新ひ又

も
ちる　いたれぬ　ぞハ　ゆる　ゆる　のこゝ　ゆつ

く
ちる　いたれぬ　く　ハ　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

つ
こぐ　ひく　すゞの新ひ又
つる　いたれぬ　つハ　ゆつ　ゆつ　ゆつ　ゆかつ
ちる　すゞの新ひ又

ふ

ふるゝトいそれぬ ふぬハ「らふ」「おそふ」「あふ」「あらふ」
いとふ「たゝふ」「みるふ」 すゞのあひ又

む

もるゝトいそれぬ むハ「くむ」「いむ」「つむ」「たのしむ」
「ちづむ」「ちむ」 すゞのたゞひハ「ゑ」「ゑ」ぞ「のや」「何」
ものもちびハ「こゝ」「ゑ」 ひ□下を一つのして
俗ノ歌ハ末ふつゞけをえ合てゝ上より
ぞ「のや」「何」 ものふてかれバ「る」トいそる「る」ハ
むちぶ格之

古今 七夕ハ今やさらる「る」あまの川かゝ雲立くゝるあくゝる
秋の田乃穂ハ上をてゝ稀ゞ末のひろ原るゝ末や「る」
ひやゝうゝきはゝ「こゝ」の「やゝ」 「られやハこそる」

古今 まつの歌ハ雪ハ花やちり梅の花あこそ人こゝぬ春やハ「かくる」
ものもうゝこのこゝるやハ之
○いひけ出てむちびるハ

新古今 秋の歌乃月やをしまのなのたゝのゝ沖のつりぶね
ものハ月やをしまるゝトいふをを をしまあまの
くゝトいひけ出てもちびり

新春 白妙の波後ゝけてやまハらる風ゝくまゝれ花もさきけり
○ど文字へむちび行をあくゝせてゝるハ

新古今 人ちれぞいとやいとやとみそやぶる秋さぶるゝで是をこそゝ
ものハ今やゝ「る」今やゝ「る」トいふこと ちゝくゝる「る」トいふ もちび

ど

る

拾遺集

みてぐらの半ばやいまぐの川浪ふ山乃そゝぎもぬさやたむらん

けやハくろがくるやえむもびふハかてをびけたゞひハ

彩古今 きりくをたゝ

同 宋の戸をさゝや白ゐげの

彩寿 ゆうあぎふやくやそ一夜の

古今序 難波ほふさくやこの花 をゞめたゞひのやく

彩古今

○いひみをもをゞるハ

山うつの麻乃さゞらもをさゝ拾ゐ〳〵あゝで月日や松ふけるいほ

長ハあゝで月日やをゞるトいつをるをいひうけゝて

むをゞり

る

月清集

ふく風やをゝるゆ一

後撰

ふぢばかまをきるゝ人をゝ立ちぶゝ

まゝもゝるゞゝ

又上よりゐゝ

○ちへつゞけんゝて格をゝゞてむをゞる

彩子歌

うちつけふ思ひやゝゞと古さゝの思ぶ草ゝてをれるゝりけり

ゝゝのゝやゝゝゝゝゝゝハサニのゝトんゝゞ

ゝゝのゝやゝゝゝゝゝ格をゝゞてれバ いゞゝトむをゞ格をる を

ちへつゞるゝゝて格をゝゞてむをゞり

る

後撰

難波ゞゝゝゝゝゝ芦乃あゝでのひゝゝもゝ格ゝれやつゞゝ

長ハゝゝゝゝゝゝ

早しぬ

ぬる

形古今

山ぢろしゐ麻の狩ぞくゆ山あり尾上の月ゐ秋や文める

る

千載

如ゐ見ぞ源ゐ霧や秋紅葉る たあれば いとぐ神の ちをる

上ぢかり ぞ。ぞ。徒之部 ぞ川 奇をゑ人をてんぢべし

る

後千載

いとぐまくとちやくゝもる 源 黄泉おきそゐ秋の秋言かさして

る

古今

くべきちど時るぬ れやまちこびてあくちる声のんをどよもる

是も レバニヤ のことゐ れや

れを ちやとてこと ちるゐをたぶきて れバやヤ

いる例ハ ゐるもつよゐあちきを ゑ今 ぢも 暑て

れやとる例も ゐれもハつよゐ

ゆけ ぢやを ゆけ ぢやとらけ 男ぢやを 男へやとらつる

あひもこ さてけ れや ハ 仮ちきをちへつきてこぢゆハ

こちや ゐもちびこト有

ゆる

光古今

ちゝ 仮のこゆんまゐちゆハ ゐ ゆる たるゐ秋の月

ゆゝトゐるとハぞこ之 ゐもちり又ぞ。徒之部 ゆる ゐる

ちちんんてんぢべし

ちる

黄之集

ちびんの神をやられる 山川はあんぢのごとくゆつる 波ゐ

けれるより ゐる けるゐる あぢ ゐゝ ゐゝ ちゐ

上ぢちり ぞ。ぞ。徒 ちゐれば りゝ ゐる 格

上ぢちりぞ。のや。何 ちの 附ハ ゐト ゐる 格 んぢべし

る

古今

まゝ霞 ちゝを見をてくれ ゐを 初ゐ紅 ゐふちをやあつる

る

古今
我やらき戸やさしつる部公こゝろの宿をとゝめもとゞてふあく

後撰
今ハとやうちとけぬべきたてやの人あくまでせばやへてける

る

源氏七女
常乃むら〳〵紅こひてさくづるそ山づらこれたる

る

古今
吹風を恨てこゝろよ常なる やハ人 これやハ秋ふくまづに

る

ふれてこゝろもふれハせぞトいふさと

る

源氏桜人
つれなきハこゝ紅葉のつゆ多ゆく秋ふれぬ人やゝふことなる

る

源氏松風
いさこゝろハとやうとおもふれ山ばなをよのあるでや物かそりせる

る

ける ハ きみるゝ きみ ノ反をせ

現在
きく

古今
たゞこゝろあふ川てさゝせる布をれやよ秋へてこれどこゝろ人もあき

上ばかり にを後名ちれば あゝトもそぶ後

たのれやハ上ゐ たゞトこゝろびの詞ありて ゆこゝろ れやト

ありてゐを きトなる むまぐり けまひの

上 図 中 れ や トむまび詞ノある れやノやを

詞ゐなゐ たゞれやハ上ゐ たゞ いく 行 あどゝ詞を玉て

乃をもむまび詞ゐて とぢあくる中乃ふあり や文字を

むゐゝてこれバんなやゝ〳〵ト有 ける 図 ノをノれやト又

まこゝふらどせる れやこゝ図 のこゝあ れやト二ツハ乃をむまび詞を

むまぶゝけみゞ下のむまびゐかをこゝぬ れや みゝたりこれハ

けまふらどを

現在
きく

子森
男ゝとふ枝ゐやさびきとゞ ぶこゝ多きのゞけ歌乃かこゐ物をり

現在
きく

後撰
雲ゞりぬるゝん神乃かをこゝぬハこゝが男ひのゐゞやさくあき

沢左 き

古今 まちやとき郎やおそきと吟ぜん学ぶにもあらぬものを

沢左 き

古今 人をぞ。とりもて見るものと思ひぬる人ぬるものらしやハ

けや ハらしことのうるやハのきのやこ 人ぬるものらしや

高しうるべき人ぬるとても高しートいふこと

沢左 き

平古今 うけうら記人のをぐさのうかびもてこりぞやたれをか又ちづむべき

けたれもトいうらもハ まくて 行ノうるもトいうる一ツの行

みそ下のもをびおかくたるぞ 汨をぐてももトいとり

たらいつちりもトいひてちのもをびるハうこたるぬ一ツの

うとむこけうとハ行之ぬ行しくれバ人ぬんぬべ

沢左 き

古今 秋をきも人づたぬれバきりくを流福ぬぐしやよるハかあしき

上よりたを後多ふ時ハかあ 沢左トうる後

沢左 き

後拾遺 あくれをもいぶにきてうあぐさめあるやたしきすきやたしき

ありやあるやトいバかるやてうめもをびふる及

そうくバ

古今 そうみ一ぬをでいざこうとうん故ある我男人ハあるやあるやと

をハかるをやうるをもうるをとト交てうんづけて上へ

うりて同ぐうとうたんトうるこ りもをなをノりもをかる

同をりス あるもをきもをるふハでく汨こ でく

汨を交てやトいバくたびひのやこ又 かるく

汨を交てやトいバ かるくやこかるくやノうこハこの

まうこうり

沢左 こ

後拾遺 いうぬう紙ぬくみーちぐれちちのあるやうこ 山ぶれのうこ

[illegible]

古今
[illegible]

古今
[illegible]

[illegible]

古今
[illegible]

千載
[illegible]

後拾遺
[illegible]

[illegible]

切や

彩古今
思ひいづやこの[illegible]山の[illegible]ひろ松[illegible]
[illegible]

切や

詞花
[illegible]

切や

後撰
[illegible]

彩古今
[illegible]

切や

後於き

とハだやと思ひやるべし 嵐ハ彩ひのやゝ

いろ。ゆ。ぞ。ハ。そ。ひ。ろ。る。こ。と。 いろ。ぞ。ろ。が。神ハ。ち。ぬ。や。ト

切る。る。や。ゝ

切る。る。や。ハ。白。乃。そ。ち。り。ふ。有 白のそぢめともいふ

仝。ぬ。ち。ぞ。ち。と。ハ

一句 ○二句 ○三句 ○四句 ○五句 ○

山○ぬ。ち。を。そ。ぢ。め。と。て。之

切や

古人

書こふる麻ぞ。ち。く。ち。る。 如。ち。ぞ。ぬ。ぬ。の。ぐ。ち。む。み。の。ぬ。と。ち。ぞ。や。

○切る。や。の。こ。ふ。 切。る。ふ。ぬ。 ぬ。ぬ。ち。て。 こ。ぐ。び。の。や。ゝ

清のあ。ち。ぞ。み。ち。て。 ち。ち。ち。む。ち。び。切。て。む。ち。ぶ。こ。

清のそ。ぢ。り。ふ。ち。て。 切。る。こ。の。二。ツ。ち。り。て。お。の。〳〵

上より交ることぞ 格ぬ定より切り

あ。ち。ぞ。ぬ。ち。ち。 や。ち。上。ハ。か。ち。ち。 つゞく格ぬ辞より交

そ。ぢ。ち。ふ。ち。て。切。る。や。ち。上。ハ。か。ち。ち。 切。る。格ぬ辞より交

ち。ぐ。さ。ぐ。より。あ。り。ト有

あ。ち。ぞ。ふ。ち。て。や。ち。上。ハ。か。ち。ち。 つゞく格ぬ辞より交トハ

ぞ。の。や。何。 ち。ち。ぬ。む。ち。び。辞の中ふ

ち。ち。ノ。ノ。 ぬ。ノ。ぬ。 ち。る。 ち。る。 ち。る。 ち。る。 ち。る。 ち。る。

ち。る。 ち。る。 ち。ち。ノ。ぬ。 ち。る。 ち。る。 ち。る。 ち。る。

タヅヌルノぬる。ゆ。 ち。る。 又 仮名ノき。

あ。ど。ハ。て。ふ。ハ。 つゞく格ぬ辞之

上より ぞ。の。や。何。 ち。ふ。て。か。ち。る。時。ハ。上。ぬ。ち。び。ト。て。切。ち。れ。ども

つゆハつぐく辞くと又
とぢるふ金て切るゝ　や　所上ハかゝぐ切るゝ格の辞より
交るが定まりゝトハ
た。ゝ。徒。多所むさび辞ハつゆも切るゝ格の辞く
現在ノ。る去ノき。ぞ。そ。さり。あり。せり。ある。
たり。けり。ゆり。へり。れり。平ノぬ。久ゲぬ。ぬ。ぬ。
つ。く。ぶ。む。ゆ。

「ゐる。あがる。をゝまる。みぐる。
ひたぐひふる。ハるゝトいそる。るをるゝト
ゝぬるをゝふゝ又　ふる。ちる。ある。ある。の
るゝ又ゞ　ぬハ　ア。ゞ　ゆゞせゞあるゆ　ゐひぞ　ゝゝふ
ゞゝ。

右の切るゝ辞を一ツゐゝして
「ゞ　ぞ
「る去ノき。ハ　ア去　ゆき　ありき
おそひき　あゞ所たぐひのきゝ

く	ぞ	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	り	き

「ア去ノ。ハ　ゝ　ゝ　ゝ

神ハ人ちぬるや　ぬるトゝバでく格の用ゝ　〳〵ゞひのやゝ
神ハ人ちぬや　ぬトゝバ切て格の用ゝ　切る〳〵やゝ

あるや　あるトゝバでく格の用ゝ　〳〵ゞひのやゝ
ありや　ありトゝバ切る〳〵格の用ゝ　切る〳〵やゝ

きこゆるや　ゆるトゝバでく格の用ゝ　〳〵ゞひのやゝ
きこゆや　ゆトゝバ切る〳〵格の用ゝ　切る〳〵やゝ

余ハたゞあるべし　又切る〳〵格の用を交て
やゝいひても体のあるべきハあるほゞ〳〵ゞひのやゝ
いひざまゝのこゝとゝバ

此きゝ
とゝれてふこゝとハられくたちらんくるゝれたるのゝとゝ
ゝぶやけりけん

このごとく　ゝゝぶやトゝバ　切る〳〵格の用を交て
ゝゝぶやトゝバ　切る〳〵格の用を交て
〳〵ゞひのやゝ　体のあるべきハいひざまかゝれバ
ゝゝぶひのやゝ　ゝゝをもゝび詞ゝもゝぶゝゝゝゝ
ゝゝゝ　ゝゝの川　所の中ゝゝ　切る〳〵ゝゝぶやを川
人ゝゝ　人ゝゝれバ　いひざまを味ひてゝゝべし

古今
ゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝ

先ハ人をうくこひ人とハ土てゝ武やの。ト〻〻〻のことわ
てあげくやこけあげきのやを切るれども切るゝやこハ
ひざちうたれりけあげきのやハ切るもあり又
ゝやそやあぐ〻いひてあげきゝやのさるも
あり又つゝの旬をゝ交て　在や　人や　角や　あを
いひて鍬長（ナゲキノ）やゝて切るもあるゝ鍬長のやハこの
まるいぶんをゝて人ばべーや　ハらひざちゝ切りて
くさく切るゝ又

切ゝや

後拾遺

みーきゝ木ハ手てちぐゝそ拍子けの。布むまあハトゝや
先ハ。ゝやト切るゝこれゝも　切るゝ格の旬を。ゝト交て
ト。ゝやトゝり
又

切ゝや

形古今

紙波ぐゝみぐゝ長芋のふゝしれるゝもゝでけを切るゝ〻てよゝや
先ハ　ゝてゝゝト　ゝ新てゝ切るゝ旬を交て。ゝやトいり
けゝや　ちぐハ　あほくハ〻ゝびのやちるゝぶほ〻

切ゝや

大和物語

ゝれハさハ宮ふゝてふきえねゝや立りれども明ぬいゝ戸を
明ぬるゝて戸ハ宮ふゝてふきえねゝやト上へりてゝる
ゝてゝく先もきえねトも新の旬て切るゝ格ちるを
。ト交てやトゝり　けぐゝ　ゝやト切るゝも切る
格の旬を交て。ゝやト切るゝ〻ゝびのゝやハ

古今

年の内ハ春ハ来ぬゝりひとゝせ紙ぐぞ。ゝやいたん。ゝ〻。ゝやいたん
先ハ〻ゝびのやノゝゝゝやくゝをもそびていひさはかゝり

切やそ

千載

[呈ぬ]
[呈れ]ぬや志のぶやいろに[一]ぬるあかさと雫ー時ぐれの秋

をハ切るゝやうかさねていろにそひくるさと

あそぬまのくさえと雫ー時ぐれの雨をそもれぬや

志のぶやいろにト上へくりて雨をと

こもれぬやト 志のぶやトリ[一]バくさひのやく

切やそ

新古今

夕さるゝ命ゝけさるかげろゝ乃ありやあゝぞやそもかもー

あるやトあゝぬやトくバくさひのやく

切やど

千載

思ひなすりんゝとハぞや[一]ゐ流川ぞやゐ袖ハぬるゝと

をハ切るゝやうゝト交てくづけて 上へくりて思ひ

あすりんゝとそぞやトぬる袖 とハぞや ハ袖ひのやく

又 袖をぬるゝやトくバくさひのやく

切やど

古今

学る乃ぞるゝ袖ぬるゝ袖ぬるゝ[一]ぬるゝるやゝ

くるゝやトくバくさひのやひざきと これハ

老くるやト切るゝやうゝト交てくづけて 老くるやと

おてかぐゝんト上へくりて雨をと又 ゝハきぐて切る

こゝぞをゝト交てくバくづくるよと

切やに

古今

ありぬやゝんぐゝたひくよびバたくぶれかく記まぞゝ言ーき

をもかるゝやをゝト交てくづけくり又切りあるゝやト

くバくさひのやノひざきと 切るゝやハ語のあるバあ

あるハ却ほくゝト交てトへでけるのミと

や何

古今

まゝ歳くるやいづこみくゝ井のよりあく山ゆきハふりて

をハるひくるゝこのやいろこと けて ハるくこと秋ふくて

金集伝のるてあり

や何

於き

[illegible]

や何

彩古今

きくやいたくハの音ある風ぶゐ

[illegible]ハ上へうりてきくやいたゝ　けやなハ

そひうることをみてかゝ　又そひけて五つづくも

ありたゝ今のゆよつ　[illegible]

や何ぞ

後撰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まーやト いと耐ハうつへことのくるる やハノことこ

たゆ やそト いふ辞を

汨ゐ結ゐ 仆やそといふことを茶茶古今ちぐみも

ちこそ又後拾遺よりこあさの集みもまぐて

ちこぐ きこよくもあるぬ辞こト有

まーやハ

古今

いそのゐみふるゆゆ石ゐうくふ人ぐバ高ーと始めハまーやハ

こぐバ高ーと初めハまーやハ人ぬとも物高ートうつへ

ことのくるる やハノことこ

あーやハ

新古今

数ゐくバかくらまーやハ思ふゆ中ゐいやかゐ紀ハさづのをぐまき

数ゐくバかくらまーやハかくハあるまぐことめをトいふことこ

まりーや

古今

けふこぐバゐまをハ思ふこぐ。ふりゐゆ。清ぬハ始りとも郡と人まりや

郡とえまーや郡しハ人ゐまりトいふことんちぐてゐりーやハ

やハこや

古今

ちまれてハ人ゐうこそ。思ふ思ひきやちをみりけて人ゐ紀人ゐんとハ

まふくまりけて人ゐを人ゐんとハ思ひきやハちゆ紀ふゐみ

りけて人ゐを人ゐまーんとハ思ゐこざりーみトいふことんこも

やハノことのやこ

やぎこや

古今

思ひきやひゐのこれゐ物ゐくへてなゐの絶さ紀いさりせんとハ

いさりせんとハ思ひきやハゐりそゐぬをものをトいふこ

めや

古今

こゐやとハゐりゐまをのくり日ぐくくり乃ゐくくゐ考ハ生ちちくれて

こゐや ゐハせゐーどとハ思ふこゐめゐぐくトいふこと 先も

やハノことのやこ又つハ金情ゐるつこ

やや

古今

極くくくハ社ゐ紀ハ時やさくぐくん紀こそ。ちくゐ。祢さくへくれゐや

祢さくくれゐや祢まぐでもくれハせぐトいふこと

めやハ

古今

ゆきもよしいのれバ雪とも松ハあひみるとをしこひバたのハざるめやハ

めやも

古今

山しなの志なの滝乃志ろゐとに人の志るべくもとゞこひめやも

○ゆきもよしあれハ雪とも松ハあひみるとをしこひをしこひバたのハ

ざるめやハいろうあるもあるんトいふこと

○志ろゐとに人の志るべくあれこひめやも人の志るやうふハ

こゝろねどもトいふこと

らめも

後撰

あしびきの山下どよゝ鳴そなるこゑ拙思ふらめも

鳴そなるこゑとゝ鳴そなるこゑの思ふらめやあれごゝろえ

むそのハおもふまじトいふこと　「らめノめハんゝ」

いろとのみて　らめやハ　らんやハノこと

やハ

古今

思ひとゞん人をぞ人もにあるゝ　ゆきもよしいのれ

ゆきしやハ　あげきのやハ　よるしやハ　むしひあり

けりやハ　むしひしいのもあることゝぞトいふこと

上ノ方ノトハ　ゆるゝるれどもやハトいふこと

やハ

千載

人ぢてハさしてやハ思ふ人ゝ見せじやハ思ふるゝ

ゝ見ハやハヲ思ハトも交てトへづけて　こをふくゝ

ゝのみて　かのやハトハをこ一異ゝ　人づてハさしもやハ

千やゝふハよもあるまじ　思ふんゝく　ゝやつれ

いろもぞ　ゝ　ゝ見せじやハトいふこと　だやハ　ゝ

ゝ

後拾遺

ひぐ袖を秋の来ぬるゝ　ゝべだやいづれゝ

ゝ見ハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ

歌や

古今

さつきこバ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]や

後拾遺
人ふるせだやはれの乃新院こゝろ[illegible]れたるのゆ[illegible]れを

後拾遺
[illegible]のゆ[illegible]ゝぶくゝきたのめるさだや思ふんゝを

[illegible]せだやを。　人せあだや　なぐのたぐひも[illegible]ゆ。ゆ

てゆるゝこゝ

れや

後撰
あしあ中ハうきあるれや人こゝのゝふもかゝるもきゝくるゝき。

れや

新古今
ゐふれば小田ゆすゝをいとゆ行鳥前代あをゑふまうせて

○後撰ゐるハ　人ぐゝのゝふもうゝも少ゝくるゝきせ中ハ

うきゝのゐれやト加ゝれやゝ

○新古今ゐるハ　ゐふれば前代あをゑふまうせて小田の

ゆゝゝをゝゝゝ行れやト加ゝれやゝ

詞書はけあれや。ハあゝれ。ハあゝれ　のゝゝゝト有

なぐり

れや

後拾遺
なぐり乃月ぐんあれや。部をきぐひゝ声のれゝもゝん

山　あれやハ　あげゝゝゝのやゝ　アレナ　アレノ　なぐの

ゝのれや。　部ゝたぐ一声のれゝもゝん有ゝの月

れや

新古今
ぐふあれやナトかゝゝ長島のやゝ

あけバ又こゆべき山乃峯ゐれや。年り月の東乃ゝゝゝ中

山れやハ　ゝゝあり。やノゝのれやゝ　ゝり月の

東のゝゝゝ　れバ又こゆづき山の峯ゐれやトかゝゝ

れや

後撰
ゝゝゝゆゐれゝゝハ爰ゐれ。ゝゝもゝゝゝ記あをゑ思ゝで

ゐもゝゝ月ゝゝゝ　ゐり。やノゝゝて加ゝれやゝ

れや

後拾遺
ハゝゝやあゝふの池乃ゝゝ記ぬゐを記ゝゝあれ。ゐゝ人ゐゐ

「山やハゐゝゐるゝゝ」

ゐのゝぐひの れや。ハ　詞書ふ　ゐりや　ありやのゝ

ゆてかるゝとゝり
たのれやこゝかるばれやさきハ「しバニや」のことれやこ
古今
せのはゝ行きるたゆのゝみけちれやんひとゝ成さざやうもつる
れどもやノことるハけどゝゝるをしをしび行わても
ナレバニ
らびヌリやノことれやハるくもしをしびあ
ゝをものてゝるゝべー
後拾遺
行れや
けどゝもあゝゝるゝんハあふれやちてどゝをそ年ハへゆ。う
ちゝとゝゝるゝゝびの行のたるれやゝちハ　行きるる
「あふるゝ」
行れや
形文ノ
山法ふきるゝんハゝるれやをゝゝれてゝる月もあるとふ
「ゝ」ゝゝびの行ゝれやトゝふハるゝゝゝ
「ゝ」のゝゝんるべー

リヤハれや
源氏ノ文歌
ちほたるゝたゆの衣ふことあれやゝゝるゝあゝゝゆゝゝゝとゞ袖
ちハゝゝゝことのゝゝるやハノことゝゝるゝゝゝみゆゝゝ
とゞ袖ハちほゝゝゝあゝの衣ゆ墨ちれやハたゆの
あゝもゆもかゝりハせゆゝトいふことゝ
リヤハれや
去されハみゝゝふ先咲アれどたるぬ花ゝゝひあゝゆたゞちのゝべき花の名ちれや
行ゆ行ゝ　花のゝゝふハ花のゝちゝれやハたゞゝのゝべき
花のゝゝふハあゝゝゝ

りやハノ主の れやくけ おワのれや ハそうハりて
ちろ〳〵れやく 又けけ みゝたびのれや かちり
むまびゐのり むまびゐのあるれやハそどろふニ
舞いぢせり いてまぢれあせ〜ちあもまびゐなト
むてびゐのあれをとそとろべー又

歌島のや とハゐあるも

あげきとハゐをふハきど れいろあ〜むそ〜ふのくふ
めれどさふハあるぞ ぐれきまも おすしろきろも
あくれるろも ろくてまべて人ふふく感ぜろく
時あぐく島をつくくうと さてけや ハそ あげきの
声ろゆるふ今かりふ船島のやしらひて うをを
ろうりといり

歌島

千載
不月ふハろあの ちぐくふ 神ふれてゐあちほふれの 浜のくれ福や
歌島のやだじゐあもい るでくく やノトく ふ又ハのト
ろくてそをとをんぐ けちあげきのやゞかろもたり
又 ゐあるもあるこ

歌島

狭衣
あさりをる海士ろもろあ ろくふ海のあ庵ぢ玉藻ぢ ろべく
をハ 形古今 もぐあ あげきのやヲ海ろり

歌島や

形古今
あやとろそこぞろもあく ゆふそりそろあの美の ろとれぐさこや

歌島や

今古
あさきゝーやこハあるぐてのさきあぐそよ良せをしても生れぐりけり
をハ上ろりてあさきーやト フ白くろりて ろうこと

歌島や

形古今
ちよのうち波のうちぞ。 考あげる。なとあのちぐぎのいとそろあ/、せや
天ゐや 刃やあどい/ばくぐびのや。のうぐぢちれども

〜あぢ〜〜くあげくことくあれバ切る〜〜

歌島や

古今

ふれをのゝ見あといそぐあるべきぬいでやんくおほぬさふして

なこハいでやトあげくこまゝ見　けしでト学れるハ上ハ之

らびあふこえをあるせて金情ゐるしでゝ

歌島や

於き

いさやまぢ高てふこともたてあくおこやそあるゝいそ祈られね

けいさやモあげくこの見　こゝノやゝくさびのやあれ、

あるらんトもたぐり　又「ふゝや」「いそげや」「ゝゝや」

「ゝゝくるや」「ひあるや」「ぢづゝや」「ゝりるゝや」

「ゝるゝや」「ゝゝらゝや」　ちぐの彩ひハちげさのやゝ

歌島や

古今

やよやまて山ほゝく武ゝこゝつゝん赤世のゆふをゝ見びぬとよ」

見もあげくやノ見ゝ　やよやノ星語ハ　コレハ　又

あけや　いあや　あゝの赤ひもあげくこのやく

歌島や

新古今

あのゝが学ゝみ春ゝ　春春ぬぞ古ゝれゆ。茂さく田子のゝゝめしの才や

月や春ぐハ語のあるぐふたり射ハゝゝさびのやゆて見後

ゆゝゝひ何ゆて山ゝぶ格ゆれゝゝゆかくいひざゆかたりて

自然ゝゆりふある射ハ歌島のやゆて切る〜〜

歌島や

於き

君ゝが生ゝ宮の才果をゆくゝくゝ空かくゝてまで四ゝ月ゝ人ゝ

ゆ　たゆ　ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

歌島や

後撰

ゝゝ川乃澄の糸人ゆほゝ〜れどみぐりふ人をよせでゝものをや

ゝものをトいゝるふやトいゝゝゝて歌島ゝとつゝく学ゆ

歌島や

新古今

ふゝゝびぬゝのくをゝさゝのかりゆふゝゝたゝゝゝの袖やひゝゝ袖だかりふ

たゝゝゝの袖やトゝゆバ歌島ゝとトんゝゝゆゝて　ゝゝハ

かりゝゝてゝひゝ袖だゝりふたゝゝゝの袖やトゝ切る〜〜

欽良や

形古今八

あたれある。歌の文字のたてや。減こどりつひふハ地べの虎と知べ

ゝ。ハ陳こどりつひふハ地べの虎と思べ。あたれある

歌の文字のたてやナと上へくりて。るとき又什奇

一本ハ

くさびのや

形古今八

あたれあり。歌の文字のたてや。減こどりつひふハ地べの虎と知べ

ゝ。ハ あたれあり。ト。り。文字みて 切る。詞

歌のハあたれある。ト。 る文字みて 正つぶたる詞

り。文字なるゝハ 歌の文字のたてや。減こどりつひふハ地べの

虎あるゝんこ。思べ。であたれあり。ト。るとき

あるゝん。ト。いふもさびの詞を。さへ。ふくちたるる格

されバ。り。文字のあるゝハたがひのやゝ。又る。文字

あるゝハあげきのやゝ切るゝ

又。さへもさびの詞をふくめる。歌ハ。あるゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ

秋歌

△ いのちよぶやかりがつらひふしつゝも春風の如ふことつてやらん

彩古今

△ 神風や五十鈴川流を志ゝ〳〵伝べき世代おもふとりこん

後拾遺

△ 君が代ハつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすえかぎりハ

古今

△ 年ゝてるや難波のうつふやく煙のかゝるも哀ハ老おけるうち

彩古今

△ 志賀しまややまと志ゝねも神代より哀がゝるとやかゝるおれけん

けふぐもりやハ切るゝやもあらぬ〳〵こゝひのやみも

あゝぶ一つのやあて出ゝ〳〵やトあゝろ志てゝゝるとゝ

ゝゝゝげゝゝゝゝのと思ふべしされバ万よゝゝゝひの

や。又ゝ。こそぞ又ゝ。ゝ。ゝもいゝゝゝゝ

千載

△ かづゝきやゝゝゝゝ山のさゝゝゝ花ゝゝねのゝゝゝふゝゝやゝゝゝゝん

古今

△ 秋ゝんあぐさゝゝゝゝ

新古今
むさゝゝゆやゆけども秋のもそぞあれいづる風の吉ふふくらん

新古今
あふ坂や木末の花をふくゝふあゝしぞ手むけ[下]ぞ[上]冥の枝むら

古今
さゝ波や志賀乃都ハあれにしを山さくら哉

新古今
あほのゝみや月の光りをゝくゝろ〳〵ハ波の花おも秋ハ来にけり

後拾遺
ゆふ志でゝや志げき木のゝ下ゆ風ふけ分て又こゝ数ハ

後拾遺
あさぢ原や紅ふ枯ふ一秋の来ハ荒れぬ袖吹あしゝ

新古今
こ侍ゝにや来ぬもやぐひぬ芦の葉ふつのぐむ春の去風ぞふく

新古今
秋志のや小山の雲や志ぐるゝんいこまぐだけふ雲ぞ見られる

新古今
さもゝゝろやさゝ夜の秋乃月風ふけて月をかさゝ宮殿の楼閣

△

後拾遺
みち志ぢやあどろのかゝふすゝきはなちれ
たゝみ あどもるやハ例をおちくゝぐれハてきまくゝ
がゝくきやゝ ゆ志あどもるやの中ゆも 玉 新 又ハ
地名 ゝをゝろハこゝふゝゆゆ ゆ志あどもるやの
引歌ゆ中 みそハ 万葉 古人ゝ をゝくゝをつけて
ゝつゝきゝ あどもるやハ新古ゝふハいとあほゝ
○聊絵おゝ ゆ志や文字よゝみやゝゝそあれゝゝくハ あふ坂
むゝゝゝゆ をゝきてゝくゝよゝんゝとゝゝるん あふ坂の むゝゝの ハ
あどゝゝろばゝゝゝゝろハあれどかゝてゝもきゝゝんやゝん
ゆゝびゝあゝゝ きゝゝゆるをかくくつゝげてあどあまて
ゝゝり上有乃畧 されも神学のゝもどゝハ例をゝて
よゝむべゝゝゝどりふハよゝみどゝれやゝ

クツロゲタルヤ

彩和

こぬ人をやまちあかしたなびかやくやと吉野の方もこがれて

クツロゲタルヤ

拾き

かのをちかふるさとあすはなつかしやかりそめくづけてぞ思ふ

「明日」

又

クツロゲタルヤ

彩古今

山本の戸をさしたやひるげのあぢきなくまつれてる山のそれくを

クツロゲタルヤ

彩古今

きりぎすなくやあきの秋のさむしろ衣かさしねひとりかも寝ん

クツロゲタルヤ

古今

夕月夜さしもやあべの松の梢のいつともしらぬ恋もするかな

見い佛のあるでふ所にありていひざよ　あるじやん　見も

ゆるやまもあらぬ　こぐひのやまもあらぬ半ぐ弓張

うらうげこるやん　さればかな　ア　又ぞ　ゆ　こそ

こぐひのやまもさきてもさきてもぎこぐ　うらうげ

さてこるやトんたべー

「見ゆ　むまひハ　変格之」

ヤ何ヤカヤ

風雅

あふこなくに花やさかりとそ秋とハいくやどりしつ

山ぶきのやハニツのいろわたくもむやまて

ヤ何ヤカヤ

とよみ

里語を紅葉ノ下くに添て奇のことをんたべー

見も　うぶ　ア　ぞ　ゆ　こそ　あぢふもさたうぬたく

いひそてこるやこ　ゆもこぐひもせぬやトんたべー

俳諧納言松冊子

ヨノヒトヤ

こあ人ハ花ヨやくさやといそぐ日をもとぐこうをばそぞ　ちりけ

山ぶきのやハよノこのやトんたべー

下紐ノヨ

宗之集

子こやぶるいづこ社宮の神の詞ゆ味のりそやヨたくりもぞ　ちる

見ハ下紐ノヨノこのやトんたべー　味ハ　方　のこと

有あけ月夜　あぐむるや　又くつるげくるや　又
やけやゝ　ノや　又よあけそや　はさふもいるごく
ゆるくやもあくぶくぶや　もあくぬば　ゑで
又ぞ　や　ゆ　ゆ　こそ　トくさもありてもさいくぬや

○有あけこくやハひざまくさくあれバ引奇ふあぶくくてくたた
べース　ら　ハやふ仰くる辞あれバ付次ふいぶた
詞ゆ結ふ　ちべて　かハ　やふ仰くるこくをみてやくくくくいひて
よ紀ふもあほーゆくふ美おあふハやくいぶきあをかくいくる
こくあほーされどやくとかるくぶやくいぶきあくかるくぶ
かくいふべたあくたーふくるれくるあもあほーこぶくふハつ
くひぶくくート有

加之部　ら　ハやよもそび詞くあふくてもそび詞をたーくふ
せあもあく

く　後撰　あふあるかをるる月日もたくぬるふ人く年もくふをてぬとくきく
形秀　いくづふいく年波のくえぬくぷたのめくおきー雨のかくく山
ら　ふ武　妹ぐくと佐保の川べをゆけゆふバ小夜くふ更ゆるふあくあり
ぬる　古今　れくく山の黄の紅葉のびふるをのけぬとくいたん意のたげきふ
ん　万葉　いのそくふの水くの景乃形美ハくふふるるふちくるを新
む　ふ古今　かくづるく秋ふくふの紅葉てて人くう咲くん山ぶきの花
ひぐくやノやそひ詞くおあーどされどもくく
年くふもそびをやぬもあを

後拾遺
みゆきとゝのふふるせて今はこゝ赤染の橋ちゝをすゝげり
うけゝはちゝび河あり

切う
古今
夕されば人もとゝまらぬ秋ちゝひぐらしのみぞ鳴る流れ方

切う
古今
秋の月山べゝやうゝ出るハおつる白波の影をゝくとゝろ

切う
古今
ちゝのふるハ雲みぢうさゝ花ちゝを拭ーまぬ人ーなれバ

桜花ちゝを拭ーまぬ人ーなれバ雲のふるを

ちゝぐうゝ上へうゝ上へうゝて出るこ

切う
新古今
鐘ぬるゝ新ぐ尺くぐ出るこ

切う
新古今
きりくゝす鳴ぬ秋の夜ゝ

あゝ夜ゝ秋のゝゝ

こゝ切うく

後拾遺
きゝうぐ秋のゝ

「ゝ」ハ秋ゝ夜ゝ

ゝ切う

ゝハ切ゝ「ゝ」ゝ上へうゝ出てきゝうぐ秋ゝ

ゝ出ゝ

切うこゝ
古今
みゝ山の山べゝ出ぬ月ゝ

ゝハ切ゝ「ゝ」ゝ上へうゝ出て上へうゝ出ぬ

切うこゝ
於き
はの玉乃雫波ゝ出ゝ

ゝハ切ゝ「ゝ」ゝ二ツ有

切うこゝ
後撰
あゝ出ゝ

ゝハ切ゝ「ゝ」ゝ一ツ有

うげゝよのあゝ出ぬ

うーゝ出ゝ

ぐみ

古今

あく源五郎とゝ[illegible]

けぐみヲ人ハきみてよりり　河内国ハけぐみを

陸奥ハ清てよりぐも　ぐみ　ぐみ　ぐみ　ぐみ

ぐみハ中昔の言ハ　きさ紀ぐみ　坊ぐみ　むさぐみ

博士ぐみ　あどいるぐみと同じくて　美て手科有

きゝけてまつ之之　又ぐみハぐみといまそ

絲ヲぐみてみとゝ　ぐみとあそうおそ

きゝト有　詠ハ　友之　ハ之

新撰十

桜の花ハちりぬ[illegible]

新撰十四

おもふ[illegible]おひ[illegible]おひ[illegible]

ぐみ

古今

桜花ちりぬ[illegible]老らくハ[illegible]

老らくハ　あひろ[illegible]

老らくのこゝとゝ[illegible]

ひくのれト[illegible]　又[illegible]川の言の之も

[illegible]川[illegible]

[illegible]

よもも　けぐみノ里[illegible]ヲ　タメ　ホトゝ[illegible]

[illegible]

切うセ

古今

あ[illegible]

新撰[illegible]の山ぶ[illegible]

切ラセ

於き故き夫ハそのあるあ人乃人ラ元サテモ其の夜をぐらしてふことゆゝしん
られもまくふ同じ　はの夜をぐらしてふゆゝしんうやり夫ハ
そのあるふんのんらをとかるゝ

古今

春ちる時ハ名のみ行ふ人ぞつるハたちびく山乃花のうげラを
られもまくふ同じ

切ラセ

後撰

秋の夜ふ乃ラを。ふきて波ろ寄り我見ふ人のことつてやせ。
はるのゝ人ハ　秋の夜ふ乃ラを。ふきて波ろ寄る之我見ふ人のことを
つてやせ　乃ラをリテモ　と寄ることく　又

古今

今ゝそ乃ラを咲ふちあゝ人なち花乃小海の磯ち山ぶき乃花
はゝを流ふらのゝふそ　　花ハ切ラ乃ふあゝ
水き　あゝ川の山ちふ花のちぶりをのちあゝ　　あゝひとりうを流ん

花ハ切ラ乃ふあゝ　　花ハ切ラ乃ふあゝ
ぞ。のゝ。はゝ。ノちをびゝ詞と同じくて。ハさゝラふむをび
詞のあるもなりて又　むをび詞をたゝラふハせるも有之

■てゝををゝそのそぐるハ

形強文ラ

■　花のゝ乃ゝ　あラびゝ乃ゝをゝ　ゝん答のえの枕ゝ山の峯の紅葉ぞ
詞ゝ紅葉ふ　花ハゝ　ゝとゝ乃ゝをゝ　ひゝ　ゝとゝ有
花のゝゝゝ　あラびゝ乃ゝをゝ人ノゝ　ゝ張ラ有ラべ

切ラハ

古今

声ゝをゝびあけゝ　ゝ　ゝ　

切れうハ

羽衣

くれなゐの袴の裾をとりなしうハ人のたちのしうハ
かくしうハ人のくのこうハ人のくのこふもあるべしとうく
そのうるうハ人

切れうハ

古今

人めをもる袖うハあやなく花ぞちるなどほのぶぞ恋ぞしるらん
色ハ人めをもるられうハ人めをもるられうハあるべしと
そのうくうるく　又　恋ぞしるあるくんハ色ニ
くをてべしけむもしひ何ぞことハ同ノ川辺の
ものをを人をくんたべし

物語

切れうハ

羽衣

袖ぬらすこのたびきみくるべしうハ信太の森のみ校ハそのうハ
色ハ袖ぬらすこのたびきみくるべしうハ信太の
をりにも校ハそのうハそのうハあるべしと
くうくうそく

切れうハ

古今

春めくそあどう袖分ぬせるきそ　春ぞばりふふ行ぬ
春ぞばりふふあたるこそうハ春くるればこそくふふ
もなくとりふそく　色ハ　うハノそノうく

切れうハ

拾遺

うぬよ袖ばそむうばくもそむうくん　ぬるもぬるくハたのむべき方うハ
色も　うハノそノうく　ぬるもぬるくハ恋むべき方うハ
あまぬ命ハくのうくくく

ウくを
ウハ

古今 いウあゝん いそ月の中わたるバウハ在ちゝ紅ゝの中てこざゝん
ゆ紅を ウのをノウハゝ ゝゝをのウるをとるハなぎ

ウくを
ウハ

古今 花ごとにあらぬちゝゝ風をなれバいくそぢく経しとうハ思ふ
花もまつの図ゞ ウノをのウハゝ

ウフこを

古今 こゝその夏ウふるーてし部公それウあゝぬウ声のゝゝゝぬ
花ホハ ゝぢくをゝゝ ウゝゝトのウハ ぬトむまぐり

ウヲを

古今 秋風のふゝれあげホ半てる玉ゝゝ系ハ部ウなゝぬウ枝のよするウ
花ハ上 ニツハゝぢホ ゝくをゝわちウて切ゝり

ウヲを

古今 ゝゝもこゝ一ゝやゆれけん秋ゝもゝぢ夏ウゝゝウ森てウをあてウ
花も上 三ツハゝぢふゝ ゝのウゝて切ゝり

ウヲを

形和 思ゝ ゝぢ夏ウゝゝウ見れゝてなるウあきウホちげゝゝてを

花ハ上 三ツハ半ゝぢ ホト交てゝゝてげて上へゝてゝ半ゝゝり
ゝぢ夏ウゝゝウ ゝときゝをてなるウあきウホちげく
ゝを思ゝト当ゝてゝを

○切ゝて 図 のゝウバ

図ゝ切ゝホ 後のそぢめホあれて切ゝて ウの上ハ
ぢく格の辞ゝウ交る定ゝト有
ぢく格の辞とハゝゝゝバ
「あゝ。「あき。又「夢ゆゝ。「天ゆゝ。ちぢゝ
切ゝて格の辞ハ
「あゝ。「あ隆 又「夢ゆ。「天ゆ。ちぢゝ
されバ切ゝて ウのハ

○あらう　あきらう　又　ゆるらう　えゆらう
うくつぐ格の辞を交てうトゝバかろゝかん
かるゝやとハふりかゝるゝるものトんめべー
かるゝやハかるゝ終の辞を交て
○あらや　あしや　又　ゆや　えゆやトゝバ
かるゝやゝ

をハ語のおうぞ　あるをつぶハあゝび
白のゝうふ　あるゝこのことをつゝ
かるゝうハ　ゐふ　あべゝてんめべー

あらを

古今の序
まを御乃いゝゝゝ　ゐれ　ゐのちうせべてきさの
うぐちぐくはさりうのゝ　ひさゝくうぞまりゐうハ
命のさゝ雄も志りこゝのんをえゝゝんんハおは
そゝ月をゝうぶごとくおいわゝへをなふて人ゝ
こひざゝうを

あらを　万葉
たちてゝあのうゝ風乃うぐちゝ紅葉岐の山をこひそなゝあうト
わうをトゝうう時ハまべてゝゝへこのうゝうことゝ
　　万葉
ひううべきはうやされバかさてゝ紅葉みぶハけぬ友の京

うや

　　枕
　　けうやハあげくをうやゝ
　　枕
　　けうやノやハよトゝふをうやゝをも　ゆ

うや

　　枕
あふこうやゝ花のゝゝハ見ほてあやゝ花の名をゝ云るれ

何之部

何ハ　あゐ　あど　いふ　いど　いづれ
いつ　いく　たれ　たが　あだの
こゝぢのことぞを一ツふ何トいふをんなへ

何

く	そ	つ	ぬ	ふ	む	る	き

古今 蓮花ふのあごりふちまぬんつゝて あゐハ高を あとなざむく

古今 きのふこそさなへとりしか いつの里ふ稲葉そよぎて秋風乃ふく

後拾遺 ひゝかゝふあり衣のバさてもやまむべ花咲あどふこゝろ乃見ひあやまち

古今 たれをかもまつちぢ山のをゝこゝあべし紅と咲ら人ぞあらし

そハまゞとむもまぶ花を 待れの山へらいあけて花ごゝろ

下之部

古今 かゝるあハちゞりふるれどほゝくまなくあひしる人もせぬ

上ゝりなど徒 多のかゝりあれば　そゝト結ぶ格

大和物語 ちゐなどうたらくもなりもむ世ちつのひえ波みゆとうるゝあり

ぱトかれて　ゐぬみてむちふ格ゐるを　ぞトむちぐり　又

古今 ゐちまつあバたゞ名ハたゞ世ちゐのつゐあ紅あゝもゝ

そもまゝおあゐあじゝて　そハ　ぱトむちぐり　叶ドト

むちゝるハ　たゞ名ゝふつちへトやゝあこちゝ

ぱノ里後ハ　ハイ　トゐなべ

○いひうけあてむちゝるハ

古今 ちれくて見しハあごりのまつぞよも　あどちゝ川のちゐあのもかゞ

あどちゝぬトりあこちゐを　ちゝ川トいひけあて結べり

又　ぞハちゐ　ぞう　とうとも　交てちへづたり

まぐて　ぞハ　ちゐて　結ぞト　交てちへづるえの

ふ　千載

すむみをんあしとハたれちいふらほりだ。そのたづめをもとる。

むし　後撰

たゝたゝ洲をあうゝやむ。をこのまれなるほどハ抑りしもせじ

むし　古今

られたゆあかつ、まんかく衣たりとゆさこのみをてといくやすーを

けまをハこのをノこのををて上へハゝしたりおこをを

ゝゝをて余性あるこの乃ふこをふくまをて上へ

ゝゝみ当りハけおも

手しゝび　弓のを　て　手で　あゝふ　せた

で

あゝふハ上へゝゝぬがつゝ　ゝつりてゝををはノ西ふ引

ゝををゝをせバ又をゝんたべー

○又　ゝノをを　ハ

万葉

かゝゝゆめ作の西ふ苗のむ苗おこをハまゝゆつゝハゝゝ　せ

をハいゝふ　をノゝ

ん　古今

かゝこふをゝゝかゝゝゝかけて　ゝをゝハふをを西のををふせん

形古今

○むをゝ汨をを　ふ　西のをのあゝくゝとまでハをゝまれと対城

をゝ代ふあをゝハふを　西のをふをを　ふ　ふ

何をゝふ　をハ東ゝ高一かゝふをゝゝふゝゝかゝゝより

ゝけてあをゝハふを西の西ふせんとふをを　ふ

西

をゝ代ふゝゝをハふを西のををふせんをの西のをを西

あゝゝとまでハをゝゝるまゝ紀分ふゝをのをト

ゝふをゝ　ふふのむをびこをゝ城ハ本ふゆゝゝて

本ふのゝをゝをふくふて　のと更ゝゝト有

む　古今

いゝふゝゝいをほの中ふををゝゝハ世ふゝゝゝの吟ゝゝさゝゝん

ゝれゝゝハ　いゝふゝゝトゝゝゝゝて　吟ゝこさゝゝんト

むさびこゝろ　ざこんハ　ぞうこんトいふこゝ
ぞ　あノ　ふシ　さこ

ぞ　ズニモアラウ

古今
人めもるこれハあやめ花　さくきあどうちふ出て　ゑぞもこんん
けん　かゝ　ハ　ハ　ハ

是ハ志ぐゝみトふ五人 あゝんトふ詞を添て申さと

後拾遺

をゝふもさゝーてぐのくゝかゝ志ぐべせよいづれうなのの玉藻ゝ浦 ナラン

是ハ浦トふ五人 あゝんトふ詞を添て申さと

け詞を添てゝふを段を合て申移ふ上ぐれやさきハ

伺 ノトふ ピ 又 ピト 文字ハ上ゝ申ゝ ゝ下

みもゝ志びゆかくゝ志ぐる一ツの詞之たゝくバ

伺 ヒ

後拾遺

さびしさゝ宮城立野ゝ志ぐれバいづくゝ ピ 秋の夕くれ

これハ いづくゝ ピト 伺 ピ 文字めゝくゝる一ツの詞み

てトみもゝ志びゆハかゝくゝ

新古今

ヒ あゝゆゝ ピ ゝ見ひもられぬゆゝべゝふ海ぞゝ一ぬを山みその月

これゝも あゝゆゝ ピト ピ 文字めて 文字る 伺 ヒ

もゝ志びゆかくゝぬ一ツの詞之又 ピト 文字も志び詞のゝハ

伺 ヒ

古今

たれこゝの北花さけるらん志ゝ

これゝも たれんゝ ピト ピ 文字 伺れゝ もゝひさゝ

ゝもゝ志ゝ志ゝ文字ゝ

新古今

ヒ

ゝ文字る 春と秋のゝゝ海ゝ ゝ ゝ ゝ

こゝゝハ とゝらんトもゝ志びゝ

古今

○ヒ文字ゝ上のゝ志びゝ志ゝ文字ゝ

伺 ヒ

ゝ文字 あゝを ゝ ゝ ピ ゝ ゝ ゝ ハ

これゝハ あゝを ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ハトゝ あゝを

ゝのあゝんトふ志びゝ詞を ピ ゝ ゝ ゝ

伺 ヒ

古今

夕月夜さゝゝ見べの松のゝ乃ゝ ゝ ゝ

ゝも ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

あゝを ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝのゝり

又さしもや昔べのトいるやハくろげるやくもまびハかくんるけやハやくやあしほの　まりくるそ
あくやあ歌のあごめたごひつひぎまもあご
やくはひてんなくへ

古今
ゑむ
ゐ月ゑ月ゑとの見ひをれバ花ゑきえ秋海くゆてつちりゐん

けいづちノ里語ハ　ドチヘく

古今
げむ
東海のさやの中山なゐくゐあゐゐんをあめひそゐけん

けあゐく里語ハ　ナマナル　ナマビル　ケツク一　ケツクレテ　く

古今
ゐむ
ちゐ高の色ハひゐをいゐて秋のあけ色ハちゐふそむゐん

トウレテ

けいゐゐてトいゐ詞ハ後ゐふきの時ハむゐびゐハかゐゐゐ
あゐゐゐふきのいゐゐゐ
後ゐふそいゐゐてそ里語ハ　ナニトレテ　ドウレテ　ん

後撰
ゐ伺　ナニトゾレテ
いゐゐてかくゐゐゐふきみゐかゐらん
ゐゐゐ　ナニトウ　ト里語を後て少べ　ゐふらん
むゐびゐゐゐるゐゐゐれゐも奇のことハ　ナニトゾ
ゐてかくゐゐてゐゐこゐゐをゐゐゐ　ゐゐゐいゐゐて
のゐハかゐゐて　ゐゐらんゐゐへハからむ又
いゐでトいゐ伺ゐ後ゐふきゐゐもあゐくゐも後ゐふを
ゐゐハむゐびゐハかくゐゐ

ナニトゾ

於者
ゐ伺　ゐ長ゐ　ゐゐいゐでゐるゐゐゐゐあゐふせん
けいゐでトいゐ　ト後ゐふきノ里語ハ　ナニトゾ　ゐ又
ゐゐゐふきノいゐでトいゐてトの里語ハ　ドウレテ　ゐゐ

ナニトレテ
ゐも後てゐらべ

後撰
けむ
人をゐるんのゐゐハきゐさあゐてきよゐ見ゐすゐ世いゐでそゐけん

トウレテ

む

形古今

みちのくにてあづまいづこ川いつこきとてうこひしかるらん
これらハ ぞとてうこひてこんぎとる名ゝきヲとて更てよづけ
ろとてうこひてうる名ゝきハ物らんにてあるらりられそ
二首あ〜〜のとり又

（ナニトテ）と海てやうこをるハ

形古今

ふそぶもあうぬんをたちそのうちよ花くさて口人のゆくらん

古今

久うこのひうりのゝけきを春の日ハ口ぞんあくそのちるらん

古今

春のいろ物ゝうりうるぬ写ハあつゝ口よけるさうぞるそのそゆらん

古今

たゝ人ハ立ゝ北人乃かうとみうハ口そのそふぐふあぐらるらん

これらハのゝかうふハあしぐ 徒ノかうふて らゝとるうら

けたぐひ ナニトテ

む

古今

かぐりやふ乃ゝぬ写ひをちぐもかく なのみぐの川ふうきてうのらん

けあぞむ ノむハ ぞた こぞた あどの

たふ写ゝて けぞむを ちぐもいあぐとふを

ぞた こぞた ぞ こぞとふとと

古今

よひくふ松さぐもんかくもあ〜いた神しよう写ふそけん

後古今

○むをび写を本ゝ斉ふゆづる格ハ

あのづゝ いた 神しよの写たくてつ紀人をそ月をそを名

写玉結ふ 古今 立ゝ一のひくふ松さぐもんかくもを

いふ孫しよう写ふそけん とふを本ゝ斉ふて先二首

ゆゝ一を結をと詠こて いた みむまびをもを斉ふ

ゆづりて のと立ゝりト有 けを斉ふゆづる格ハあゝく

の文字（むをび写をふくをせること

六百十四ノ合

[illegible]

我よりはなでそふらあるかとよつくひのあみぶの御といづれたるけん

けんけんト第[illegible]ふらけんハ たゝくありけんノ[illegible]

くあノ反[illegible]ノ[illegible]りノ反[illegible]きく[illegible]きけノ反[illegible]けん[illegible]

三[illegible]ノけん[illegible]

後撰

[illegible]

[illegible]

後撰

[illegible]

[illegible]

後撰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ん

古今

春日野のさぶひの神守いてくるよ今いくかありてゐ菜つまん

る

古今

能ちかまる風の宮ゐハたれゐ志る新ゐをゐよりてゐゐん

○いひけもてむまぐるハ

金葉

いゐでかり神もゐれゐとみさ山ふさきの松のちよみけゐれを

色ハいゐハゐ神もあゐれゐるトやゐあるゐを

いひけもてもまびゐり

新古今

いづくゐゐことひハ宮をかりゐろもひもゆゐぐれの峯のゐゐしゐ

これハ いづくゐゐことひハ宮をかるトいゐゐこゐるを

ゐりゐろもトひけもてもまぐり

る

大和物語

人もみびもたれゐとゐりてゐ京ゐるゐ

上ゐかゐり ぞのやゐ

ひまゐ格ゐ 上のかゐり

ゐトいゐるゐ 初ハ ゐトいゐるゐ 初ハ ゐトいゐるゐ 初を

る

古今

いくよゐもあゐゐド系ゐをゐぞもかゐ ゐゐかる藤ゐ見ひゐだゐ

ゐゐるゐいれど伊ノ下ふゐピトゐゐ一ゐの初ゐてもまびハ

かゐゐび又ゐぞゐピノゐピハ別ゐゐぞゐピノピハ伊ゐも

ゐきもおゐド ゐピハ ゐゐ ゐピ文字ハ ゐゐく

ゐゐく保ゐゐゐてゐゐのゐきゐ伊ゐゐゐ

ゐゐーゐピ さびしーゐピ ふゐーゐピ ゐーゐピ

けゐーゐ ゐーゐピ ひゐ新ひのゐピゐゐく保ゐゐゐ

ゐゐゐゐゐーゐ京ゐ奇のゐ世ゐひてんゐべー

る

古今

新院ゐゐゐゐゐむゐてゐまゐゐもおゐちゐびいづゐ伊ゐゐのゐゐまゐゐピハゐる

これハ いづくゐゐゐゐのゐまゐゐハゐるトいゐゐハ ひけもて

むすぶ格ふ仮名れどもまふあらべ いひみけらゐのてふ
ハトあるハ上のいづとトてる句のそのをれのてりてる
ゑのあれバ下のあるをてゐるてりまべて
句ノ下ふらゐ又らハトいふてゐふおほーてるべ
ゐらハをのきゆる時ある
あがまてゐらあハ教まん
まべのてべい又詞をつぶてゐもらとてるハ
たゞあまぶり祇らふれる
いふのれだらふてハたゞある
有のごく句ノ下ふらゐ又ふトおくてゐふちゐー
付句ノ下ふおくらノ垂示のよゐーてぬハゆくー
詞をたれ

新古今
切まをたれたのべてゐ夕風ふちぎりらあん常のてち 元

詞をたれふ△のちてしれふあくべきてをあるを
そこふハおきべきゆるふせんてをあく示ゐて
下ふあけるおあていづれも ゆてらべト有下畧
有ふあまべへてんゐべー 付句ノ垂示のてハ
詞をたれふ 新 敷あほく あれバ人らべー

新古今
占今
ゑゐゐのてべひてちのちてふえいつらハをのきゆる時ある

○いひらけまてむそべてるハ

新古今
いてふ上して今まで世ふハ下りゆれつきせぬ面をいてふてろハ
ドウシテ
ゑれい いふーて今までよゐハあるトふをあるを
ありゆのトいひふけ みてむまべり又ゑハ上へてて
いてふんハつきせぬものをートふ余情をふくわてり
新古今
まべてふんをちもる花のえふたゞあまべり祇らふれつる

る

後撰

うやこふハ[illegible]れをうゑハ思ひいづる[illegible]えやこのくてをゑふめり

変格

形古今

変ゝつ[illegible]ハ[illegible]ゝふ[illegible]ゝらやゆゝ[illegible]変ゑいく[illegible]ょ[illegible]つ

この格ハそゝづれてつゝトむ[illegible]づゝハ変格ゝ変格ハ[illegible]ゝの

のゝ[illegible]ゝのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝつゝトハ[illegible]ゝト[illegible]て

ゆべし

変格

形古今

[illegible]をバ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

ゆる

後撰

あがれて[illegible]

上のかりた。[illegible]。後の。[illegible]時ハ[illegible]ゆ。[illegible]ゆ。[illegible]ゆ。

むまくぶ格

る

拾遺

[illegible]宿の[illegible]

古今

たが里[illegible]

ちる

萬葉集

[illegible]

ける

古今

[illegible]

たる

拾遺

[illegible]

せる

千載

[illegible]

れる

上ハかりた。[illegible]。後。[illegible]時ハ ゆ。[illegible]ゆ。[illegible]ゆ。

むまくぶ格

現在

き

古今

[illegible]つせの中[illegible]

[illegible]ハ 上ハかりた。[illegible]。後。[illegible]時ハ 現在ノし。[illegible]

むまくぶ格

現在

き

新古今

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

古今

[illegible]

[illegible]

後拾遺

[illegible]

上よりぞのやゝ行き過て下る時ハ 況至っきにてむまぶ
格なりを上へつゞけんとて 況至ノしにてもむまびてゝ
変て上へつゞきこゝろのもむまび詞をたゝこゝろてもむ
べゝハあゝべ上へつゞる時のこゝろハ

況至 きゝ

清茅生の少みゝきの糸思ぶれどなをりて あぞゝ人のこゝろしき
上よりのかゝりなゝ行き後 茅の附ハ 意しゝ ゝれしゝ えゝ
ゝゝめゝ ゝべゝ あゝ 況至ノしにてむまゝ格
○むまび詞を上へつゞきこゝろハ

おき

あゝ松と行きの末乃よゝ いゝれえゝしとときみのこゝ えん
ゝれも しゝきゝの変しゝ ちれゝもかくむまび詞をたゝ
ゝゝてむまゝぐるハ上へつゞる時のこゝ 意てのこゝ 意
あゝ代ゝゝたゝべゝ

況至 ゝゝ

おき

いゝゝみゝゝ あゝゝゝハゝゝきゝ

ゝゝハゝゝみがゝゝゝあゝもえゝゝゝ

ゝゝハゝゝゝゝきゝゝゝバトゝゝゝ詞みてむまびあゝ
ゝ上へつゞきゝゝ

古今 ゝゝ

あゝゝゝきてぬゝゝゝゝ

ふ

和名抄云合

神代よりいくあらへふし

この をとゝめるみが神ふる山を 神ふる山トハなるハ ひが

しゝ をとゝめるこが神トいふまでハ 序ノ ふる山ノ 大和

て

於き百年

神ふるとるみの宮れ屋ふたれ西ふみぶれて物ハ見ひそめて

ら

古今

行ふる社屋の 姫まつ人あるでいくよろへしこそとゝまし 万葉

見ハ いくよろへしト切ふるを ヒト変て万へつきふり

あ

あしハ一ツの夏

扇

常乃声ふるりせバ 雲きゝぬ 山ぶといでまをちまし

ドウシテ

シカシ

け ふるりせバ りせノ反レ れノ ふるりけれバ ふるれノ

ふるノ ケニうとせて ふけれバト 雲てもよし

あ

古今

樹の雫ふりあけるこゑふまぶひ ひせバ たれとくふこをまし

シカシ

けやりひせバ ひせノ反レ ぺノ まぶひせバ ふるぺバノ

ま

新ふる歌

ふるまさの みゝ ふりとふりふせバ いぶれの雫 ふけてとゝまし

シカシ

け ふりせバ ふせノ反レ 孫ノ ふりふせバ ふりふ孫バノ

五字一音ふりふせて 孫ノ ふにうて ふりふバト

うる時ハ 雲へやきー

○古今 土 ふやき 涙ふふるりおひせバ ひせノ反レ ぺノ

うるり ふひせバ うる 生 るりおぺバノ

○古今一 ふて 平ふて 樹のふるりせバ りせノ反レ れノ

ふるりせバ ふれバノ け ケニうとせて ふけれバト

うる時ハ 雲へやきー

○古今五 ふみぶ 紫のふぶれぶりせバ りせノ反レ れニ

ぶりせバハ ぶれバ ひせバトいふ河ハ見ふぶるくて

ふるべし け まし トふるるハふるく せバ 又

ませバトいふ河ふ

ふ

○後撰十一　義孝卿　ものも宮うちの人のあらませバ
○万葉二　恋多川　たぐるみてさしせがませバ
○後撰十九　さくらバよとわれし時ハいとませバ
けらませバハれバトふこと　うませバハけバトふこと
むませバハへバトふこと
是を二度反しハ古れバ
むまノ反し　むこ　たせノ反しべこ
これし時ハいそませバ　これし時ハいへバトふこと
又うませバハ
うまノ反し　うこ　うせノ反し　けこ
たぐるみてさしせうませバハ　たぐるみてさしせけバトふ
又らませバハ　こと
らまノ反し　らこ　らせノ反しれこ

物古今
たれ　ものそ　ものあつげ　ものし　百芝の義ことろもあまくなましくバ
けまし　ノことハそしどゆもいれど又てあも
まし　ハ　んこ　ノてまれる詞と歩ゆ
むこ　ノ反し　まこ　又てそト　かりてまし　ト
むこ　ノ反し　まこ
むこ　ノ反し　まこ　ムフ海て　まこ　トくる
ものあつし　又　まし　トまこ　ベトハ　こと　ものり
こ　ものあつし　又　まし　トまこ　ベトハ　こと　ものり
物古今
これ　さも　ものこれも　ものこ　こと　まし　ものこ　ものこれまし　うバ
こと　ものこ　ものこ　ものこ

いろはの里語ハ ドノヤウニ とかろくいふハ はまのもをびゐ
くたくる 例 ものゐり 奇をいざせり

まー 後撰

ものしらぬ人とは云の歌ものしれる人とは云ものしらぬ

ム あましらぬ あバヲのぐらる 何と
× れまーらぬバハ らバヲのぐらる 何と
▷ たまーらぬバハ たぐヲのぐさる 何と
ス らまーらぬバハ らバヲのぐる 何と

きえあまし らぬバハ きえあバトいふこと
とれまー らぬバハ とれらバトいふこと
ゐたまー らぬバハ ゐたらバトいふこと

あらまー らぬバハ あららバトいふこと
ス らまー らぬバハ ニテ反 あれバ
らまノ反 らー反 りー反 りノ反 らト
あれバ らバと
▷ たまー らぬバハ たぐのごくろへせバ
たまノ反 たー反 ひー反 ひろノ反 たト
あれバ ならバと
× れまー らぬバハ くへせバ
れまノ反 らー反 りー反 りろノ反 らト
あれバ らバと
ム あまー らぬバハ うへせバ
あまノ反 あー反 ゐー反 ゐろノ反 あト
あれバ あバと

けまーくバ　乃ゆを詠ずくませて上へくるぬ

まーくバハ

後おき

月報のいる紙をくむもくる　紙面ハ山のあうらまーくバ

けまーくバト留りくるハその所のことをよりて　まーくバ

の下へ詞を添てゆべーこれらのことハ　面ハ山乃

あーくまーくバくらくまーくト添て四字とこ又屋のあら

ぢふ　まーくバトいれバ　ふまーくト留り又下ふまー

くバト留り半ら留時ハ　おほく　上へくりてまーくト留れ

ろこ又

於き

若狭中ふ所のまーくバ。思ふ人ゆえ紙ぐおもくもゆふけるくあ

皆ふハ　所のまーくバよりまーくと思ふ人ゆえ紙ぐおも

くも紙ゆるる事といふことあるをそのよりまーくト

りふをとゝ文字のへふくまーくるる格こ

まーく

於き武丁日記

たゞあるくどゝバくりあくくゝひふゆるゆけてバいふふくゆーかくまーく（ドノヤウニ）（シカル）

けてバトいふ須ハ　あるくゝ名とりてバ

あひんてバ　おのびるてバ

ゐどめてバ　ゐられてバ

あどのてバノハヨ　おのびるてバ

りてよむべきこ　けてバハ　てあれバノどまりくる詞

てあノ反シ　たゞ　たれノ反ゝ　てゝ　下のバヨ添て

てバトでめくる詞ゐれバ　パヨおどりてよむべー

風雅

■てゝあをを改そのそざるハ

■若狭中のくゝくびゝどふあどさもるよーゐ行のあゝまーバ

詞ゐ結ふ上おゝぞのゆ。ゆ。ゆ。ゆの辞ゐゐれバ　もるとゝる

そのくべト有　又ト白ッいくちゞ　モトいそぎれバ
いくちむまび　まーうバトひてハくのくもバ斉のさも
ひくくび

ら　ハ一ツの詞

壬二集

ら

東海や見づあの松もうちてくいくへうもの　ひるくつら
けやハ　あづむるやこ　むまびあハかくくび

もとより下ハむまびあかくくぬ　のくをいづん

何モ

古今

あくひこーたゞいつくうこよぶこゞまつとせーるゆ庭の草生
見ハ　詞をくづくくこ　モトいり

何モ

古今

いくよーもいくこゞ　あ多ゆ　あぞもかくなるゆるる藤ゆ見ひくぐろく
ひゆ　あぞもノこハ別ニけモハこゞ海　るのくゆさあ

あぞもハ一ゆのくる詞　そもノくーそ　なれを

何モ

古今

とられてゆんくぶつか。旅くろも　いくへうさある山後ありとも
あぞこもハ　あぞトゆくこ　見ハ　くくモトいり　けごくく　とモ　又モトいるハトの
むまびあハかくくび　又　いくへうさあるノあるハいくゆ海
びあハあくび　くくあるトよくできくり

何モ

扶き見笑

見ゆてあぞ乱しも半くあ　旅けきぞ山後ハたれを旅人ぞゆく。
けあぞハ　くこびひてくひくるぞニて切くくハたれモト
いひてくくゆ　ぞハくトもまびくり

何モ

扶き

いつくうモつくまゆまりくくせちんつれあ人の　海ゆ敷凡ん
けくくせちんノちんハ上ノもまびあハまくび　見ハ海づつこの
あんノこ　扶きこのくちんノ上ゆかりハ　こモ後ノ　上よりこモ

何を

後拾遺

月見れば たれを[illegible]んぞ あぐさもぬ 焼きて山の ふもとあるねど
見も焼きて山の ありとあるねど月見れば たれもんぞ
あぐさもぬ とよつゝ なりて 為るさん

○何をとのつる羽をよせて てんれバ あぎゝてんれべー
ちやを たれを いつを たがよを いくを いつを
ぞれを いぐくを いつとを いつてを いつてを いつを
いぐくを いつをを いぐれを たが身を たが身を
いつまれども いつ手代を いつきある山ありとを
けたびもをびあかそぬひとつのことだん

又

何添も

古今

いまいくを 考へあれバ 常もこのハ あるて見つべくあり
見ハ けりつ丁へを とて 学さん

風雅

人去れぞ 見つるハ年 ハてもあふのうひ あくありぬべきあ
見ハ あのうひ とて 学さん

何添も

千載

見やまり いつしを ぬるたるあ あるぞを高の ちるべあり ひる
見ハ けりつ丁へを とて 学さん 又

何添も

○何をとて交てもまびあかそぬもあるあり

後撰

いつしを 春やまつ山お今ハ とてこゆる浪ふ ぬるし 神ちあ
うぐいごとく 何ヲとて交さる 乃おむまびあかそぬ一つの
詞

何を

拾遺

いつしを これを 為るの大きハくあるさへそ これ一かりけれ

何 ㊁ 古今 けふよりハ今こん年のきのもをぞいつしうとのこさちこそるべき

もゝとハ今こん年のきのふをぞといひていつしうとそひ

さちこそるべきのぎハ上ノぞうむきびこ

何 ㊂ 古今 秋風ハ山乃ふもとのうつろくでんのこゝろもいろ〳〵ぞあるふ

むきびかこそ〳〵ぬ搭をこれ〳〵よきゆてんたべ

いろ〳〵こゝひてとト交こるハ人のこゝろもいろ〳〵あんと

こそあるふトいふこゝをそこあんトいふむきび

何をとゝふこゝせてとト交こるものこけ搭ハこゝろ

の行ふて何ノ下をとゝト交てむきびゝ及いひぎりを

んたべこん

何 ㊃ 古今 こゝもんあのあふをうたゝとゝ思ひしハこれもあん人のんをもりけり

ゝ

ハ あふをうたゝとおもひしハト いふこと

あふをこの あふんトいふむきび何をとゝふこゝせ

こゝ 何ハ上ふもいこゝ とこゝ上のむきび

何のあらもいれどゝ

いつこともいふとゝいつこと

あふゆゝこゝ

後撰 かこゝぬこゝあこゝるがたゝ

何 ㊄ いつこともまこゝひこゝハこゝあくふまこゝみこゝの山をこゝ

何 ㊅ 古今 いつこゝとハ時をこゝるゝど秋の夜ゝとの思ふこゝのかぎりあり

をこゝのこゝひハむきびゝこゝぬこゝぬこゝ二の何こんたゝ

○他をこゝこゝふ何こゝむきびかこゝぬ一の搭こゝハ

他ノ去何 古今 みちくのゝゝぶのぢこゝりたれゝこゝふみゝれんとゝふこれゝこゝあくゝ

仕 他ヲ云何 ハ 詞を換へてそれなるべぬ 他のものを 何ものと問へる
古今十四の新ハ 見わたすに 対へてその他の人を たれと
いつり 云をあきて 他の人ゆゑふこぶれんと思ふられ
あるべきと有ト畧

他ヲ云何

古今

けふ見のあるかぎり見ぬ山ちろの見えぬをこんこと誰のことそ

あひこんこと見えぬこと 名のみのこと ハ思へばとりあつ

他ヲ云何

万葉

あさ霧のけやきたれ命 たがこふ あもせもがと云思をあくか

けやきたれ命をあるこもと思ハ 云ゆゑあこそ思へ

他のこのこゆふハ思へ たがこそびとりあつをたがこあるーいこと

仕 他ヲ云何 ハ たれ たが ふふ トいふ云の

こゝでハ他をもこゝにくらがあるきこ

敷何

○敷ものをいこでハ ゆきびかかこびこ

おもき いこでいこで 云ふるこをあるこ後のもちでのこの伝おもこ

ナニトゾ〻 仕 敷ものをいこでこ ハ上ふもいこれど又こふもいざせり

敷ものこいこでノ里語ハ ナニトゾ ナニトゾレテ こ結びおるな

こゝがものこいこでノ里語ハ ドウシテ こ毛ハあれ むこ

詞をこもこ捨こ

夫木

敷何

いこで ピピト 見ふこハ云りこの井こもの井こもの敷ぞふこきこ

ナニトゾレテ

土佐日記文章 云ハ ピピト こり

敷何

いこで こく こゆこ こもこ ゆこ

ナニトゾ

○切こ 何 ハ むこびふかここび

切何

後撰

ものもハいこふやいこに 切 風のこ伝ものこ伝ものこ今こものやこふ

仆いうゐやいうたノやハ　あげくこノやそくろうげさるこ

切何

夫木
仆世ゑも後をもいうたいうたにぜんこくんけぶりもむせぶこれつ
ゝこハ後をもいうたトかりていふぜんトこそり　さぐて
切ゝ何も白ゐるふゐるがおほゝ　俗のありだふ
ある何ハあをくゝさがふこあてトをもひそぶ格こ

切何

水老
ひゝふゝるふもゐバあゐハ切さもゐゝバあれいゐてゝひるゐ物ゝふ分イ
仆あゐハト切ゝこノ里語ハ　ナニヱコガアロウ　こ
さもあゝバあれノ里語ハ　コレハカマハメ　こ　奇のここハ
いきてゝひゐゐこのおゐふ分ハひゝふゝるふもゝゝゝ
あゐハトかさもあゝバあれトゐゐこ
○ゝゝゝひてゝゝひゝゝゝこハ

何ぞ

水茶
あゐゐものゐゐのゐゐゐ

何ぞ

後拾

なうらんぬ　ぞ　ものごとふもれらハ　たれ　ものもの　ものの　ものの　ものの

ひくたびてとひくるぞ　ハくるぞ　ものとへどてくも

ぞーいひ又　いたぞ　あるぞ　たれぞ　ひとつもふ

あり又

詞花　ものこうりふ　ぬ　ぬる　れ　何の　の　ものの　ものの

新古今十一

たれ　ぞこの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

上ふ　たれ　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

むもびふハかもの　ものの　ものの　ものの　ものの

一ぢニ　たれ　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

おもひもられど　たれ　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

たれ　ぞ　ものの　ハ　ものの　ものの　ものの　ものの

後人可改

何ぞも　古今　ぬ　ものの　ものの　ぞ　ものの　れ　秋の　ものの　ものの　ものの　ものの

何ぞも　古今　いろよりも　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

ハ何ぞ　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

何ぞや　拾遺　いろよりせーものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

たれ　ハ　ものの　ものの　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

や何ぞ　朗詠集　ゆきやもの　ものの　ものの　ぞ　秋の　ものの　ハ　ものの　ものの

ハやものの　ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの

ト何　新古今　萩ぞ　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

たものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本末

ぞ　の　や　何

く

かく　ゆく　あづく　ふく　ひく　ふく

いづむく　さハぐ

是ハくるトハいそれぬ
詞なり
けくるトいそれぬ
たゞひのくヨリつゞ

す

さす　こす　ちらす　あす　ちらす

ものす　かをす

是ハものすトハいそれぬ
詞なり
けするトいそれぬ
たゞひのすヨリつゞ

つ

まつ　たつ　あつ　うつ　うつ　ほろつ

こがつ　ものつ

是ハつるトハいそれぬ
詞
けつるトいそれぬ
たゞひのつヨリつゞ

ぬ

たゝ〻と
きりぬ
せめ

ものの
たゞひの
ぬ

何トかりて
いひざまふ
ようて
○ぞ
○ど
とをそる
例あり

ふ

見ふ　いつふ　あふ　みわふ　いそふ　あそぶ

むそぶ　しらふ

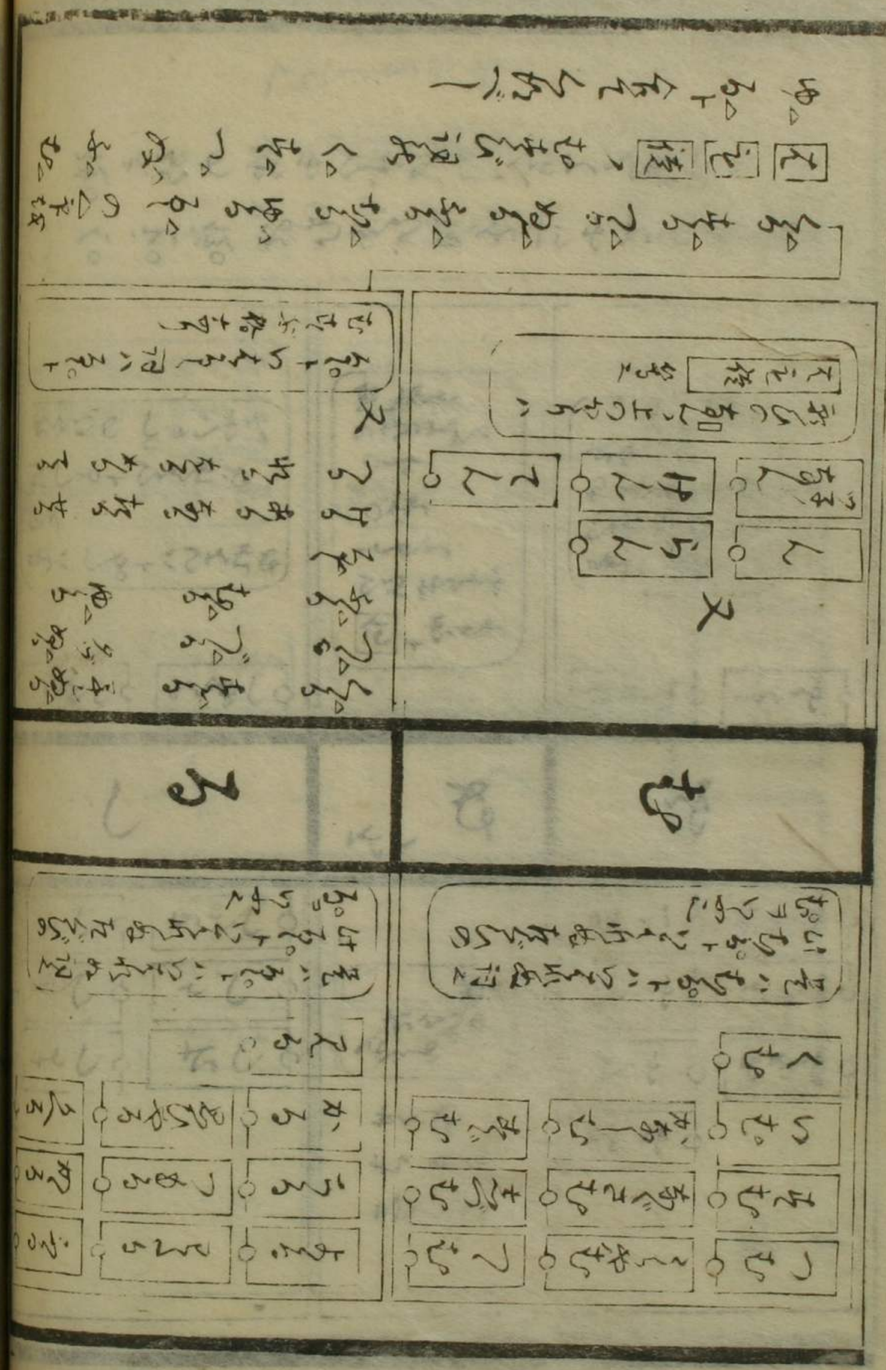
是ハむそぶトハ
いそれぬ詞
けるぶトいそれぬ
たゞひの
ふヨリつゞ

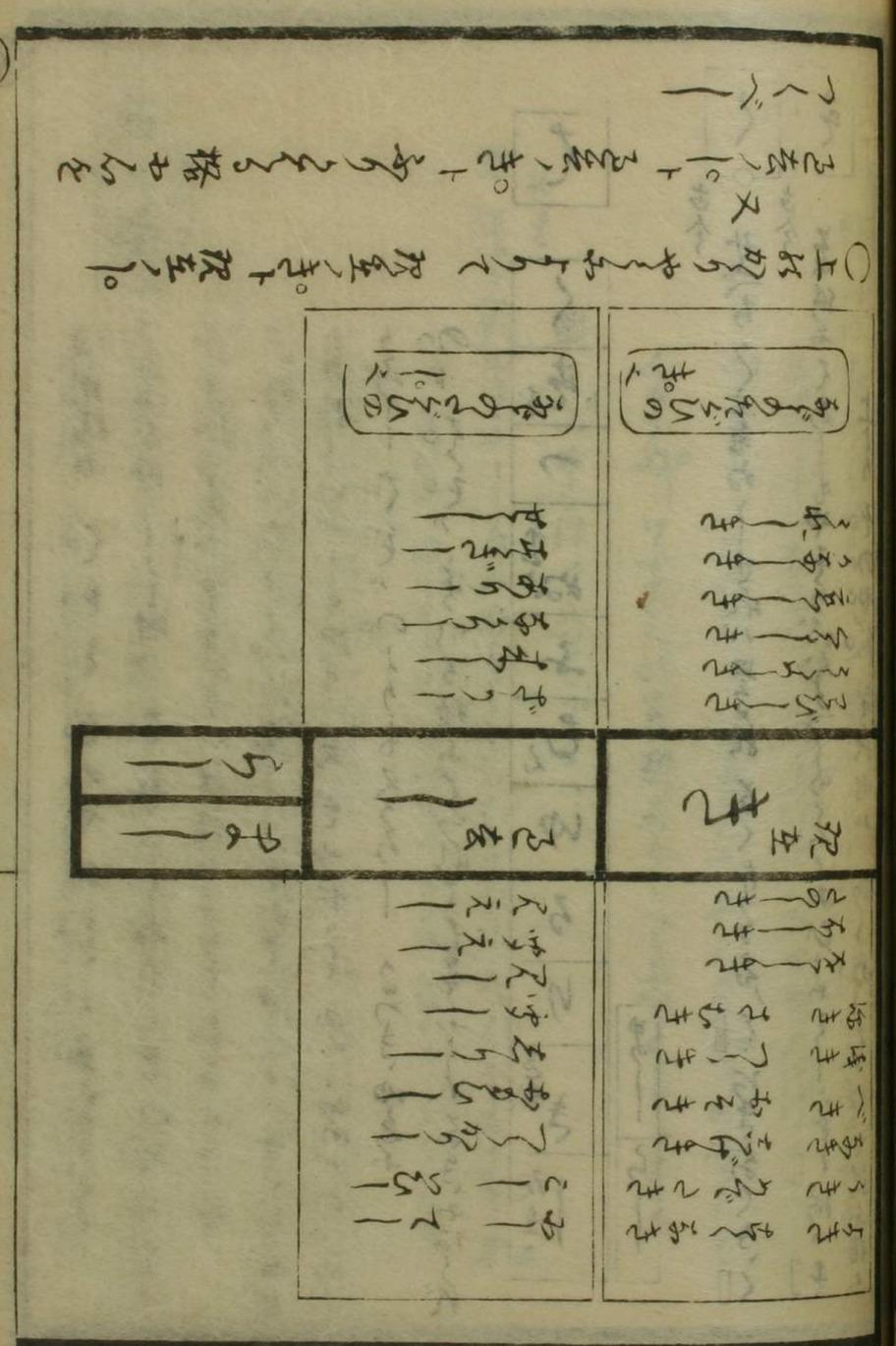
○は。ま。後。ぞ。の。や。何。

[illegible]

[illegible]

[illegible]





波之部

詞也結ふ　ぞ　と　ぞの　や　かも　そと　まもる　と
つゝふ　ゐ　ー　こ　時ハ　も　ぞ　ハ　ら　ろく　ぞの　や　かも　こそハ
ゐり　ぬ　ゆ　ふ　ま　ら　ろ　ぶ　ス　ト　有
又　定　り　る　格　ふ　と　ば　れ　あ　ば　ら　ま　れ　ば　の　ハ　や　し
変格　と　い　ふ　も　つ　り　又　ぞ　や　か　こ　ぞ　ゐ　ら　ま　れ　ば　の　ハ　や　し
ら　ー　ぞ　ぞ　ハ　の　ら　り　も　又　ら　ら　ー　ら　つ　き　ゆ　る　や
の　ト　ぞ　ぞ　ぞ　が　定　り　る　格　ふ　と　ば　れ　て　も　ま　ぶ　ら　く　あ　き　ゐ　た　ら　ば

た

く　古今　ま　ー　ら　ー

ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー

く　古今　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー　ま　ー　ら　ー

く　古今

美後ふてあしもやもちびかよへ　ま　ま　ま

変格

古今 梅の花香にのみ秋のこぬかぎりは

かけてもおもへばなり

をもはぬとおもふべきを格をとりて ぬ

変格と上のもいくさのおもてのこと

詞を添て ぬとなる

き〜〜〜

つ

古今 月たちてつゆをぬきとめたまとみるまでに

上よりぞ。の。や。何。名をかる時は たてつるとおもふ

格とされば つ をふ。下はつゆ。の。たつ まつ

つ。あ。ぬ。ひのつるとはいそれぬ詞とをるべ

呉ノ ぬ

古今 春の野に若菜つまんとこしものぬれてたもとの花かをるひぬ

ぬ呉ノぬを上よりぞ。の。や。何。名をかる時は ぬる

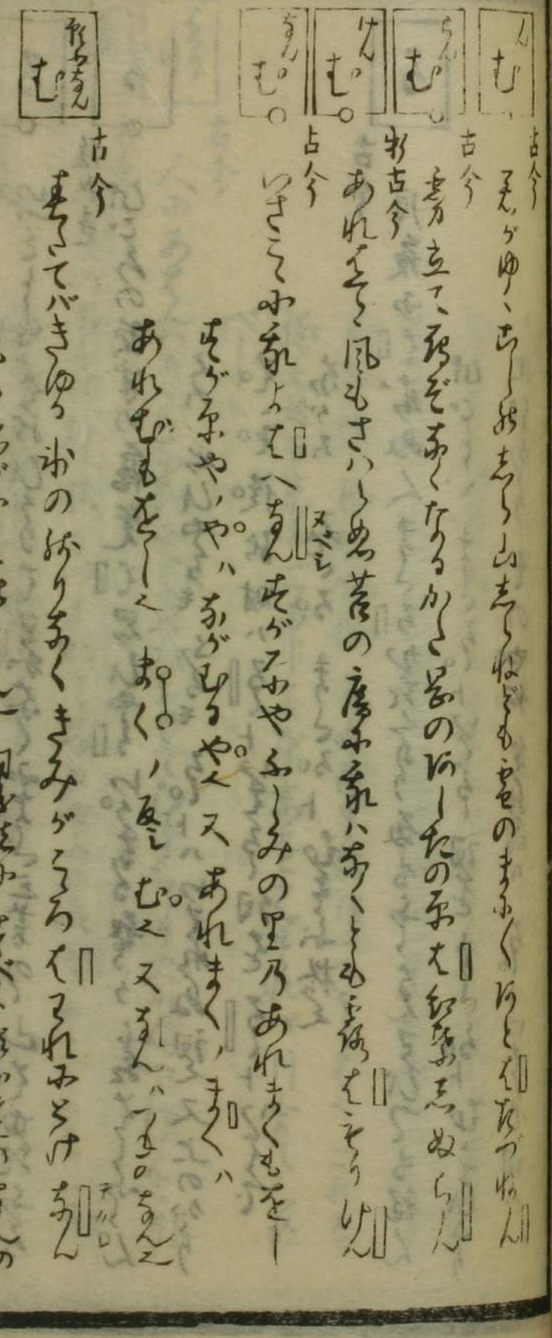
変格

ぬ

ぬ。ぬ。ぬ。

流ハ 自流 ながれ きハ そふ そく
流レ物ノ とき ハ そふ そる それと なるト
あり

俊恵
つれもなき秋風をやたのむ秋風の身わさむきよハ雁もいなゝり
きハ やゝかり ゆそ たのむト なりこり
古今
今しかとこそ びわ 抽出さぐふの 夜わかりこれをたのむる
きハ のゝかりわて たのむる ト なりこり
俊恵
いのちつきぬ古代の始終 毎日山に天てる神のひろさ ふ
俊子歌
きハ のゝかり ゆそ そふト なりこり
こよひ ゝ もゝ わの月を光そりそふ 秋の海山なびひこそ やれ
きハ そゝかり わて そふト なりこり
あの 終ハ 海後を 人をべ



ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ん　古今　たのもしことのたゆたへ人しれぬ事あらばまねぶべかめり

ゆ　拾遺　山ざとの春の夜ハ長こゝろなくあけぬるかをの花のゆゝ

ひえゆ。雪ゆ。あぢゆ。ゆゝ当れるハ上もいつることゝ

上ゆかりハ也。ゑ。後のトんなべて

る。　後撰　いづことも春の日かげのあたるらん心しづこそ花の散るらん

後拾遺　ひごろの歌ずの癖光たゝ見ひやるいつ春の雪うち散るらん

るの　ちひやるモ　ふるモ　る。トハいまれぬ現又上のかり

ゑ。ゑ。後。ゑ。時ハ　る。トいそゝ羽を　る。トいそで

あげる。　みざる。　まゝる。トむまぶ格

る　古今　月夜みたれぬ人まゝるかなくゝりあるもふゝちんるびつも福ん

ひごゝゝ　まゝる。トいそゝ詞をまゝる。トむまびゝ

上ゆかり　ゑ。のや。伊。　ゑ。時ハ　る。トいゝゝ詞ハ

る。トむまぶ格ゝされバ上ゆかりやゝゆかりて　る。トゝ

いまゝゝ詞ハ　みざる。　ゝ見ひやるゝ上。まゝる。トむまぶゝ上ノ　る。下ゆ

又ま〳〵の　ふゝ　見ひやるゝ上。　る。ゆ。千ゆあるハ　ゝ

ゑ。ゑ。後。ゑ。のや。伊。　ゆの　むまび詞一つゝゝゝ　これを

後之歌の末ゆ一つゝゝゝ　ゆ末を見れバ川金てんゆ

べー

り　古今　人ゆあるんつきの夜ゆたゝ見ひおきてむまゝゝ夫ゆんやけをり

り　形古今　ふゝ色のふゝ秋格ゝづれてゝゝゆゝみゝたゝ

ひゝハ　ゝけり〳〵　ゝ。ゆ。ノ反シ　せゝ

り　古今　ゝ春人ゝ花の衣ゆふりぬゆ　苔代のゆたゝいゆ井ゆよかせたり

り　今宴　苗代のゆたゝいゆ井ゆよかせたり　武やゝげゆふゝ屋代ゝゆ

ゝゝハてあり〳〵　て。ノ反シたゝ

り　古今　ふゝゝゝゝゝゝ春衣の紅ゆ花ゝ見たゝさゝけり

後撰

いせをとこるりし袖よりあぐるれてとふみとれぬ才てう記ぬ

ぬ

後撰

仕せ法師の詞のこゝ

ひめりハ〻ぬ

古今

みさむひ虎うさとゝせ高城北のこゝ

里君ハ

オモムキナヤ

ある　あれモあるど

ぬ

上のかりやゝ

上おかりむ。ゝ。後。

上おかりぞ。のゝ。や。伊。

をる　ある　ある　ける　ある　れるトゝ。ふハつ

ぬハつぐく格の頃上のかりぞ。のゝ。や。伊。

ぬ。ゝ。ぞ。のゝ。や。伊。

つぐく格の頃上の

ぬれをしつきをゝる頃又　けり。ある。ゝ

ゝトゝふ頃ゝつぐもけゝ格の頃ぞ。後ノむ。

頃ハつぐもみをけゝ格又

什くの撰集ぞ。て。弁の歌をゝるトゝ。ゝることハ

ゝ。て。古人ゝ者の弁

やよひみゝびきの

よゝる。

ひゝるトゝいゝるハ弁ゝつぐく格ぞ。ゝるトゝる例ゝ

ゝ。ぞ。ゝ。ゝ。ゝ

○何を法て〻ふをは此今て学ぶとあるハ

抜き
あゝ京の年立つるはしさとうまたらものさ学のこゝろ
られハ声の五へ有りト法て学ぶこと ろかくもの ト
あれゞゝもまさるこゝろとそのた。うくひすの声。ト白の
さとり法むとりかりたう語のあらぢよりかくるハ
まれゝ

後撰
春ゝ雨そむく苔の衣てたゞ一夜かるゝはかりぶくとーいざふる初ん
花ハ三の白ハ一夜も、下へ有り一法て学ぶこと 衣だ
古今 哀ふ学ぶを味ひてんたへー
明ちゝぬ山てふ下の根ハとてるかのことなら山ふ色のふるらん
花ハ語のちくでハ ようかうこう ふじ根ふ
有りト法て学ぶこと

好古集
人素と家のとゝろふふハ有れこし祝ひ有ふまされり

後撰
風やゝもちぶうちあせんさくるふ初ちたくかりき
上ハかり ぞのや伝 学ぶ時ハ ゝかり ト結ぶ格之
上ハかり ゝふて るをゝきト ふうかをるト
ちるべし

抜き
ゝびてもきふふぢりてるし てきるゝ。自分のかぎりあるゝん
上ハかり ぞのや伝 学ぶ時ハ てー ト むぶ格之

古今
ふるべふ三月ハ色をつゞてれ。ゝをきみぐらみゝまりかき
上ハかり ぞのや伝 学ぶ時ハ ゝー ト むぶ格之

後撰
ゝるゝ人のかゝゝぐてゝくをゝるぎりき方ふあずゝる花ゝー ゝるハ

上ハかゝりぞのやゝ多ハ ざり[illegible]トむすぶ格

■[illegible]ハそのそぶるハ

万葉五

■多良志比賣可尾能美許等能奈都良須等

神名

美多多志世利斯伊志遠多禮美書

志

詞玉ハ見ハ上ハ [illegible]れといつれバ[illegible]ト むすぶ

べきを [illegible]きとそろハたゞりゝハ志を吉ハ[illegible]

語ハ[illegible]ハ出ハよく ゝ[illegible]ト有

又

形古今

みちはゝ[illegible]ていづも川 [illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

てゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

への浦ゝ[illegible]

けゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ上ゝ[illegible]ゝ[illegible]

むすびゝハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ文字あり此ゝトなるハおゝく下ゝ上のむすび有

ゝゝ[illegible]べし

古今

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

後撰

秋ぎりの[illegible]

上のかゝりぞのやゝ多此時ハ れ[illegible]トむすぶ格

古今

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

上のかゝりぞのやゝ多此時ハ あき[illegible]トむすぶ格

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

上ぶかりそのやゝ伏なる時ハ　べきトむすぶ格

○いひけさてむすべるハ

新古今

春ふかみ花をむきかとそハこゝてどもれてきこえてあほたちぬ里

花ハ散てきこえてあほたちぬ

大原の里へいひけてむすべり

まー　春の山ハ出そて桜ぬ咲ぬうせバ春のんなのどけ[illegible]

ヒカシ

らー　ハ二の段

ニンカシ

らー　六帖　立田川紅葉ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ山乃紅葉ハ今そちるらし

らー　こゝハ上ハいるこゝ

○上ハいる　なそトぞのやゝ　そトかさねるこゝ

あらー　千時ハ　ぬりぬ格の詞ハ　よりてむすぶトいるハ

仮名遣

あゝ仮の実をや春ぬこゝ　山のけさてうそる

けさトあれバ　けさトあれども　上ハのゝ

ようて　うめぬトむすぶ例ハ　だ[illegible]かゝりぬてむすべバ

めりトり文字ハ　ぬてもむすぶ格ぬれども　ぞのやゝこそハ

ぬり紅格の詞　なそもハかゝぬ格の詞ぬれバうぬごとく

ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

そもそ　こゝく　あゝゐらさん　よりさん

ゝれゝゝみ　ゝゝハゝゝゝゝゝゝゝのあて　ゝさあゝ

又

ぞハ助辞のゝ　ゝゝふゐほくあゝゝゝのゝ

ゐをゝ　ゝれだ　人ゝ　ゐゝれだ　ゐゐゝ　ちゝぞだ

ゐふゝ　おゝぞ　ゐかゝ　あんだ

月の光ゝ　あゝれだ　んゝ　秋のゝみぞ　ちゝれのだ

ちゝゐぞゝゝてんぐゝ　助辞のゝ　だふぞ　ゐゝ

ちゝもあれぞ　ゐゐ　ちゝゝ　あゝゝ

毛之部

そハ　ちゝ　ゐふゝ　ゐゝゝゝゝ

を	く	も（ど）	つ（ず）	ぬ（ず）	ふ	ゆ（ん）	る	り（ゐ）	き（ゐ）	ゝ	ゝ
										ま	ら

く　古今　あゝゐくさ浦の川岩立ぬらし山の木秋葉もゐゐちゝゆく

も　古今　ちゝぬぶる秋代をきゝぞ立田川かゝゝれゐゐあくてゝちぞゝ

上ゐわゝりぞのゝゝゝ何　ゐゝてかゝる附ハ　ゐゝぬにてむゐぶ格ちゝ

ゐゝぬハつゐハつゝく格ゐ

形後枕詞

まゝぎゝゝぬゝゝみをゝゝゝ部公ゐゐぬとつゝる人ゐかりせバ

上ゐもゝゝるごゝく　ぞくゝゝハ　ゐるゐゝゝ之

形古今

ゐゝゝゐ之の山べゐあくゝれてゐゝくゝ日ゐゐゐをゝゝつ

つ

上ようぞのやゝ　年をかさねる時ハ　つるゝトむすぶ格之

年と
ぬ

古今
ふれんてを久しくあるぬ　なれにしのきしの松いくよへぬらん

上よりぞのやゝ　年をかさねかりられバ　めるゝトむすぶ格之

変格

拾遺
谷の戸をとぢぬとそ　つる　常のまつ　ゆるせで　春を　くれぬる

上ゆもいろどくく　変格ハ　さ　ゆるゆ　ゆそこれ

らハ　ぬるゝ　へ　ゝトゝ　ゆ　さ之

後撰
ふ
こよひしも　ゆ　あの月を　ひろそふ　秋の　山を　見ひこそ　それ

古今
む
ん
ゝくハ　へて　を　志の　ぐん　をみぢ　葉を　吹　ちゝし　を　山おろしの風

手本
○又ん　こと　ゆ　を

万葉
人もぐ　ゆ　ふ　を　ゆ　きく　を　ゆ　ゆが　ゆ　ゆ　さく　ゆ　ゆ　ゆ　の　日　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　声

よそ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

例ナシ

む　六作　ゆ　ゆ　六作

ゆ

る　後撰

る　後撰

る　八ハ行　後撰　古今　支木　ハ行　ハ行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上よりぞのやゝ行 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

ま

後拾遺

なみうくゝゐうくかりしまにやゝゐせばゐるゐそぢゐあり

けゐ みせバ みせノ反し 初之 やゝ 猶バ之けゐ 初ノ なゐニ

ようゝゝせて なゐバトゝる射ハ 所のゝ之 ゆゝへやゝ

ら

らしハ一ツの詞之 宋古今

ゝ風のふくゐもゝさる波ゝなゐ之ゐ ゐ之ゐ

そもよりてハ ゝ ノ ひざゝ ゝ ゝれゝゝをいづん

古今

素性

ゝ せとゞくゞきよひあり ゆゞゐの 橋乃 ゐゝゝひかゐて ゝゝる ゝ ゝ

ゝハ 上ハ 徒ノかりゐて ゝゝる ゝ ゝ ヲ

ゝゝ 徒ゝゝ ゝゝの ゝ

秋 ゝゝて いく日 ゝ ゐゐ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ト

ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

徒之部

徒

く　もゝ　つ　ぬ　ふ　むん　ゆ　る　き　ま　ら

徒トハ　詞ハ徒ハ　ぞ　そ　ぞ　や　か　こそ　ぞ　ふ
詞ハ　ちきこを　今かりみうくいふと有

く　古今

秋風ハ　おろしぬらし　草木ハ　うまつりさせてふきりくもあく
草ハ　上ヨリ　ちそ　徒ノ　奇之　ぱ　徒トハ　ハ　上ニ　ぬトモ　ニトモ
又　ぞ　の　や　か　そ　ノ　ハ　も　ち　て　ち　を　ハ　又　こ　め
ぞ　ニ　徒ノ　ち　び　ハ　ま　も　ち　ち　格　の　ハ　ま　命　ふ
□　ぱ　ニ　の　ち　ハ　ち　も　ま　ハ　ま　ま　ま　ハ　ま　ま　ま　格　ま　ハ　ま　ま　ま　ハ　ま　ま　ま

つ

古今
あれにしろあぐさしろしつさしろしあや〳〵やハあぐもるやと又けつハ
上ようぬかりぞのやハ名ぬ時ハ　つるトむすぶ格と

新古今
■てあをぬそのもざるハ

■かきつくるくるくるある後あれどあてもあばんんやあるとて
ばかきつくるヲ　河あぬふ　くきつけつト有べしト有
上ようりぞのやハ名ぬ時ハ　かきつくるトいふ格
ありこれぬふハ人やあるとてかきつけつト上へ
ようりて名ぬとすれバ　俗ぬかりぬ一句と

変格

於米
かしあるつくまぬ神のつくぐとヒゲ引ひとつふ　立ぬつミつるカナ
上ゆもとるごく　変格ハこの歌ぬるものゆ　つるノ上へ
うあぐ後て世こと

変格

新後拾遺
たゆかぬこハ思ひたつちんをの川いそぐ舟をかしつるヲ
れ〳〵ハ　つるノ上へを　なト後てせこと

早ぬ

古今
棹弓をてくるあけあるりぬ　ぬ　ぬ　ぬ　あばこあつてん
上のかりぞのやハ名ぬ時ハ　ふりぬるトむすぶ格と

変格
春を
ふるもぬるあのかぬのいるあそくるれあくこをふりぬるヲ
これるもぬるあのこと

ふ

古今
あうぐそとうくあみぐ後ふそふ　あそくるふや　をてさハこゆん

む

チ歌
さぐ後やくあつこかみのうきびてあこれやこお月ひとりをむ

ん む

後拾
山ふるくにんもきりぬさうぬ　いくくあうびそられこちやさん

ら む

後拾遺
いくぐくあつけかるうんたあぐさの後ぬふあいるこ天のおうも

め む

月詠集
和の歌をおのゞ月あとそひけん　声もくりぬあてきにふ

む 古今

あしびきの山ぢまがくれなるゝ[illegible]ちるをみやまハ[illegible]ひもあり

けもんハつゆぬ[illegible]ん

後撰

ぬ

ぬ

ぬ

こゝハ上へ久りて　秋の夜ハなを長月なるなりけり
寛元せ[illegible]こと[illegible]ありやト切るこゝ　そノ人
ゝト添て少こゝ

りう　詞記
ふるさとハ春やもれぬりみちしのくみきゞ雪ふるすこゝあたり
たりハ　てあり　てあノ人　は後ノ　ゝノ
かりて　りトもまぐるハ　上ハかり　そのやゝ　ゝふ
てくる時ハ　るトもまぐ格　は格ふこゝれあるふ
ゝのつるを裏格とこゝ

りう　古今
秋の夜ハ人まつ虫のこゝもなりていぎこゝやこん
これこゝハ　のトあれども　長ハ　ちゝ声のトレバ　長なる
いこゝれども　かくいあ朝ハ　後ノかりとこゝて　ありトいこゝ
ちこゝざゝのようこゝ　ゆ　又のハこゝき格ふれ　ゝこゝふ
よりてハ　ゝのちく　ありトこゝるあこゝ

裏格　古今
あひふ行ひて　ゝ　ゝ　ゝ

り

形子義

いさり舟のよきのあま人いでぬるゝ浦風ゆゝしく手みゝとれり

古今

哉宮の池乃岩あゝ咲ゝ山ゝ〳〵表に〳〵ぞうまあゝん

り

後拾遺

たゞあゝよりひゝふハゝれと吹あゞゝあゝつきたゝで人をこひけるゝ

裏格

こゝゝ〳〵ハ あゝつゝおゝたゝで人を云けるゝあゝとゝこゝ

き

万葉

人こゝゝ城たゝけゝこゞたゝあゝぞゝりきんゝあゝゝゞこと れゝゝ雨とゞゞせ

けゝを里語あゝいゝゝゝ人のこゝゝをゝけゝくゝゝゝゝゝ

ゝゝゞけゝゞゝハゝゝゝゝゝ

上はかりぞのやゝ　ゝきとむそぶ格之

古今　なりぞくそふみうの系いづみ川くくるさむし　□　たつもうせ山

上はかりそのやゝ　ゝ　さむきとむそぶ格之

■くくるはそのそざるハ

玉葉　■さねだるもあすゝ　ゝ　ゝ　

たちくて いそぐ

雪ぞ あく　雪の あく　雪や あく　雪は ふらハ来 あく

雪も あく　雪も あく　後 雪来 あく

又

花ぞ ちる　花の 立ちる　花や ちる　陽 格の花の ちどちる

花も ちる　花も ちる　陰 ちづん あく月の 花ちる

ぱらぱ けん ぱん ぱ　ぱ　ら　ハ 引 あて

ん 結べ

ちるあるとくて　ぱ　つ　ふ　む　る　細 ん 結べ

又　稲ぐ ちとの ちん　結 ん ふ ふ ら ハ　ぱ　ぱ　後

ちまて　上　立　後 ノ 引 手 の ご く む ち び 詞 の 格 ハ

ぱ ち つ ま ノ ぬ ふ ぱ ん ゆ る り　ち ノ ま ち ま ら

千中の むちび 詞 解 後 立 添 物 ハ 自 ハ

○ 後 と ふ ち の ハ　上 立　そ の や 伝　こ と 後　そ の や 伝　こ と 上 ハ 立 物 の ち き 立 ハ

解 ハ 自 解 ん の 時 ハ　ぐ く　ぐ く れ　と 為 り　解 物 ん の

時 ハ　ぐ く　ぐ ナ　と 為 る　後 ハ 自 後 ん の 時 ハ　ぐ く　ぐ け

後 物 ん の 時 ハ　ぐ く　ぐ る　ぐ れ と 為 る　立 ハ 自 立 時 ハ

ぐ つ　ぐ て　立 物 ヲ　ぐ ハ　ぐ ふ　ぐ れ と 為 る　添 ハ

自 添 時 ハ　ぐ ふ　ぐ く　添 物 時 ハ　ぐ ふ　ぐ る　ぐ ふ れ と

為 る　為 ハ　為 が　為 ん ヲ ん の 時 ハ　ぐ の む　ぐ の わ と 為 る

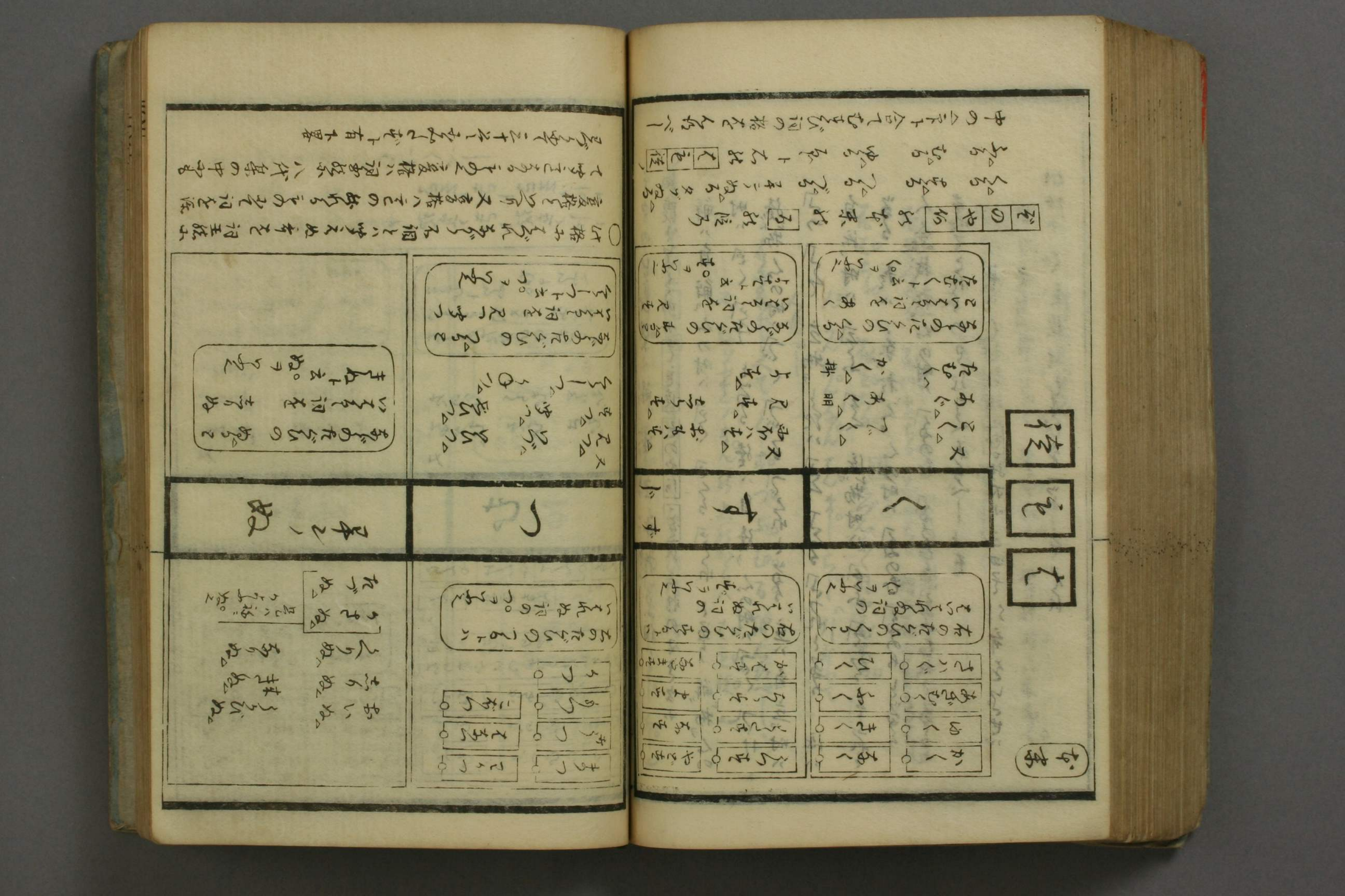
人 今 我 為 ん の 時 ハ　ぐ の む　ぐ の む れ と 為 る こ

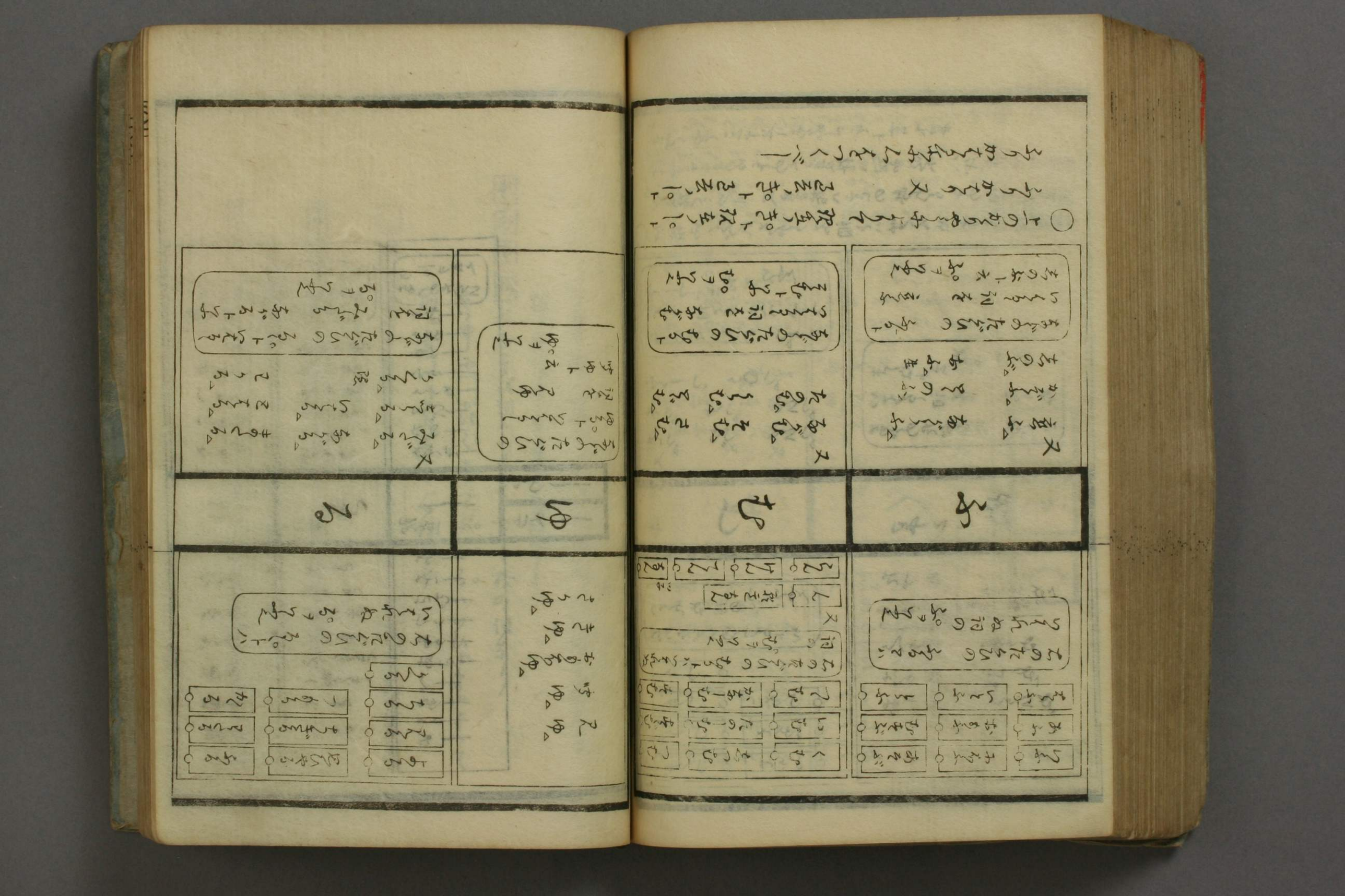
ま べ て こ れ ら の ま ま ま あ ら べ ー ト 有

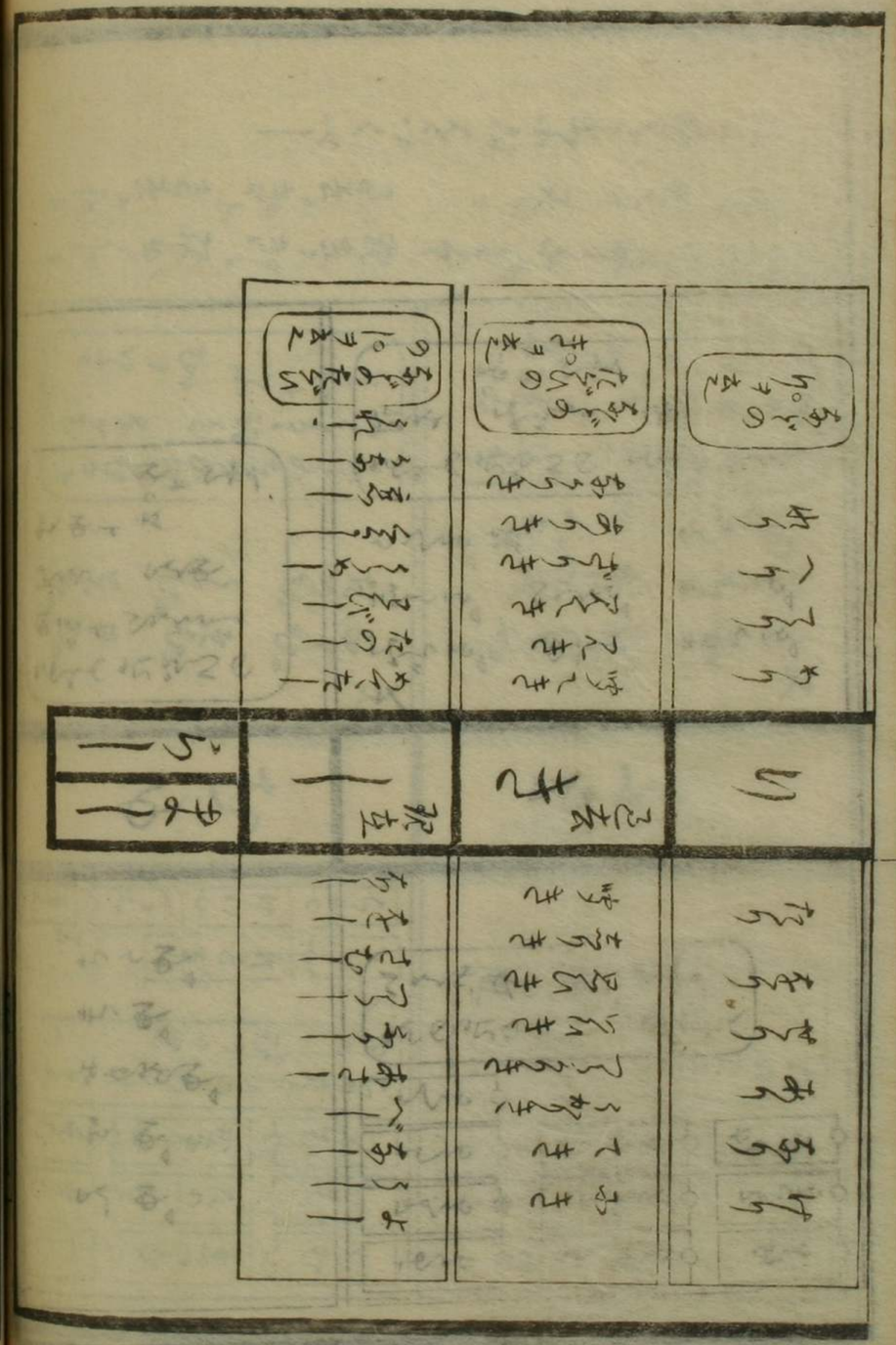
長 ハ た 之 為 ハ　む　ぱ ち ハ 三 四 そ 引 手 を ら ぐ せ ば

ま ん ま べ

ぱ 次 ま　ち　そ　後 ぱ ち む ま び を 一 ま ー て ま ん







た　を　後　おもむきび　切て　つよみも　切て　接の　詞あり

そ　ぞ　ぞ　ぞ

古曽之部

こそ　け　せ　て　ね　へ　め　れ　き　ら　り　ら　ま

け

平家物語ニ云

なりくちて朽むとすれバ流れ川ながれも淀みあるものとそきけ

拾遺

ゆきとのとほるもそそ人をゆけ　あど時の雨もふるなバ高しぎ

け

拾川ニ云

ふるへも高き山里乃淺茅生とふるのすゑにたゞりこそませ

後拾遺

○もゝびあゞ〳〵ふくつゝてきふるハ

せ

長慶

たちつくせども恋の思ひ月なぞ。人ハ来るべくりける。

て

拾遺

人ふれぬ恋をこそまて

○ひとけもてもまぐらハ

て

新古今

みゆきもるかとのくるのふるあるきたのあるほどにたてこそたて

ね

古今

春の後乃雪ハあやなく梅の花いろこそ人とわ秀やハかくるゝ。

春やハ

○ふくでけんとてもまび詞をたゝふるハ

千載

もゞくこそ藤ゑの高ふくこゝ

ゝ花ハ人ゝ稀ト也まぶ桜ゝ花を人つゞけんとてもまび

詞ハ　稀ヲ　ゝ　ニ　ゝ　ゝ　ゝ

ふくませて　ありせバト　宣りたり

○むすびあげ　万へ　つきたる八

ね

後拾遺

たちかへりるそのそふこそ　あらねども　あとと　今八たのまん

見ハ　ものもト　交て　万へ　つきたる

こそト　宣りたる八

百樂せどうの

いきのそふ　あハ島へど　人ゆ　おもこそ　吹風ふ　ハ　あたらく　逢べきこのそを

見ハ　そノ　万へ　あそねト　宣て　ゆこそ　「入ぷ」　并のそハ

いきのそハ　つくいき　ひくいきこ　つくいき　ひくいきこ　あそれも

ありへども　人ゆ　おもこそ　あそね　吹風ふ　ハ　ならバ　そび

そびあふべきこのそを　上へ　ク　万て　けこのそハ

宣る　格ふれバ　こあつていき　ひくいきたゞ　吹風ふ　あらで

そびくあふべきこのそを　いきのそふ　これハ　たゞ　くども

人ゆ　おもこそ　あそね　ト　宣たり

へ

後拾遺

おもふれバ　神こそ　ふ　万へ　ゆ　おもこそ　ふ　神の　ちづくを

○万へ　でけんて　むすびあげ　神の　ちづくを　万へ

子義

よそ人ゆ　ふこそ　れ　宣る　ふ　ふこそ　ふ　ふこそ　ふ　神の　ちづくを

見ハ　ふこそ　ふ　ふこそ　ふ　ふこそ　ふ　ふこそ　ふ　ふこそ　ふ　神の　ちづくを

でけんて　ぺヲ　ぷ　ふ　ふ　ふ

たのむもしび詞をたゝゝゝゝゝゝゝハ
詞をはのぞえをはゝ　そのはゝび辞をたゝゝゝてゝゝへで
きゝゝゝ所ト　ありてそゝゝ川所ふ
金玉集
めづらしゝ　ゝゝゝゝゝゝゝ

山たかく　きぞたなびく　河たやこ　流のきぞきよき
神さびて　見れば見やとく　よろづ一ぢへ　みれば清やけ一
この山の　つきハのこ　こそ　この河乃　たえバのこ　こそ
こゝ過ぎぬ　あわこやどころ　やむをたもあり　ゆ
これらハ　こそ　二ツを　一ツの　ゆ　ふそ　もまぐり
古今　たぐこゝやをこ　をの山もこふこそハ　神代のこゝも　見ひらづ一ゆ
山やハ　ぬぐもるやこ
乙類　こぐれて　神ぶふ　ちさぬ　社の　ゆふさこそ　嵐の　ゆ　のかこゝゆ
山　さこそハ　さぞノここ
サヤウニコノ
軽名　城なみたゝゆ一と　見ひけん　人をも　紀ハ　さこそ　つんこゝゆ
山　さこそハ　さゆ一ふこそ　ノここ　又山　ひらゆ　見んゆ
ぬぐの　ゆハ　ん　ノこゝ　上のこゝり　ゆ　ゆ　後
ぞの　ゆ　伝　きこそ　ゆこゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

古今　ちりぬれバ　こふまど　ちこゝ一　ぬれ　ゆ　こゝ　ゆ　ゆ　ゆ
古今　あぐこそ　見ぬん中ハ　ハ　ぬれ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
古今　何ふまでの　かこゝこそ　こそ　ぬぐ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
上　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぬん　ゆ　ゆ一　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆノここ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

千五百番　ゆ　ゆこゝを　ゆ　ゆこゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ら わ

新拾集

○むすびあげつゝ五つづけこゝろハ

あゆみゆくばつれなく[illegible]なる人をれぞこゝを[illegible]と思ふ

これ〳〵ハ ピト 交て五つづけこゝろ

れ

古今

[illegible]

後撰

[illegible]

れ

後撰

○こゝと[illegible]ハ

あ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ こゝノ五 あれ[illegible]詞を添て少こゝ

風雅

[illegible]

千載

[illegible]

れ

大和物語

かくきけ[illegible]

[illegible]

後拾遺

○こゝの[illegible]ハ

後拾遺

[illegible]

詞[illegible]ハ こゝのたぐひ[illegible]

[illegible]と当[illegible]る[illegible]ハ詞を添て少こゝ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]詞を[illegible]

こゝも二字 三字[illegible]

○五つづけこゝ[illegible]

後撰

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

五つづけこゝ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

これ〳〵ハ　そのさまなり　ちそもあれトもきこゆ

又

於光

ふるさとをおもふあまの女房人のものらひさぶみ〳〵紅葉ふ

けゆくもハ　ものモ　モ　物語

丙紫

れ

後撰山のもをあたんと思ふ〳〵そたぬべきこの城なりもあれ

ハあり〳〵ばこそ　思ふこそ

けゆくを

於於光

■　後撰山のもも海そんと思ふ■ぞたぬべきこのをりまでもあれ

とあり是を詞書けゆくハ業平朝臣の

白　念社とある所　詞後撰ハ耳　ぞたぬきふよりて

思ふぞと書れたる所ハこのたざるを

又業平今の本れ　ありのこそと例らも侍りあり

れ

古今

沖津波　高師の浜の　あだなる　名をこそ　惜しまれ

古今の例　一有

後撰

○ひらみてもむすべるハ

難波津なる　ふこそ　浦ごとに　月やけ　ぬらく　ひてこそ

月ハ　ひてこそ　ひられトいふこそ　ひるを　ひのこと　しひ

けゆくもむすびそ　ひ

れ

古今

大さの秋　ふるさの　赤ぬ　こそ　ふるしきこのとおもひたりあれ

これらの　ものの　上より　ものとの　ある　ものを　ものんべ

ものの　むすびみ　しきトもむすべるハ　多生山もあれども

右の　ものみ　こそ　かな　しきトとも　けゆくこと　ものハ大さの

秋ふるさふ　赤ぬ　こそ　ふるしきこのと　思ひたりあれトも

ものこそ　かなしきこのと　思ひたりあれ

わかりこそ

■ここのことの葉のをたづてそのえざるハ

■ふるゐ歌 重こゝハ爰ゐのことゝ有ひきそうてともあれこよひありけれ

これハ 詞ゐ結ゐ 是ハ けれとハ留りしれども ここの

辞 けれをへハかゝらぬ 山ゐの名れハ こゝひまゝゝ

あり名れとゝそぶれバうゐそびめ又 爰ゐのこゝ

といそぐ この句ゐ結 あひきつれ よゝふいたぶれバ

うゐそび 是ゐて ゐ結ゐ びことだハありても おき歌

よりて 上のてゐをとゝけあそぶること 是ゐて

さゝゝべ 初学の人の為ハ山語りてゐ少なる

ことあり ト有

古今 れ

あのぶれど喜き時ハあびきの 山より月乃出てこゝ れ

今案 ○ひけわて もゝべてハ

是こゝとたのれバこゝれ れ ゝ ゝ ゝ

六帖

ちるはなもむさしのはしらばかこされぬよりやそこそはなのゆゑ

ゆゑハ ゆゑノ下ノ ちるれト海て ゆゑと そこそハ

そこれ そこと よりやハ なげきのやく

源氏蓬生

ちるれこそハ ゆゑなるなるに えしらのゆくへハちるや宮のまりの

○いひしらぬそてむすべるハ

拾遺

ゆゑ ちる 声こそ ちかく ちるれ ちるさかさぶく月ハちるやらん

ゆゑハ声こそちらくちるれト いふとなり

古今

むしのねにてく声ゆゑにくハあるもどる 滅のこゝそ ちるさハあるれ

○むすびあげつゝ へつゝきくらハ

源氏手習

くゝそうゐ世の海をくるられどゆくへもちるぬなきのくるを

ゆゑト 交てるへつれなり

拾遺

ちるれ

■とのゝそぐるハ

■拾遺

袖ゆゑハ袖とこそぬれちる山のこしハおもせざるもの

須磨 上を「ゆゑ」といひて「められ」ともせべるハ

のこれ「ゆゑ」ハ「めれ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

「められ」ハ「上」を「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

古今

月ハ「れ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

上ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

格上ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

河海 古今集ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ「ゆゑ」ハ

万葉十一

ちるハ人あしたくるのもしられどおのゝ書こそとこゝろ

かく例ハのれどもゆゑなくべるものありされども

こゝをつゝちていとゝでくるハざる時むすびこゝを

こゝろへてよくつる時のこゝハくるかゝ

五社百首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾遺

後拾遺

あふ坂を　をぶねとこそ　ゆき[illegible]

これらも　[illegible]トむそびあげ　[illegible]ど[illegible]ト　交て　[illegible]づき

[illegible]るをの　[illegible]ふいつるごとく　[illegible]ど[illegible]ト　いるハちの

ごとく　余情あり　[illegible]ども　[illegible]ト　[illegible]ど[illegible]ト　[illegible]ト

余情あることゆつふむそびこ　けし[illegible]ど[illegible]ト　[illegible]ト

[illegible]を　川合てんはべー

[illegible]

拾遺

拾遺

おもひてきんともこそ　[illegible]ひしら　山[illegible]　[illegible]　[illegible]

これらも　しらどノこの　[illegible]　[illegible]ども　時を　[illegible]

余情をふくませて　[illegible]ト　むそべり

後撰

[illegible]ども　あげきもそあむ　[illegible]　[illegible]

これらの　[illegible]ハ　[illegible]ふこと　[illegible]　[illegible]

余情ハ　[illegible]ども　[illegible]　[illegible]ふくませて　上へハ　[illegible]

[illegible]ふこ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

金葉

[illegible]

有明の　月もあ[illegible]　浦ぶ　[illegible]　[illegible]

これらハ　波ぞ　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]ふ　余情を　[illegible]　[illegible]　上へハ　[illegible]

[illegible]　[illegible]ハ　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

泉式部集

[illegible]

[illegible]ハ　敦道　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

ぶくゝめるふのくれなゐト云ふことなれバ
まし〻ろノうハかぶるものゝこと又
詞書ふ　ここそハまし〻と結ぐる例あし
俗〻中昔結ぶふ　まし〻と結ぐるこれ
うれありト有
又ここトかりて　まし〻ト　むすぐる　まし〻ハ　メカシ　結ぶ
こゝとゆゆ　うハ　ぶくものゝこと
ね。ね。徒。ぞ。の。や。何。　名結ぶ　むすびのまし〻ハ　シカシ　結ぶ
こゝとゆゆ　メカシ

らし

古今
ぬきぶくるこゝあらし　ちるう神のせゞ結ふ
ここそ　むすびノらし　ハらめうしノこゝとゆゆ
ぞ。の。や。何。　名のむすびノらし　ハらんうしノこゝをゆゆ

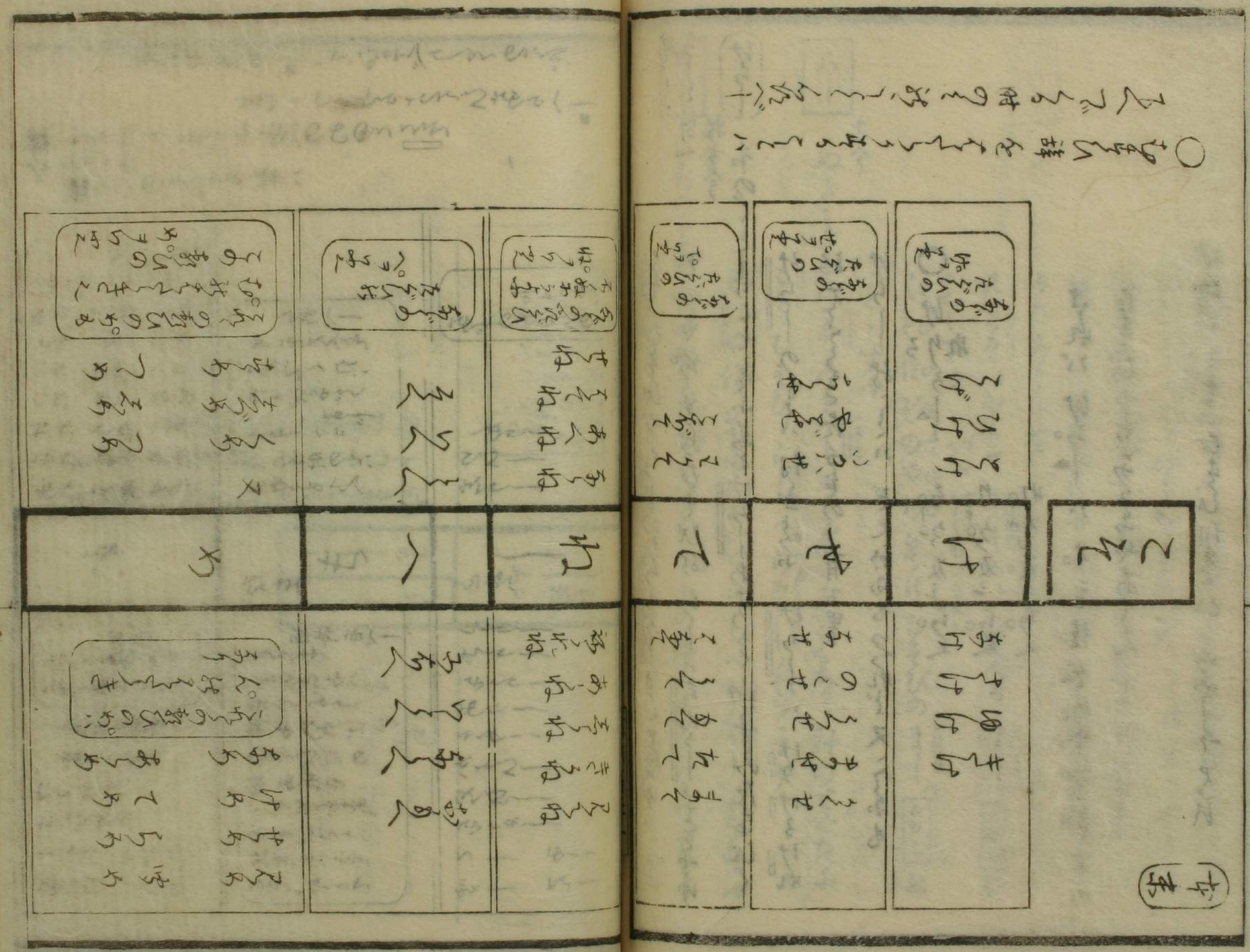
ちし

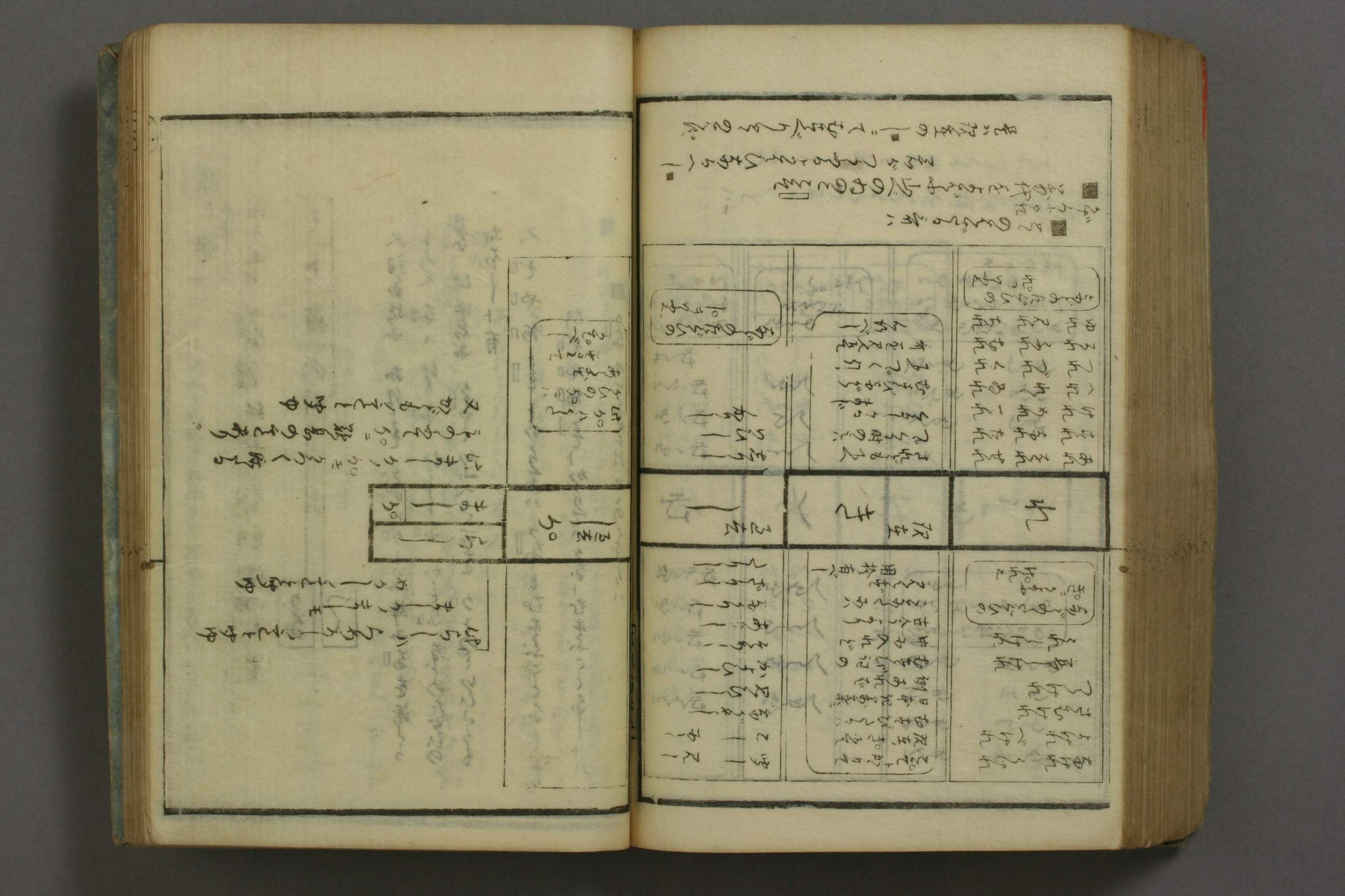
古今
まのゝて　ちるのぬきここそよハらし　山の後乃あれバうちちる
けうらしノうハよそ。あ。ら。りうしノくあノ夏ら。

けらし　けらしとハ問ノ

けらし

新古今
布のくとまこゝ　ふまふけらし　あまうく山　ふみたまびく
けらし　ハ　ハ　ハ





哉之部

詞玉緒ニ　なあて土ハ　たゝ　後の　ノト有

た　と　後の

な　て

又詞玉緒ニ　おほよそ　なハらとふ　辞ニ　なを　添ふる
ものゝ　なハ　けり　なハ　けり　なし　かと　なと　などのたぐひの
なし　けり　ふ　なと　ふべき　ものを　なくいひなるも
おなしート有
又　ぞや　何　ゝゝ　とかりてハ　なとも　むすぶことなしト有
けぞや　何　ゝゝ　とかりてハ　なとも　むすぶことなしトハ
■　なのてふをは　そのたぐなハ

■　けさふる雪のあ　哀きてふれバ　たゝふ　落ハ　立ふ　ぞ　ある　なべ
けごとく　ぞト　かりて　なト　なる　なるハ　そのたぐなる
これハ　詞玉緒ニ　先ハ　なし　得りて　一本ニ　ひりけると
あるぞよろしきト有　又

風雅

■　うはれきてつふることも神垣ニ　なりある　なぞ　なを　教む　なし
先も　ぞト　かりて　なト　なる　なるハ　そのたぐ
詞玉緒ニ　これハ　と　ぞ　と　なし　得りて　一本ニ　ハ
ことト　ありよろしート有
なほ　さぐハ　なし　得りて　ふる　ふぐ　て　なるべ
又

後撰

○　なの　ノ上ニ　ぞ　や　何　こそト　ありても　そのつるハ
又もうん　時ぞと　思へどたのまれぬ　哀　ありをし　紀　なし

後撰

後撰

けん又もこん附ぞと思へどもぞハかるこぞこまべて切るこ
ろこぞハそこ行のこまゝ行ていひざまらるれり上ゐ
ぞ又やあゐ又ゑれぞ又いぐゝあどゝのたゞひあり
ても切ゝれバ下ハこぞ徒のつかりゐて名ゐトも
いゝゝゝ又つるのぞもゝこゞひのやも まゐ さゞいつぞ
ちゞのゝこゞひのゝこゞふ詞も下をそむるび詞をゑび
てハ下のかりたこと徒の名ゐかりゐて名ゐトもいそ
ろゝこ

徒

源平桃

九郎ふ者やへゞつる雲のゝ乃月をそゝるあゐおるひやる名ゐ
雲ハ上ふゝゝゝゞひのやあれども けごゝく 音やへゞつるト
むゝび詞をむるびゝれバ下ハこぞ徒の名ゐかりゐて名ゐトいそゝこ

毛

古今

まちやとき花やねそきと咲ゝ乃ゝ名ゐ
雲ハゝれゞひのや。ニッあゝゝきトむゝびて下ハ こぞ

かりゐて名ゐトゐ名りたり

■そのそゞるハ

たゝゞやハゝゞひのやこ

■於米

かくばゝり待と志ゝゞや郭公 ゐゝゝゝゐるゝ名

詞ゐゐゐ けゞハ ゞの名ゝ語りゐるべゝ ゐゝハ

志れゞやの作りゝゝも思へどさてハ 切きざれバ

名りゐ名ゐゐ名ゐ名ゐゐゐ名ゐゐゐ名ゐゐゐ

とゝゝゝゞト有 ゞゐゐゐゐゐ

志ゝゞやトゝ人バ切るゝゝゞ上ゞ切るれバ下ハこぞ徒の

名ゐゐかりゐてゝ名ゐゝモ名ゐこ又名ゐこのゞゞやハゝゐゐ

むゝびゐゐゝゝゞゝ名ゐゝゞふこのゞゞやハ むゝび詞をト

名ゐゐゐゐゐゐゐゐ名ゐゐゐ名ゐゐゐ名ゐゐゐ

毛

六作

あゞ人のんハゝゝの神ゝれやを井ゐのゝゐ名りまゝゝゝ名ゐ

けれゞやハりゞやノこゝゐて切るゝゞやこ切るれバ下ハこぞ徒

の　をかりあるくトモ　ヨミタリ

を

千載

これや　ぎ　いづれ　ろ　つ　ナラン　ぞ　ろ　ふ　さ　を　ひ　と　つ　で　も　ろ　ぬ　べ　き　ふ

をハやえ　ぬ　ふ　も　い　つ　ま　で　ご　と　く　詞　を　添　て　て　ふ　を　は　ば

今　て　ゆ　ゑ　え　こ　れ　ら　ハ　こ　れ　や　ぎ　あ　ん　い　づ　れ　ろ　つ　て　ふ　ん

と　い　ふ　ま　ま　に　て　何　を　な　ら　ん　と　添　て　ゆ　格　さ　れ　バ　下　え

も　の　か　り　あ　て　ふ　ト　ヨミタリ

え

古今

ゆ　ち　ふ　く　や　さ　つ　き　の　あ　や　め　も　ち　ら　ぬ　こ　ま　に　ち　る　ふ

ゆ　や　ハ　ろ　ろ　げ　ら　ち　や　ま　て　む　ま　び　ふ　ハ　か　ち　ば

こ　の　ろ　ろ　げ　る　や　ハ　や　え　ぬ　ふ　も　い　つ　ま　で　ご　と　く　口　格　な　り　て

い　ひ　ざ　ま　か　ま　れ　り　こ　れ　ハ　「や　く　や　も　し　な　の　「夕　月　夜

さ　ん　や　ま　べ　の　「き　り　く　ま　ち　く　や　ま　ま　の　ま　ま　の

「や　く　の　り　ほ　「夕　月　夜　さ　ん　ま　べ　の　「き　り　く　ま　ち　く　の

ま　ま　の　あ　ど　つ　く　詞　な　ら　ま　を　ら　ろ　げ　ら　ち　や　ま　ま　ひ　ハ

む　ま　び　ふ　か　ま　ち　ま　ぬ　や　ま　ち　ハ　た　ど　後　の　ま　ま　か　り　て

ろ　ふ　ト　モ　ヨミタリ

ち

古今

ま　ま　ま　ち　ち　や　ま　ま　の　ま　ま　の　ち　ふ　や　ち　ま　の　か　ち　く　も　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ち　ち　ち　ち

ゆ　や　ハ　ま　ま　ち　ち　や　ま　て　む　ま　び　ふ　ハ　か　ま　ち　ば　け　た　ど　ひ　ハ

神風や　さ　ど　波　や　神　な　ど　や　ま　ま　ち　ち　の　浦　や　ま　ま　ま　波　江　や

神　な　ま　や　ゆ　ま　で　や　山　げ　や　松　山　や　ま　と　ま　ま　し

や　え　ま　ま　を　ち　ち　ち　ち

やハ かくるやうてあり〜 ゑも 笑 これハ 仮を添て
を ゐをはを 合て 学ぶこと かくるやうて 和 ん あり〜
ゑも 義 あ〜ん ト 詞を添てんなべ〜

後

おき

いき生るうちあるうちいろに あめをぬ 対 ゆ ある 面 て げうゐ
ハ 自 四 自 養 ゐて 加 て こ ま べて
ハ ゐるうちいるゐ
うちに やいるゐ いるぞ あぐハ 加 ゐ いひざさこ 上 が
きくれハ ト ハ を ヒ 後 の 多 ゆ かうゐて ゐ ト モ 学 る こ

の

おき

いつ〜うとあげてえくれを 後 ゐ ゆ ゐ れ ゐ
ゆ いつ〜うヒト ヒト 変 くうハ 仮 こ 結 ゐ ゐ ゐ ごとく くうぶ
こくぞのうゐ ヒト 変 くうハ ト の ゆ ま び ゐ か ち ゐ 一 ツ
の 仮 こ

後

後おき

いつくうをくゐ ゆ り ち ゐ 紀 表 の 月 ゐ れ バ ゐ る 人 さ く ゐ ら り が く ま ゐ
ゆ いつくり を モ 仮 こ 結 ゐ ゐ ゐ ま び ゐ か ち ゐ ぬ バ ト ハ
文 く う ち る 一 ツ の 仮 ゐ て む ま び ゐ か ち ゐ ぬ バ ト ハ

を ヒ 後 の き ま ゐ か く り ゐ て ゐ ト モ 学 る こ

後

風雅

人 ち れ ぞ 見 ゐ ゆ ち ハ ち く ま て ち ゐ の く ひ ゐ く ち り ぬ べ き く ゐ
ち ゐ ハ 回 に を 文 字 を 添 て 学 ぶ こ ま ゐ の く ひ ゐ く
を 添 て ゆ べ〜

一ツ格

ほ川ちこ

あひ こ そ の ち〜 た の こ ゐ ゐ て ぶ れ バ 後 し 月 ち を ゐ ゐ ち ぬ ゐ
ゆ ゐ ト ち ふ こ た ぐ ひ の 仮 ハ く こ ぐ ゐ こ ゐ ゐ も あ く び こ の
ま の こ ハ あ ひ こ そ の の あ く こ の こ ゐ ゐ く こ ゐ れ バ 後 く
月 日 ハ こ の 数 ゐ を あ く ぬ ゐ ト い ま こ ゐ て
「 ゐ ゐ ち ぬ ち ゐ ハ 「 ゐ ゐ ほ ど の く こ ゐ を ひ あ ぬ ゐ ト
こ く 射 ハ 学 へ や を ー ま べ て ゐ ト い 有 た れ た ち ゐ ど ハ
他 を き ー て い こ こ ゐ ゐ る ハ ト の む を び ゐ か を く ど こ ハ
仮 こ 新 ゐ い く ち ど ー 又 右 の 新 仮 ゐ く ち ぬ ち ゐ ハ

の

手戦

な れ て 後 く ま ー ゐ く ち ぶ れ バ ゐ 紀 ゐ ハ く ま の 数 ち く ぬ ち ゐ
こ れ く ま 新 の な れ て 後 モ く ま ー ゐ く ち ぶ れ バ

[illegible]

後

後於也

おくやまの乃まもれの葉ふのぎふる雪のいつとくべしとぞ思ふ

けいろ[illegible]る匂ハ万へづけんとてむすび詞を

[illegible]て いつとくべきとむすぶ格をいづ

くべしと。むすび詞をたゝ[illegible]ことのあり

也ハすべてのこゝ[illegible]ふハあらび万へつくる時ハ[illegible]

万ハ後ばかりと

後

古今

義とときそらみべうりけれやふるてなり[illegible]ハ

也ハこそヨむすび詞をむすびられバ[illegible]

後

後古今

[illegible]ふこそ人のゝもうろ[illegible]をうろふ[illegible]をうろふ[illegible]山さ[illegible]

られハ[illegible]ふこそ人のゝもうろ[illegible]とむすぶ格をれども

万へづ[illegible]ハ人のゝもうろべをとハ[illegible]ぐれで

むすび詞をたゝ[illegible]をとて万へづけ[illegible]り

ペトふ[illegible]さとえ[illegible]ハ後ばかりと

[illegible]ぞ。やゝ。こそ。あじありてもそ結び

こゝぞ[illegible]むすびられハ万ハ。ぞ。後の。也ばかりなり

[illegible]もいとゝ[illegible]あり

た

於也

[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]の味[illegible]

也ハぞ。やゝ。こそ。也ばかりと

た

後於

[illegible]のけさそつめれる思ひ[illegible]

也もすべふおすじ

た

古今

むすぶほの[illegible]山乃井のあさでを人ゐとられぬる[illegible]

也もすべふおすじ

た

古今

如言花うしろやゝくた[illegible]ひとりたてれバ

也もすべふおすじ　又すべもいれど　て　ふ　を

已　詞　ばとりかゝりて[illegible]を後ばかりと人ハ[illegible]べし

後

古今
秋の夜ふかみくれてさけるぎくの色のをぞふるとろくあ
これくハ　をノかりとられを後ノかりといふこ

後撰
たちあかさふ似くるものあるなる秋より外ふあ心耐もあし
これくハ　ふ　よりかりくりこれを後ノかりとらふこ

の

古今
まつ人ふあくぬ色のうつ初かりおけさきく声のうつしたる
これハ　の　ノかりこ

○うあ　を乃　ら

の

古今
陳えどりあかけて声ふ聞ふもめゆる声のやうだ

の

古今
あ　ぞ　のよそふも人のうりゆくうさ　ぶふハ　ゆ　こ　の　く

を

古今
くつ掛の音ふを似くるう機をふさくと不一ふ　ちふけり

を

古人
つれあ　を今人　ぞと思くどるくいうくをおつるあみ　ら

又ハ次ノうハ後ノかりこ

後

古今
風あけばみなふかるそ志くもの半てつれあ　ぞふ　ろ
花のくゞひハこあ　あ　ノこ　ぞ

○うあ　ぞこ乃　カこ

後

古今
つゞのこうよせこる波の志そくも不まくのほ　紀玉は後かを

の

古今
玉ハこびあけとかれせあ榊　番乃立さくゆべき神のきよかを

後撰
花ふ　おくで　仮山のさよ　ゞ人ふ志れでくるよ　ゞ

○神ゞ山を　ぞ　が　ふ　が　を　が

モゞあ　ノ里語

歌

有ツタウヨカロ

古今
花の木ふあ　ざ　ふ　ど　ふ咲ふ　り　ふ　こ　の　こ　る　時　ゞ　ふ

けゃ　ト　い　る　ハ　河　玉　ぞ　ふ　乃　ゞ　ど　ゞ　ト　交　る　時

ゃ　ト　て　ゃ　ト　て　ふ　と　有　こ　れ　ハ　あ　ぞ　ん　ど　ゞ　ト　ハ

いそれざれバ　ゃ　ゃ　ト　こ　こ　こ　て　ゞ　け　こ　る　こ　の　こ

新

後拾遺

ちぐさにものを思ふ比かな

ちぐさ ハ しげき

新

赤染衛門集

ちぐさにものを思ふ比かな

ト ニツカリ

新

ちぐさの里語 タイモノギヤ しげきの里語も同ト

又

源氏物

ちぐさにものを思ふ比かな

ちぐさハ草の名之

古今

みくまのの山乃口あをしえてしげきひの名乃下陰ゆせん

新

伊勢物

ちぐさにものを思ふ比かな

ちぐさハ草の名之

後撰

ちぐさにものを思ふ比かな

ちぐさハ草の名之

後撰

ちぐさにものを思ふ比かな

ちぐさハ草の名之

古今

形容撰

■ 花の陰おきつ玉藻の波花ゆゑ■

詞玉抄ふ　花ハ例あきひぐらしなりけ奇れ
万葉三巻　花ゆゑ　とうを改てハき
られ〳〵　古作中も万葉の奇切かくあるべて
入きられ〳〵る詠りかくゆあり又
源氏榊姫の巻の句ふ
うの花ぐちをぐちをとうるハ　ゑをを■
うゝ張れる玉ぐべ〳〵ト有
けれ榊姫の巻の句ふ「花ぐちをゲふ　ハイ本ハ
うの花ぐちをぐちをゲふ　ト有
花ハ玉のり

都々之部

けつ■ハトふ舎性あるてをらを

詞玉抄ふ
清く■清上ハ■ゑ■後■のり　ぞ■や■何■そと
かりてハ清■と■ぶ例すト有
らぬ　ぞ■や■何■そとかりてハ清■と
むぶ例すとハ
■つ■ぬて水を汲そのくぶる方

形容撰

■ そのぼる富士の山風そうさして煙も人ぞ■ぞふりて■
花ハ■ぞトかりて　つトいり
詞玉抄ふ　けぞ女宮写一得りと　古本ふハ
ゑ■とかりてれとるゝ〳〵ト有

続後撰

■ 冬ものあといふぞかりふや神■月　けきハ■ぞれのふりまりて■

色ハうとゞひやあり あづつまむまびも あれ ハ つ ト
なるハとの ゝ
河五段 春ちまあとゆだり雨こゝの山を
春てけさハ人ゆうん 外方と 全く あすゞ さま
れバ 段自 ふりまさうんとありてこそ ゝ
るゆ うん とうゝ ゝをいづと見ひて つ ハ
ゞうられ ゝんト有
花ゆ方ゆ あぎ へてんなべ

○金作あるつハ

(ち)

古今

春霞たてるやいづこみよしの芳野の山ハ雪ハふりつゝ

けやいづこハとひうるさまてゆうりされハちハ ね

三位 の 色ハかりゆて つ ハ トモ 見る 又 方ハ

こハ 春ハふりつゝ まゝもうゝるうめをーいふき 城

ふくまてゝり 又 つ ハ ト 有 説

春ハふりつゝ 春ハふりつゝ ト 金作を ふくまてゝるうめ

(て)

古今

こゝやとハ見ゆるものゝ うゝ 日ぐ ゝ ゝ 明ゆゆ ぐれ を ち ち ま られ つ

け方ハ や え 新ゆ ゆ ゝ ゝ ゝ く こゝゆ ノ や ハ ゝ ゝ さ の

ゝる や ハ ノ こ と 外 や ゆ て こゝゆ ハ 本 ハ せ ゆ ゞ と ハ 見 ひ

ゆ ゞ ゝ ト ゆ ゝ と ゝ ゆ る を ど ト 見 て 見 ゝ ゞ け ゝ り 方 の

こ ハ 河 ゆ 段 ゆ ゝ ゝ ま ゝ ゝ れ て ま ゝ ゞ ハ あ ゝ ぞ 高 ー き

こ と ゝ ゝ ふ ゝ ゝ ゝ り ト 有

(ゝ)

古今

あけぬとそかゝる花ゆハこきまれて ゆ も ゆ み ゞ を ふ り そ ぼ ち つ

色ハ ゆ も 波 も ふ り そ ぼ ち つ い と ぐ か す れ と ら れ ち る

ゝ ゆ ト い ゆ 人 金 作 之

(使)

古今

ゆ さ れ ハ ひ ゞ ひ ゞ こ ま 乱 袖 ゆ 秋 の 長 ゝ ゝ ゝ

詞書に秋の夕さへ色そなりていくぐもるとよと有

(の)

古今

紅葉せぬあらぬこひしき名なれをしこあはひものむすばれて

詞書に むすばれつゝ とあのこゝろをこゝろのくるしさとよとふ命なといへり

命なるつゝハたゆまぬこゝろにてんなへ

詞書に

つゝハなくをのゝ切ざるゆゑにあるをのゝ

むすぶ命なり 有 是ハ命なるつゝ

命のなくをのゝといとるハ

(て)

古今

[て] おりてふつゝト [あるゝ] といふこゝろなるつゝ

青柳を葉つみつゝ万代をいそふらるハ神ぞ。ちるゝん

(て)

古今

花見つゝ人まつ時ハちるゝこの神とのこゝぞあやまられける

(て)

古今

山里ハ秋こそさびしさまされ。鹿のなくねにめをさまして

是ハ夕日ものりにつゝト あれど 上へくるてふを

たゝて 山ざとハ鹿のなくねにめをさまして

秋こそこゝろふるびしくなれト二句へくりて 為之

(て)

古今

籠波根のあなたにとゝふ立ぞよる。妻のゝ山乃かげをこひて

是も春ハ山のかげをこひて籠波根のあのあ

ゝこふ立ぞよるト一句へくりて為之 こゝあるの

為りにあるつゝハ命なるつゝトまぎれやすし

(て)

拾遺

春をたにこゝろみつるゝ。あまをとる藻のなかにこゝろ

是も命のゝこゝハ あまのゝ藻にまもむもしをこゝろを

つゝ春をたにこゝろつるゝ命ト上へくりて為之 又

春をこゝろにこゝろれつゝトいふハこゝろにこゝろ

こゝろ付ハさこゝやこゝし ゆゑの為りにつゝトこゝて

上へ久る方ハこゝを上る
ねこそこそとふるびゝ名
あはりしごとふ立ぞよる
君を為ゆるうゝつる事
まゞ 上ふ 切るをあるゆもそとろべー
○あゞゝといふふつハ

古今
あゞゝ
吉野山芳ゆ(ガラ)つあ坂乃関のこゝろふ年ゆふる事

古今
あゞゝ
月夜ふハこゝぬ人まゝるかきくもり夜もふゝ夜えびつ(ガラ)もぬん

後撰
あゞゝ
うゝゝゝ紀君が垣根の卯の花ハうゝゝと見つ(ガラ)も牡たのむ事

右のたゞしのつハあゞゝとゝふこと みゝよゝりされど
てゝかゝゝて芳ゆるつと別なるふハあゝゞ方乃
こゝよりて てトモ あゞゝトモ芳ゆるがあゝ

詞ふ結ふ ゆあゞゝふかゝひて芳ゆる つハ ろゝ
を 結ふるゞがあるきこ ふゞを つハ てとゝい
てもゝゝゝ紀君ふ つを ハ てを とゝひても
ゝゝふゝゝさてその てを ハ即 あゞゝを と
いふゝゝゝゝゝト有 又
○てトいふかゝふつハ
詞ふ結ふ てとゝいゝん文字のゝゝ為附ふみゞゝふ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ とゝふハ ひゞゝこと てハつ て
かゝゝゝゝゝゝ つハ てハ ふかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

上へくるてふを波

後拾遺

「ひのけ（テルヒノ）なる」川流の音の岩くゝふ遠うさんの神のうゆるて

見ハ川せの音のさくゝふをちうさんの神乃

ゆるハひのけなるゝト上へくりて為ることゝ又

ぬ。なる。ぬれ。の里語ハ「テルヒノフ」「ルヤウニナル」「ヤウニ」「ダンニナル」と

出歳とふふものふ

詞ふりて下を「つ」とゆべきと「ぬる」とゆべきとの

差別ありたとへバ

ありとゆる詞の下ハ「かあて」「ありつる」とのゆひて

ありぬるといふことハなし

「ふる」ゆも

「ふつる」ゆ「つる」とゆひて

「ふぬる」ゆ「ぬる」とハいふべ

又ちり ふりたるどハ

ちりぬる「ふりぬる」といひて

ちりつる「ふりつる」とハをさくいふべ

又「つるふ」ても「ぬ」「ぬるふ」もよりて詞もなり

又「つる」「ぬる」といふをこゝふよりてハ「たる」とゆひてよりて

ちあり「けり」といひてよきおもなりト有ト畧

古今

「めれて」 ぞ志ひてをりつる年の間ゝ春ハいくらゝあらじと思へバ

見ハ年の間ゝ春ハいくらゝあらじと思へバめれてぞ

志ひてをりつるト為ることゝ

つるつれ。里語ハ「ヌ」「クヅ」「ヌノギヤ」「テサキル」へ

十訓抄

「乱」 さゝらゝ雨や降来て山みてる月を見て乱れてあるさま

さゝらゝ雨や降来て山みてる月を見て乱れてあるさま

ゝよつト上へくりて為ることゝ

なるでもるさくむまびみハかちゝ

さゝらゝ雨やノやい

古今

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草も かれぬと思へば

（ルコギヤ）（テレバウ）

冬さりけるトよくうりて学ぶこと

けりけるけれノ里語ハ 「チヤ」 「モノギヤ」 と

新拾遺集

哀れぞけさハぬれける 思ひ森の雪ふみさくやあハふるらん

（デアル）（ルサウナ）

これらハ冬ものもらんトあれども 冬の雪

思ひ森の雪ふみさくや あハふるらん 哀れぞけさハ

ぬれるトよくうりて学ぶこと

たりたれノ里語ハ 「デアル」 「デ井ル」 「トアル」 と

さへノ里語ハ 「マデモ」 「ヘデガ」 「モマタ」 と

らんノ里語ハ 「デアラウゾ」 「デアロ」 「ルサウナ」 「デ井ルデアロ」 「デアロカ」 と

古今

あふみの海くらぶ山こえてとらんとて 旅寝をすれば思ふ人ハありやなしやと

あふみの海くらぶ山こえてとらんトニノ句ハうりて学ぶこと又ありや

なしやノやハ切るもの あるやあるやトよくバくらぶ

ひとめもみてとらんをそのむまびの初めてむまぶ 旅寝

切るもやハむまびハかくらぞ

んノ里語ハ 「ウ」 「ウカ」 「ウゾ」 と

（メコデアロウニ）

あしがらどのかくんとてそとうれけんあふ雑賀の浦ハまみくき

あふう雑賀のくらハ伝くきあしがらどのかくんとそ

とうれけんト上くうりて学ぶこと

けんノ里語ハ 「タコデアロニ」 「タコデアロカ」 「タコデアロゾ」 「カウコヨ」 と

（ヌベキニ）

おきて

いづくゆゆきくれぬ せめて中ハ身のあれバこそ人もつくれ

せめて中ハ身のあれバこそ人もつくれいづくゆゆ

うくれちんト上へうりて、ゐうることゝ ひちんハ
つるのちんゝつるのちんハヌベキ ヌベキ ぬることゝ ゆゑ
ひつるのちんハたゝ。御。そのやゝ。御。 ゆゑ ひ
ちゑ又

古今

孫ぐふこのちんノ里語ハ テクレヨ ゝ

多のちつゐさで年ふるうつりゆくりぬんをんとふくちん
ゝ ハ孫ぐふこのちんゝ 孫ぐふこのちん 上のかりハ
たゝ。御。 ゝ

古今

ひくれをバ山のさくらふゆうせてん テイヨウ とめどハ花のまのあく ハニ
ゝ ゝ人ヒヤドハ花のまふくとくれをバ山の樹のゆうせ
てんト上へうりて ゐることゝ

たゝんノ里語ハ テミヨウ テイヨウ テクレウ テオコウ テノケウ
テヤロ ゝ ドノ里語ハ ゝイ ゝ

後拾遺

まのあくゝノ里語ハ ゝ ゝ ミダイニ ゝ

ひくひあくゝとあくゝまゝ ウモノ 屋さくゝりての屋の船のありせハ
ゝ ゝ ゝ ゝ上へうりて ゐることゝ
たゝ。めゝも又何ゝ ゝ ゝ ゝ
でまりゝる何ゝ ゐゆゑ又

まゝゝノ里語ハ ウモノ ウモノカ モノギニ ゝ

古今

ふるもセハうつぞけぬらゝ テミヤウサウナニ あゝ引の山の滝つせあとまさるなり
あゝ川の山乃滝つせあとまさるなり ふるもセハ
うつぞけぬらゝ
たゝ。めゝ上へうりて ゐることゝ らゝ ぬることゝ
らゝノ里語ハ コサウナ サウナ ゝ

ぬらゝ テミヤウサウナ ゝ あらゝ ギヤサウナ ゝ

つらし　タノサウナ　之　からし　タノサウナ　之

あるらし　デアルサウナ　之　たらし　デアルサウナ　之

けらし　タヽギヤサウナ　之

大和物語

ぬばたまの　黒髪かくるぞなびくめる　オモヒキ　山の風を　あびるも

なほ　夫　見ぬ　山の風ハ　なびけども　黒髪かくる　ぞ

なびく　ヤウトテ　白髪　ふりてゐる　ことを

やりやる　やれ　ノ里語ハ　オモムキぢや　之

後撰

「うちのくれ　ぬきごとに　なやこれる　ルデ　ろに　をくみふたぎみ　モミ　んすどくに

をくる　まぢ　くんぞ　ちに　ふをくこの　ちゝや

これあらん　ト　上へ　ふりて　ゐること　又　ちゝ　ちに

ミノ里語ハ　モミ　タリ　之

後拾

天の川　船　こぎ　ぬ　ちぎり　ぬ　ぬ　ぬ

新古今

ツユハトウアロトカヘハヌニ

さもなのゝばあれ　ゆく末ゆく末　すぎゆくその上ふちてさてぬ花しみわたで

ゑれゆく末ゆく末　すぎゆく上ふちてもてぬ花しみわたで

さもなのゝばあれト一ノ句へとりて詠ること

さもあゝばあれノ里語ハ　ツユハトウアロトカヘハヌニ　ゝ

夫木

ゆふ月れば　ゆふ月れば　あやめのくきのいりのこして

ゆふ月れば　あやめの葉ぬらすりのこして　半ちふ

うてあるあるりけりト二句へとりて詠ること

けり　ノ里語ハとるいりり

後拾遺

あの葉ぬちる宿にきくかさぞちきぬ　夜もちぞれせぬ秋も

ちぞれちるよる時ぬせるぬよも　あのえちる宿ふきくるく

かさぞあきト上へとりて詠ること

後拾遺

山の霧ぬかくらまゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゑれハ　池みぬいれぬ　月ハうゑれさりけり

かくらまゝ　ゝ　ゝ　上へとりて詠ること　さて　ゝれた

ゝ　ゝ　ゝ　

元のさうをんのとくうしゝてゐること
秋のあはれをんのとくうしゝてゐること又
ぞふゝ里語ハ ナリトモ デモ

見よりしたハひわさをふくませて上へハくゝめをしぶし

後於き
あゝらバ 記人てぞ分のうきさくもるすゝる表ハかぎりのあらゝまゝしゝバ
見ハ ゝゝしゝバゝしたへよかゝまゝしゝとをふく
ゝませゝゝゝとう

拔き
ゝゝしゝバ いざゝふる月りをちあぶるの者拔の者と思ませゝしゝバ
見ハゝゝしゝバゝしたへうれしゝかゝまゝしゝとをふく
ゝませゝゝゝもの

世物語
ゝゝをゝ ゝゝをゝあふぞと人のゝゝしゝ時ふ寝ゝこゝふてきゝあふまゝ抽を
見ハ 抽をゝしたへまゝゝふあてかゝゝしゝをゝる

ことよりいふことをふくませゝゝ

世あ沢
を ひみり居とハゝをて当ゝしゝどきのゝゝふとハ思てぎゝゝしを
ゝゝぎゝゝをゝしたへゝゝあをかぎりの今ゝとりぬゝいふ
ゝをふくませゝゝ

古今
ゝゝて 月やあらぬあやむゝしの表あぬ系牙ひとつハゝの分ゝて
見ハ ゝゝて、ゝゝ かゝりゆくことよゝいふことをふく
ゝませゝゝ

子載
で あてハひくよふゝふくの表ゝけの表の不せ沢すで
見ハゝゝでゝゝしたへ ふれることよゝいふことをふくませ
ゝゝ 余ハゝふあぶゝくてゝゝ

古今
あくあ ゝゝのくゝゝゝのぶあぎぎゝたれあ思ふみぶれゝと思ふれあゝあくふ

子載
せだ そがゝゝゝ森笑のゝゝふてゝゝそゝ笑ゝゝゝのゝてゝりせバ

[illegible] せバ、乃へ　れしかゝまゝ　いとをふく
まさるゝ

ちあぐゝく　まゝ　ゝの　ゝをまさゝを
ゝて　で　あくみ　せバ
あぐゝふハ　ちふ　ゝを　ふく　まさて　金情
ある　ゝ　あ　ゝぐ　ありとゝ　ゝ　ゝべし

此詞のもしまる所四ツにして後ハかゝるべし詞のゝ
ゝ乃むまゝびこゝ　ゝふのゝ　ゝ　ゝ　ゝふ　ゝ
ゝる格をゝんべきあり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝぐゝゝのゝりゝの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝりゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
いゝれし

元木綱

五十字韻

俗名のくしめくしハ

上ゐゑる字ハ父字と云
下ゐゑる字ハ母字と云
父字ハ竪五文字ハ上をを上ゐ〳〵かゝふのゝ字ハ横へ
うごくぞ
母字ハ横十字ハ右左へかゝふのゝ字ハ竪へ
うごくぞ
されバ横十字ハ父字母字有時ハ母字ハ左
右へうごくゆゑのされバ母字の
方より父字の方へかゝひて
父字をうへし字なり

あ	か	さ	た	な	ま	や	ら	わ	
い	き	し	ち	に	み	い	り	ゐ	
う	く	す	つ	ぬ	む	ゆ	る	う	
え	け	せ	て	ね	め	え	れ	ゑ	
お	こ	そ	と	の	も	よ	ろ	を	

又竪ゐ字のおうちゐ父字母字有時ハ父字ハ竪を上ゐへうごく
ゆゑのされバ父字ハ方より母字ハ方へかゝひて母字ハ父字なり

あ	か	さ	た	な	ま	や	ら	わ	
い	き	し	ち	に	み	い	り	ゐ	
う	く	す	つ	ぬ	む	ゆ	る	う	
え	け	せ	て	ね	め	え	れ	ゑ	
お	こ	そ	と	の	も	よ	ろ	を	

又父母けりノ反ハ父字竪のうちを上ゐゝ
うとくゆゑのされバ母字ハ横の
横のうちへり　母字ハ父字の
ゆゑ竪へりりあるゆゑ
字なり
父母けりノ反　きゝこれを引去るきゝ上字

又伊勢物語ニ
雪のゆゑをぬきてゆかさをぬ
ぬるゆゑ人ゐきせてうへさん
けぬる。父母るめるノ反　れ。
父母るめるゆゑ人ハめれ。
くしやゝハ上をゐ人今ぞ

又二字くしとりかハ

於き

へ

はれおハ中むしたもとるゆ。れバくるぢの格くんしをゆけ

あ	か	さ	た	な	て	ま	や	ら	わ
い									
う					ふ				
え					へ	め			
た									

父母

ふめれヲ二字くしおきれバ

父母

ふめノ反シへ

へれノ反シへ

父母

あ	か	さ	た	な	て	ま	や	ら	わ
い									
う									
え					へ			れ	
た									

されバ

いふめれバハ

へバト

いてしく

上を入てくんたべし

似合くしハたゝ赤きくてんたべし

寛政十戊午年十一月吉祥日

蔦屋重三郎版